中央公論

第二十年第八號

要目

▲海外新潮 艦大敗の原因△モロッコ問題の眞相

THE CENTRAL REVIEW

明治卅年一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行明治卅八年八月一日



本號目次

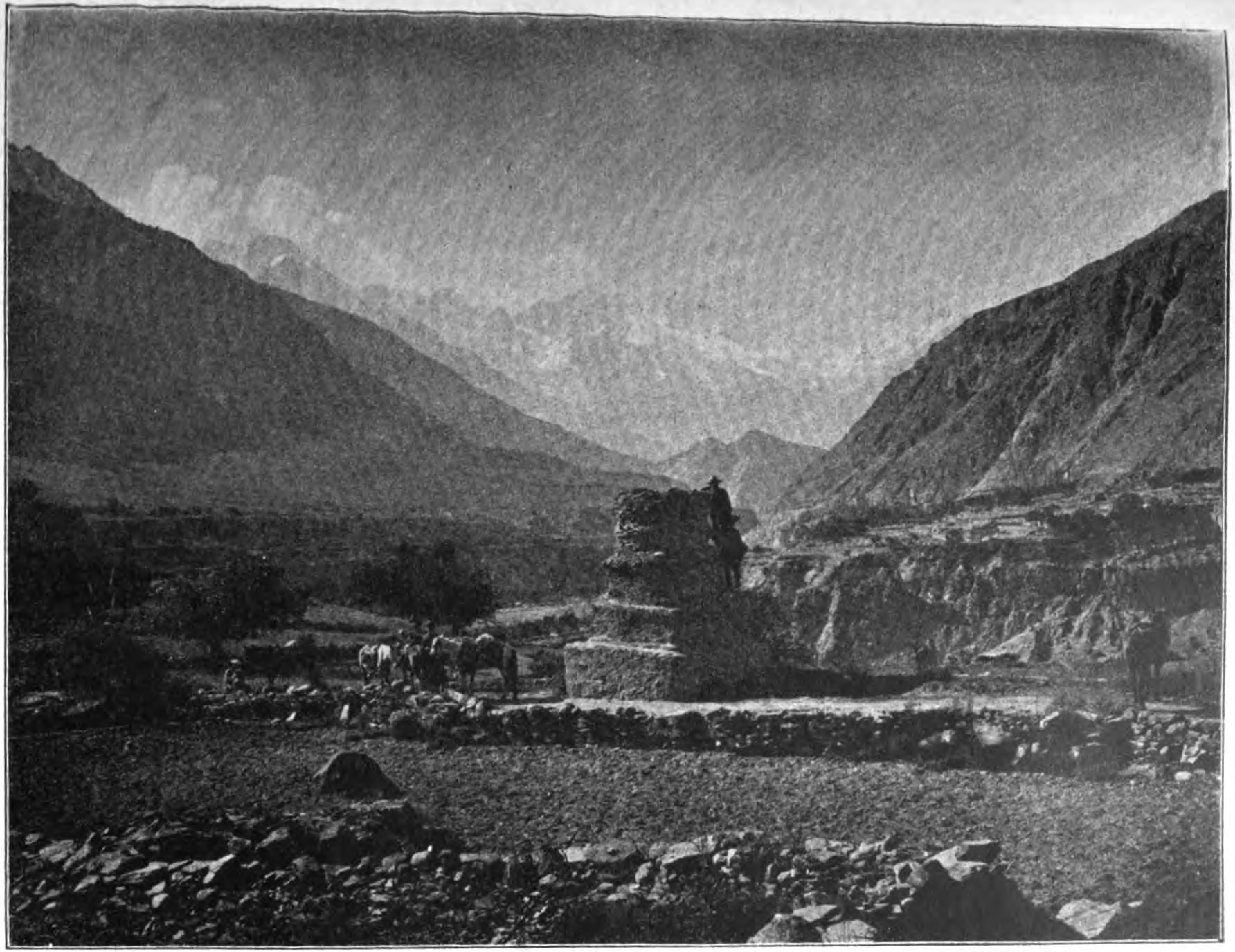
藝文年表

[illegible]

[illegible] ……すべき文典式の年代記なり敢て之を江湖に薦む

發行所　東京市本郷區[illegible]（電話下谷九百十九番）　反省社

賣捌所　東京堂　上田屋　文明堂　[illegible]　[illegible]堂　同[illegible]



グルミツトの廢塔

中央公論



第二十年
第八號

戰勝國民の注意

古の詩人曾て謠ふて曰く『越王勾踐破呉歸。義士還家悉錦衣』と我が連戰連捷の軍人平和克復後に凱旋せば、其の意氣豈斯の如くなるもの莫らんや、否、國民の多數は幾んど皆志氣盈滿。何ものも之に當るを得ざるべし、玆に於てか吾人聊か憂心なき能はず

大戰捷の後に驕泰の來りて識者の大に警戒を加ふるの要あるは、千八百七十年佛國に勝ちたる普國の形勢之を證す、近くば明治二十七八年の役亦稍々之に近き狀態ありき、當時將さに戰終らんとするや、子爵品川彌二郎氏咨嗟して曰く『我が國民が敗戰の苦味を嘗めざりしは未だ必らずしも祝す可らず、亢龍其れ或は悔無らん乎』、唯だ馬關條約締結の後彼の三國同盟の干涉來れるあり、我が戰勝の意氣頗る挫折して、國民皆臥薪嘗膽（此の語まだ當時品川氏が主として唱へたるかと覺ゆ）を稱せるに由りて、幸ひに驕泰其の度を過ぎざるを得たり、而かも輸入超過の趨勢は一時國民奢侈の傾向を明示し、事業勃興熱また度を超えて其の流弊二三に止まらざりき

日露開戰の當初、國民は皆慘として驕らざるの風ありき、其の食膳を節し沐浴を減じて以て軍資を供すべしと做せるが如き其の一證なり。斯くも海陸共に連戰連捷するや、而して外債內債また每度甚だしき盛況を現ずるや、國民の戒心は全く解かれたるが如し。未だ驕泰の風ありとは素より言ふ可らざるも、其の兆候は則ち少しく認められざるにも非ず

想へ、戰爭の慘禍は多くの死者傷者を生じたり、

多くの寡婦と孤兒とを生じたり、多くの賴りなき老父母を生じたり、彼等は啻だ其の精神に於て醫す可らざる大打擊を受けたるのみならず、其の生活に於ても亦大なる怙恃を喪へり、一方には得意滿面の凱旋者と、利を獲て豐頰莞爾たる厚福者あるに、一方には乃ち斯の如き大不幸者あり、此の懸隔の竟に變じて懊惱となり不平となり怨恨とならざる誰か之を保障し得んや、而して此の間に乘じて起る異端また必無を期す可らず、是れ經世家の深く意を効すべき所とす

更らに想へ、戰後我が國は十七億餘の內外債を償還せざる可らず、軍備の缺損を補ふは勿論、更らに又大に之を擴張するの議も生ずべし、國家の地位の高きを加へ、其の職分の繁きを重ぬるに隨つて行政機關も亦膨脹し、隨つて政費の多く增加するは亦幾んど免かる可らざらんとす、而して之を負擔する、一に國民の富力に俟たざる可らず、玆に於てか富力增進の事、洵に一大急務たらざるを得ず

軍人が獨り智勇の名譽を博して、國民の多數、少くも科學者、商業者、工業者が之と相等しき名譽を得ると能はざるは國民の耻辱なり、然り、大和民族の汚辱なり

故に國民は戰後に於て總て戒心せざる可らず、一層節儉して以て富力を貯蓄するを勤めざる可らず、一層其の職務に精苦勤勉して、學者は其の學理を闡明するに於て、商業者は其の貿易を開進し擴張するに於て、工業者は其の工場を整頓し鹽梅して巧みに製產を增殖するに於て、悉く世界的に、悉く唯だ歐米と競ふの決心と施設と無かる可らず、而して一方には博愛仁慈平等の大光明を以て人心を融和し慰藉し奬勵し鼓舞せざる可らず、是れ經世家敎育家宗敎家の切に心を効し力を盡すべき所とす

總ての人は、舊衣を洗濯して之を着るの節儉あるを要す、避暑遊樂を止めて其の職分に盡瘁すると、猶ほ軍人が寒暑を避けずして能く敵と苦鬪し難戰したるが如くなるを要す、聲色を遠け奢侈を戒めて一意唯だ奮勵し努力するを、譬へば軍人が滿州の陰屋陋居に忍び、

障中の不便と艱苦とに忍耐して偏へに敵を撃攘するに努めたるが如くなるを要し、蓋し日露戰役は我が國有史以來の大事にして、國運の趨向將さに應さに一轉せんとす、日本をして眞の世界の第一等國に伍せしむると否とは今日國民の決心如何に繫がる、東郷提督の日本海に敵艦隊を邀擊するや、軍艦三笠の檣頭高く信號して曰く『皇國の興廢此の一擧に在り各員其れ奮勵努力せよ』と、吾人は更らに此の信號を標して以て我が五千万の同胞に絕叫せんと欲す

今乃ち早くも淫靡の俗を長じ、驕泰の氣を生ずるが如きあらば、吾人或は恐る、詩人の所謂『宮女如花滿春殿。唯今唯有鷓鴣飛』を哀唱せざるを得ざるに至らんことを

ウヰッテ論

露國の大政治家にして又世界第一流の政事家と稱せらるゝウヰッテ氏、今や其劣等國と目したる日本に對し、自から敗國の代表者として講和談判を爲すの地位に立てり、其の志や實に憐れむべし

然れども自から蒔けるものは自から刈らざる可らず、ウヰッテ氏が今の地位の立て日本と媾和を爲さゞるを得ざる、皆自から招ける所あるのみ

西伯利亞鐵道の敷設に鋭意したる者は誰ぞ、西伯利亞鐵道を分岐して(寧ろ變化して)東淸鐵道を敷き、其の終點をダルニーと爲し、茲に巨億の資を投じて一大商港を經營したるは誰ぞ、哈爾賓を第一停車場と定め、茲に驚ろくべき大規模の經營を爲したるは誰ぞ、鐵嶺、奉天、遼陽にも亦多くの經營を施して之を露化せんと欲し、東淸鐵道の繁昌を計るがために淸國關外鐵道の奉天に聯絡する豫定を妨阻したるは誰ぞ、總てウヰッテ氏其の人ならずや、ウヰッテ氏は此等の經營のため、其の地位と勢力とを利用して多くの外債を起し、財政上有らゆる遣繰算段を試みたるにあらずや。旅順口ダルニーの租借は素より一種の陰謀に成れるものなるやも知れず、而かも此の陰謀の結果を利して一大不凍港

を東亞に立てたるはウヰッテ氏ならずや、ダルニーの經營を半途より放棄して旅順口の大經營を爲したるは素よりアレキシーフの立案なるべし、而かもウヰッテ氏亦之を承認したるヿは爭ふ可らず、當時ウヰッテ氏は遠く來りてダルニーを視察し、且つ旅順口經營費の支出をも爲したれば也。ウヰッテ氏は其の秘書官が辨解する如く日本と抗爭するを非として滿州撤兵の實行を主張せしなるべし、然れども露國政府者の多數が氏の主張を聞かず、却つて手を韓國に伸べて諸種の壓抑を加へ、且つ鴨綠江の森林を伐て暴利を貪ぼらんがため、無遠慮に龍巖浦に占居したるが如きは、畢竟東清鐵道布設せられ、線路の左右數哩の地域、鐵道の租借地として事實露領となり、啻だ此の租借地域のみならず、煙台炭坑も撫順炭坑も、遼陽も奉天も、新民屯も昌圖も吉林も總て事實に於て露領と爲り、若くば爲りつゝありしが故ならずや、而して東清鐵道をして斯の如くならしめたるは實にウヰッテ氏其の人の施設ならずや、而して竟に日露の開戰を餘儀なくせしむるに至りしものウヰッテ氏に非ずして抑も誰ぞ

ウヰッテ氏は又開戰に反對なりしこと事實なれども、唯だ開戰を尙早としたるのみ、故に今媾和論者の如くなるも亦後年を俟つて戰ふべしと做すものなるやも亦測る可らず

露國のために謀るに、今直ちに和するを上策とす、平和後は勿論政府の威信地に墜つべし。曾て主戰派たりし大公貴族政治家等はその地位を保つヿ實に至難なるべし、否、露帝と雖も其の威信を保つヿ恐らくは甚だ容易ならざるべし、隨つて諸種の陰謀宮廷の內外に演せらるべく、一時は黑風暗雲クレムリン、ザアスコエヤロの四邊を包繞するもまた知る可らず、隨つて革命黨の如き何等の運動に出づべきや、露國內の形勢殆んど瞑濛として判知す可らざる也、苟くも一念茲に及はゞ。露國の平和論者と雖も衷心少からざる危惧を懷かざるを得ざらんとす、巨額の償金を支拂ふよりは寧ろ之を軍費として更らに戰爭を繼續すべしと主張するものある、また強ちに偶然ならずとす

然れども更らに戰爭を繼續する結果如何を考察せよ、巴里も伯林も最早戰資の供給には應せざるべし、內國債を募集するの容易ならざる、曩に僅かに第一回を試みたる成蹟に徵しても明白也、彼の正敎會の藏する敎會費を使用せんか、以て半年一年の軍費を支辨するには或は足るべし、然れども斯くしてしも、果して曾て口癖の如く上下相唱へたる終局の勝利を得らるべきや否や、遞信大臣キルコフ公の絕群なる技倆によりて西伯利亞鐵道の輸送力が著るしく增加したるとは事實なりと雖も、而して連戰連敗に由て大に戰線を減じたるため、また一万露里を輸送する困難の幾分を免かれ得たりとは雖も、尙ほ士氣沮喪を極めたる軍隊をして、再戰の勇氣あるまでに大兵を增加し得べきや疑はし、已に全然海上權を領有して寸毫も後顧の虞なき日本軍が連捷の勢に乘じ、衝天の意氣を以て潮の如くに寄せ來るに對して。果して能く防禦を全くし得べきや否や、日本軍は今や樺太を屠りて浦鹽斯德を包圍せんとし、又長春吉林に迫りて哈爾賓をも拔かんとす。露軍が其の兵數に於て之と拮抗し得べきや否やは實に疑はし、若し夫れ日本軍にして追擊を罷めて守勢を執らん乎、露軍は百万人ありと雖も竟に之を破ること能はず、即ち海戰に於て全く敗れたる後、陸戰に於ても到底勝利の望みあると無し、而して此の間革命黨は決して袖手晏坐するものに非ず、看よ、黑海艦隊のポテムキン。ポビエドノスツエツフの兩戰艦は叛を謀りて驚くべき慘劇を演じたるにあらずや、バルチック海の船舶も亦同一企畫を演ぜんとしたるには非ずや、コサック兵すら既に一たび其の叛心を表示したるにはあらずや。同盟罷工は都鄙到る處に實現せられつゝあるには非ずや、彼等は公然平和の來るを以て革命の機會を遷延するものと做し、戰爭の尙ほ繼續せらるゝを希望しつゝあり、露國若し和せずして更らに勝算なき戰爭を繼續せば、其の兵を出すと多きに隨ひ、其の時を費すと永きに伴ふて國內の不平益々增長し、竟に陸軍の叛亂となりて國家全く土崩瓦解せん、今和する時は露帝以下大に威信を損すべしと雖も、尙ほ爲すべきの途二三

にして止まず、更らに戰爭を繼續するに至ては、殆んど國家の滅亡を俟つの外に爲すべきもの一も無からんとす、和するヿ實に難しと雖も、和せざるは則ち全く危き也、寧ろ速かに和して而して後鋭意内治を修めて統一の實を擧ぐるに如かず、ウヰッテ氏は能く思はざる可らず、氏にして若し多くの償金を日本に支拂はんよりは寧ろ之を以て戰ふに如かずと爲すが如きことあらば、是れ露國を亡ぼす也、啻だに鐵道政策を以て手を滿州に伸べ、禍根を東亞に据ゑ付けたる譏を受くるのみには止まらじ

吾人は更らにウヰッテ氏が其の東亞政策の根本より誤謬なりしヿを悟るを望む

世界を包有すといへる所謂彼得大帝の遺詔なるものは其の眞僞未だ判す可らず、假令眞なりとするも、斯かる傳來的志望は文明世界に不通の業也、斷じて之を放棄せざる可らず、而して露國に一大商港を獲せしめんとするウヰッテ氏の政策も、其の誤れるヿ、譬へば彼得の大帝の遺詔なるものと相同じ、ウヰッテ氏が西伯利亞鐵道の貫通を以て西伯利亞開拓の第一要義と爲したるは、恐らくは米人に學べる所なるべし、米國は其の最先に開けたる太西洋沿岸より、中央の殷賑なるシカゴを經て、鐵道を太平洋沿岸まで横貫するため、シラネヴアタの荒野に於て其の目的を達し、之を以て太平洋沿岸の肥沃なる土地を開拓し、且つ米國全土の繁榮を來すものなりと稱しき。而して事實は其の豫期に違はざりき、而して英領加奈陀も亦之に倣ふて同一効果を收め得たりき、ウヰッテ氏の之を學ばんとする、亦一種の識見ならずとはいふ可らず、然れども思へ、西伯利亞にはワシントン州カリフォルニア州の如き肥沃豐饒なる良地なきにあらずや、沿海州と黑龍江州とには、ワシントン州、カリフォルニア州の如き良材瑚石金銀を產出せざるにあらずや。總じて之をいへば西伯利亞には若干の鑛山あるのみ、素より其の住民に供給すべき食物の產出あるのもあらず、ウヰッテ氏が茲に鐵道を敷設したるは吾人何の故たるを知るヿ能はず。或はオデッサの石油を東洋に供給するがためと

する乎、然れども石油の輸送は船舶に由る方遙かに低廉にして簡便也、或は歐露の麥及び他の食物を西伯利亞に供給するがためとする乎、然れども單に此の目的のためならば、西伯利亞鐵道の敷設は餘りに大袈裟に過ぐ、故に西伯利亞鐵道は主として軍用に供するの外、目的無きものと解せらる、露國が侵畧の野心を成就する器械たらしむる外に能なきものと解せらる

適切にいへば、西伯利亞は其の鑛山に於て多少露國を益するのみ、之を除けば寧ろ厄介至極なる廣原也、之を開拓せんとするも到底開拓し得ざる也、何ぞ況んや露國の國情と人民の性能とは斯の如き開拓に適當するをや

此の不適當なる(寧ろ誤謬なる)政策を執れるウキッテ氏は、此の政策の結果の一たる現在の戰局を收拾するため、日本と媾話するの實に自家當然の職責なるを知らざる可らず

露國のために計るに、其の東亞政策は根本より之を放棄するに如かず、眞に露國の急務とする所は、其の國內の統一を完全にするに在り、其の政治を改良するに在り、其の人民を敎育するに在り、其の多數農民を富ましめ、其の多數人民をして秩序ありて復雜なる事業に當るに慣熟せしむるに在り、其の黔首を愚にして王公貴族のみ榮譽を恣にし、內は人民を壓し人民を苦めて獨り境土を千万里の外に擴張せんとす、古往今來豈之より謬れる方策あらんや。世界第一流の政治家にして又實に露國の大政治家たるウキッテ氏は、此の點に於て深く省悟するを要す、自から曾て財政上大なる遣繰算段を爲して施せる東亞政策の根本より謬れるとを悟り、自家の失計より生じたる今日の戰局を收拾して以て其の責任を全くし。露國のため更らに適切なる經綸を計るに努めば、ウキッテ氏竟に好個の大政治家たるべし。乃ち日本と媾和する方策の如き總て此の大目的より割出さば節々刃を加へずして解けんのみ

西洋之ストア主義と日本之武士道

藤井健治郎

日露將さに干戈を交へんとせる當時、此の小僮(コワツパ)如何して勝てる者かと、歐羅巴各國の人々から思はれた我が日本が海に於いても陸に於いても、まるで破竹の勢て敵軍を追ひまくり、此の壯漢、如何まかり間違つても負けることはないと思はれた露西亞が、案外脆く、陸でも海でも慘々の體。

此結果に驚いた心は、即ち其出て來れる所の原因を窮めやうとの心。歐米の人々は、戰爭の勝敗は器械力の鋭鈍と、精神力の強弱とに基づくとの前提を置いて、仔細に其兩方面を調査して、日勝露敗の最大原因は、前者の器械力にあるよりは寧ろ後者の精神力にあるを看取したかのやう。

精神力と謂つても二種類の區別がある。一は知力的方面で、一は意欲的方面である。精密にして遺算なく、數理の上に堅實にして小心なる作戰の計畫を立てるのは知力の作用であつて、一度立てた作戰の計畫を、確實に保持し、勇敢に大膽に決行するのは意欲の作用である。

日露勝敗の數の定まつたのは、此兩方の孰れに有のてあらう。我等は寧ろ從來の海陸に於ける敵、味方の戰報を讀んで、兩者共に我は彼に優て居るといふことを信ずるの權利あることを自覺したる者である。併しながら若し假りに兩者の内について輕重を付けるといふならば、或は意欲の作用であらうと思ふ。歐米の人々も亦然か觀察したかのやうである。

日本の意欲的精神力は何、曰く武士道。そこで歐米の人士は皆期せずして日本之武士道を研究し始めたのてある。新戸部博士の『武士道』は、開戰後歐羅巴の各國語に飜譯せられて、其賣行きは何づくとも悽しい程てあるといふことてある。

此邊の觀察はよし中らずといへども遠からずであらう。そこで國内に於いても武士道について云々する者が開戰後甚だ多くなつたやうに思ふ。

或者は武士道といへば一も二もなく難有い者のやうに考へて、我が國民道德の要旨は必ず是てなくてはならぬ。武士道を措いて國民道德とすべき者はないと、武士道をば餘りに善く觀過ぎる結果、其長所と短所と

を取捨選擇するの暇もなく、過去の形をそのまゝに現代に應用しやうとして居る。是は所謂古い壺へ新しい酒を容れやうといふので、不適當である。其理由は雜誌『教育學術界』に『國家道德と個人道德』と題して載せてあるから、序に參照せられんことを願ひたいのである。

又或者は武士道は過去の遺骸であるといつて一も二もなく捨てゝしまはうとする。是も自分の本領、自分の歷史を捨てゝまるで別の者にならうとするので、鵜の眞似をしやうとする鴉たらずんば幸である。又或者は武士道は尊皇を忘れ、覇道を唱ふる所の怪しからぬ主義である。武尊文卑主義であると謂つて滅茶々々に惡口をする。是は武士道といふ名に拘泥して、故らにその名目の上から武士道鼓吹論者を敲き付けやうといふので、餘りに彼等の精神に同情のない、人の惡いやり方である。武士道といふ名目の宜くないことは、僕もさう思うて居る一人であつて、其事は『丁酉倫理會講演集』に說いて置いた。併し言語上の名目のことは如何にもあれ、その精神に至つては、武士道鼓吹論者も、僕等と大同小異であらうと信ずる。

武士道の名が不穩當であるとして、其れなら如何なる名目が宜からう。矢張是迄使ひ慣らした『大和魂』とか、『日本魂』とかいふ者が至當であらう。が茲では、都合上武士道といふ名にしておいて、其意味は大和魂、若しくは『日本の民族精神』といふことにしておきたい。

凡そ何事を論ずるにも其態度が二つある。一つは其事を論じて、其論を直ちに實際に適用しやうといふ實地家の態度で、一は飽迄學究的態度を取つて、其事の直ちに實際に適用せらるゝか否かを顧みぬ理論家的態度である。

是迄國人の武士道を論じたる者、實際家の態度を執つた者多く、理論家の態度を執つた者は比較的尠いやうである。今僕は暫く後者の立場に立つて論じて見やうと思ふ。而して專ら西洋に於けるストア主義とを比較して見やうと思ふ。

さて此兩者を比較する上に於いて注意すべきことがある。ストア主義といふのは或る個人(ツェーノーン)が始めて之を唱道して、多くの學者之に和した一の學說である。我國の武士道といふのは我邦に自然に發生し展開した處の道德である。從て一は事實で、一は其事實に關する理論である。此兩者を比較するのは、雅邦

氏の繪畫と、其理論と、法隆寺の伽藍と建築學とを比較するやうな者で甚だ辻褄の合はぬやうな比較である。

乍去ストアにも武士道にも理論の方面もあれば實際の方面もある。從て其兩者の實際方面を見たならば、强ち比較せられない者でもあるまい。

今一つ注意すべきことは此主義の創唱者ヅェーノーンはキプルスのキチウムで生れた人で希臘人、其衣鉢を傳へた重なる人の內でクレアテスやクリシップス等も皆希臘人で、ストア主義は固と希臘に生れた主義であるが、實際生活に影響を有つて、衆人の間に奉せらるゝやうになつたのは、羅馬に於いてゞある。

ストア主義の哲學は唯物論的汎神論であること。而して其倫理は理性を重んじて感情を絕對的に輕蔑する主義なること、人生の理想極致は、一切の情念を絕ちて寂然不動の淨樂境に住するにあること。人格を重んじて萬人同根平等主義を執りたること。天地の悠久なる大道に則つて毅然として水火の苦を恐れざること。自殺を敢て非難せざること。實際祖師ヅェーノーン以下幾多の學者が自殺を遂げたる事等は、普通の西洋哲學史、及倫理學史に明かなる事であるから、今は茲に之を述べぬ。

唯前に謂つた如く、ストア主義が實際の民衆生活と接觸し、其信念を動かすやうになつたのは羅馬に於いてゞあるから、乃で僕はストア主義が如何やうにして羅馬に入り、如何樣なる影響を民衆生活に與へ、如何なる事情で漸く衰頽するやうになつたかを說かうと思ふ。而して此かる點よりして行く〳〵我が武士道との比較を見やうと思ふ。

ストア學派を始めてとはいへぬが、大に羅馬の國へ輸入したのはロードッス人のパネーチウスといふ人で、紀元前二世紀に生活して居つた人である。此人が羅馬の貴族ラエリウスやシッピオなどいふ人に接近して自分の說を敎へたことがあつたことから、ストア主義が羅馬に其道を見出したのである。併此パネーチウスといふの說に、純粹の、生一本のストア主義といふよりは、ストア主義を骨髓として、プラトーンやアリストテレースやの說を參酌した處の折衷的の傾向を帶びたものであつた。

此ストアの主義が如何なる事情で大に羅馬に歡迎せらるゝやうになつたのであらうか。

羅馬の共和政の晩年より、帝政時代かけて、羅馬

の物質的文明といふ者は實に驚くべきものであつた。羅馬は現今の歐洲全部を併呑して、戰勝の餘威、各地各國の方物は、すべて、羅馬都府を裝飾すべく送られたのであつた。羅馬には東西南北の奇麗であるといふ奇麗な物高價のものであるといふ高價の者便利であるといふ便利の物、一として集らざるはなかつたのである。

戰利品の內で、尤も有効て尤も勿體ない者は人間といふ戰利品である——奴隷其者である。

斯る狀態であつたから、人何ぞ奢侈贅澤に流れざるを得ん、人何ぞ浮薄婬靡に陷らざるを得んやである。

果然羅馬の道德は斯方面よりして、共和政の晩年より、帝政時代かけて、殆んど腐敗の頂上に達したのである。モムゼンの歷史や、フリードレンダーの歷史を繙けば、其如何に甚しかつたかが明かに分かる。それ故詳しく知りたいといふ人は其等の書物について讀むとして、今其一端を述べて見やう。

一席數萬の金を散すやうな宴會は一年幾度とも開かれ、富豪互に豪華を衒ひ、互に競爭して、殆んど底止する所を知らかつたなかつたのである。鶯の舌の羹を食ふなどは此頃の事である。遊伎娛樂といへば例のサーカスに於ける獸の格鬪である。一時に數千の象や牛やを鬪はして平氣で之を見て居つたのである。否唯に獸類のみならず、人間其者をも互に眞劍勝負をさして、今我が都人士が回向院で相撲を見るよりも平氣で血を流すのを見物するのが、こよなき娛樂として居つたのである。思ふだに慄然として顫ひ上らざるを得ない。

こんな有樣は第二ピューニック戰爭以後殊に甚しくなつて、帝政の始め、アウグスチーヌスやチベリウスや、クロヂウスやの諸帝は法律其他の方法で頻りに此道德上の頹勢を挽回しやうと努めたのである。併そは眞に燒石に水に過ぎなかつたのみならず、それが爲めに却てかくれてわるいことをするといふ陰險な氣風を養ふの緣となつたのである。

併此んな有樣が何時までも續くものであらうか。人性の眞面目は何時までも、斯かる表ッ面な抑壓に堪へて居るものであらうか。ロールをかけた麥の苗は、却て非常の勢を以て成長する者である。

パネーチウスの手によつて蒔かれたストアの種は、羅馬に於いて見事なる莠苗を得たのである。此浮薄婬靡、殘忍酷薄なる生活中に於いて、簡朴質素、嚴厲峻辣なるストア主義の生活は漸くに頭を擡げつゝあつたのである。

バネーチウス以後如何なる學者があつたかといへば、コルヌートゥス、セネカ、ルーフス、エピクテトゥス、アゥレリウス等が其重なる者であつて、而かもセネカ、エピクテトゥス、アゥレリウスや等は尤中の尤である。

簡朴質素の生活、嚴厲峻辣の生活、是れストア主義の道德的生活で、レッキー氏の謂つたやうに、能くも此浮薄婬靡の生活中にあつて、其の渦中に捲き込まれずに毅然として其立て前を保持して居つたものである。

簡朴質素の生活、嚴厲峻辣の生活、是亦我が武士道の生活である。建武式目に

一可被行儉約事

近日號婆佐羅。專好過差。綾羅錦繡。精好銀劒。風流服飾。無不驚目。頗可謂物狂歟。富者彌誇之。貧者耻不及。俗之凋弊無甚於此。尤可有嚴制乎。

一可被制群飲佚遊事

如格條者。嚴制殊重。剰耽好女之色。及博奕之業。此外又號茶寄合。或稱連歌會。及莫太賭。其費難勝計者乎。

とある。元弘、建武頃の奢侈とか贅澤とか言つた處が知れたものである。其後義滿や義政が時の費を盡くしたといはれた金閣、銀閣兩寺を見てさへ、あの位に過ぎないもの、況して其以前の贅澤奢侈など、今から見れば敢て贅澤奢侈といへぬ程かも知れぬ。而かもそれを八ヶ間敷禁制した精神は、果して何處にあるかと分かる。

賴朝が部下を訓誡せる中にも、質素儉約を旨とすべきを說き、信玄家法にも之を說き　山鹿素行は

大丈夫内清廉を守らざれば公につかへ、父兄にしたがつて利害此に萠して天性の心を放つべし。清廉と云は外の賄賂内の財貨さらに心に付かずして世人の難行所に卓爾と立て更に不屈之を清廉と云へり云々。

と辨じて、士道を明かにして居る。

簡朴質素の生活が實に我が武士道の理想的生活であつたのみならず、實際之を實現した武士は澤山ある。素行其人の如きも一のタイプで、溯つては最明寺入道の如きも一つのタイプの標本である。

朴簡質素の生活、武士道の生活とは申す者の神世以來の我民族精神の特徵の一つで、無論武士といふ階級に限られた道德でない。是は既に他にも說ひた通り、武士道其者が我民族精神に過ぎないから當然のことである。誤解さるると困るから、一言斷つて置く。此以

外に遁ぶる諸德も皆同じことゝてあるから、其時には一々斷らぬ。讀者諸君に豫じめ御承知を願ひたい。

放蕩贅澤をし盡くした富豪の息子が、一朝其婬靡浮華なる生活に飽いて、却て質朴簡易を喜ぶやうになるやうに、羅馬の人士は一度其惡夢から覺めて、人性の眞面目な方面に立ち歸り、其反動として、ストア主義を歡迎するやうになつたのである。明治の今時に元祿の風俗を夢みて居る人々は何時か覺むべき。併ストア主義が羅馬に歡迎せらるゝやうになつたのは、唯に此反動ばかりではない。羅馬人の深い理想と、ストア主義との間に或る默契があつたのである。

羅馬の人間は實際的の人間である。活動的の人間である。靜坐瞑目天地人生の道理を觀念するよりは、武器を執て四隣を征し、舌を振つて公衆を統御する方の人間である。而かも之が爲めに風厲卓發、祖國の爲めには水火の苦をも避ざる精神のあつた人間である。羅馬の軍、攻むれば必ず取り、戰へば必ず勝つを得たのは、全く此精神があつたからである。

ストア主義は理性を重んじて、感情を輕んずる所の主義である。一切の感情、情緒は、喜怒哀樂愛惡欲の差別なく、すべて邪惡の根本として之を退けた處の主義てある、つまり情海の波瀾怒濤を壓抑して、毅然として自己の節操を變へぬのである。即ち意志の剛强を以て尤も肝要なる德義と見て居つたのである。

此意志の剛强、是れ羅馬人の理想と、ストア主義との間に默契のあつた點である。意志の剛强は羅馬人の生命である。羅馬人士がストア主義を歡迎したのは、是れ自分の生命を歡迎したものに外ならぬ。

意志の剛强、又是れ我が武士道の理想である。生命てある。ストアの主義と我が武士道との間に類似の點がありとせば、是點が其尤なる者であらう。

我が武士道は卑怯未練といふことを蛇蝎視したのである。そは利害の情念の爲に、或は一身一家の私情の爲めに、或は自己の薄志弱行の爲に、守るべき操を售り、進むべき道を踏外づすとをば、尤も嚴刻に、莊重に警戒したのである。武士にして秋毫たりとも卑怯の擧、未練の徵があつたとなれば、彼は最早武士の資格を落し、武士として交際することを得なかつたのである。卑怯だ、未練だといふ噂を立てられたといふが口惜しいとて切腹をした武士さへあつた。

武士の道は忠君である。節義、忠信である。之が爲めには、之を確守せんが爲めには如何なる難行苦行も

何とも思はなかつたのである。忠臣藏や仙臺萩やは此理想を體現して殆んど遺憾ないものである。

山鹿素行氏の士道に

大丈夫の世に在る剛操の志あらざれば心を存すること不能也。剛は能く剛毅にして物に不屈を謂也。操は我義とする志を守て聊か不變の心也云々

と説いて居る。見るべし我が武士道の精神何處にあるかを。

德を最尊最勝の本尊となし、之に達せんが爲めには世の悲痛辛苦何かあらんといふ剛毅の意志を尙んだストア主義は、我が武士道と一心同體と言つても過言でない。

斯の如き來歷てストア主義は羅馬に入つたが、羅馬に入つてから其道德的生活上に及ぼせる影響はこれのみてはなかつたのである。

ストアの主義は一切情念の享樂を絕て寂然不動のアパタイアの境涯に入れるを聖人となし、之を其理想としたのである。

大に羅馬にストア主義を傳導した處のパネーチュスは、凡そ聖人といはれん程の者は必ず此アパタイアの境地に住せなければならぬが、すべての凡人はさうは行かぬ。多少情念の享樂といふ者をも許さねばならぬ。と説いて、從て羅馬の初期のストア主義者たるケートーやシセロやは（此兩人をストア派と見ぬ學者もある）、德を活動と解したのであつた。

然るに後期のストア主義者は、漸く昔の風を復興せしめて、自己吟味を主とし、心を靜寂の中に住するを理想とするやうになつた。餘程宗敎的になつて來て、殆んど我眞宗の信仰に近くなつて來たのである。其代表者はエピクテトゥスやアゥレリウスやてある。

アゥレリウス帝の『瞑想錄』は人世の煩悶苦鬪に對する最も有効なる慰籍者である。僕は不平不滿のある時、心のじれったい時、はがゆい時には、此瞑想錄を引出すのである。レッキーが、此書を評して、『あらゆる書物の中て最も人を沈痛ならしむる所の一つてある。あらゆる宗敎的文書の中て、最も醇美なるもの丶一つてある。』と謂はれたのは、僕は決して過褒と思はぬ。

『運命（プロヴィデンス）』の前に不平あるな、煩悶あるな、是れエピクテトゥス、アゥレリウスやの根本精神て、羅馬の人士は尠からず此理想の感化をうけて居る。

安心立命、是れ又我武士道の精神てある。佛の道て此を得たものもあり、儒の道て之を得たものもあ

る。信仰異るも安命の地歩を得たは一つてある。

素行氏の論中に

凡そ命と指處は人の造爲して不叶天自然に其形をなし、其理其事あらしむる是を命といへり。(中略)。されば養生を盡して命こゝに縮まり義當さに死に當るに至る。是則命也。云々。

又曰く

人として天命に安ずる處あらざれば此に妄動妄作して實地を踏むこと不能と云へる也。云々

其他ストア主義が、其萬人同根平等主義によつて、奴隷制度を破壞し、その人格主義によりて羅馬法の發達を促したなどは、大切なることとである。併し餘閑ないから說くことと出來ぬ。

此人格思想は我武士道に缺けて居る所であらう。是れは已に本雜誌に綱島梁川君も論せられたやうであるし、又吉田賢龍君も丁酉倫理會て論せられて居るし、又僕も既に說いたのであるから。今は省く。

附記　編輯締切期日に後るゝこと二日若し發行日が後れたとせばそは僕の罪であらう。讀者に謝す。又そういふ譯であるから、論じたいこと澤山あるが、それらは後日に讓り、今は茲て筆を擱く。

中立國の港灣に於て武裝を解除せられたる敵國軍艦に就て

法學博士　寺尾亨

近頃諸種の團體に於て媾和條件の一として、シンガポール以北の中立國港灣に於て武裝を解除せられたる船舶を、悉く我國に引渡さしむべしといふ提議をなしたるに就て學理上より議論を試むる人あり。其議論の主旨は、元來中立國の港灣に交戰國の一方の軍艦が寄港したる場合には、其碇泊に關して二十四時間規則なるものゝあるあり、中立國は其時間以上之を留め置くこと能はず、必ず退去をなさしめざるべからず、然るに交戰國の他の一方の優勢なる軍艦、若くは艦隊が之を待ち受けつゝあるに、無情にも之を追ひ出すときは忽ち擊沈の悲運に遭遇すること明かなるが爲め、所謂人道を重んずるの點よりして、一種の臨機の所置として武裝の解除をなさしめ、其軍艦を平和克復の日迄留ることを許すなり。其人道の爲めの所置たる敢て批難すべきにあらざるも、元來其軍艦は中立國港灣より退去せしめらるべきものなり、而して果して其退去を實

行せらるれば、當然對手國に擊沈せらるゝか、若くは鹵獲せらるべき運命に際會するものなり、然るに此武裝解除なる中立國の臨機の處分のため、對手國は之が擊沈、若くは鹵獲の權利を妨げられたるなり、從て對手國は平和克復の日に當りては勿論、或は交戰中と雖も當然其船舶の引渡を受くる權利ありて、殊更に媾和の一條件として條約によりて之が引渡を受くる必要なしといふにあり。

此種の議論は、開戰の當初マンジユール號が上海に竄入したる際、武裝解除の說の起りたるとき已に稱せられ、有賀博士の如き淸國が武裝解除の處分をなして其船を港内に留め置くは、露國の利益を計り、我國の不利益を來すものなりとして其處分を批難せられたり。然るに我輩は其時より已に反對說を持し、目前之を論じたることもあり、其所以は諺にも窮鳥懷に入れば獵師も之を殺さずといふ如く人道に基くものなり、殊に國際法の原則就中戰時國際法の規則は人道に基くものが最も大部分を占むるものなり、彼のマンジユール號の如き孱弱なる一砲艦が上海に逃入したるに際し、吳淞方面には我優勢なる巡洋艦其他の軍艦ありて其出港を待ちつゝありたりとのことなれば、若し之が出港を强うるときは、其擊沈若くは鹵獲の悲運に遭遇することは明々白々たる場合に於て、淸國が中立國家として取りたる臨機の處分は最も人道に適したるものにして假令先例の據るべきなしと雖も國際法の精神に違はざるものなりといふべきなり。尤もマンジユール號事件は只一小軍艦に關するものなる故、深く我海軍力に影響を及ぼさゞるものとして寧ろ輕々に看過せられたるが、爾來其先例に基き數回の海戰の結果、各所に數隻の重要なる軍艦に對し、武裝解除の處分を施すに至れり、是に於て其武裝を解散せられたる船艦最後の處分如何の問題は彼我海軍力の上に於て重大なる關係を有するに至りたり、依て我輩は國際法上當然我國の有に歸するを得るや否やの問題に就き多少考慮を費したり、若し理論上當然取ることを得るものとすれば素より媾和條件以外となす方最も便利なるも、此問題は隨分難問題にして、强て論ずれば或は全く論據なきにもあらざるべきも、必ず學者間にも多くの議論を生じ、容易に決定すべからざるものと考ふるなり。故に我輩は學者論としては後日大に攻究すべき餘地を存しながら、戰後の媾和問題としては其條件の一に加へ置くこと最も捷徑なりと考ふるなり、故に我輩は實際論とし

て各種の團體が之を媾和の一條件に置きたるに贊成するものなり。

學理上の問題としては我輩未だ確定したる意見を有せざるも、今日の所にては寧ろ消極說に傾き、即ち武裝解除の船艦は理論上當然我有に歸すると主張するは隨分困難なりと思惟するなり。今回の如き武裝解除は海上の先例を見ざるが爲め、陸上の例によりて之を考ふるに、交戰國一方の軍隊、若くは士卒が中立國の領土内に逃入したる場合は、其武器を撤去せしめて其人は遠隔の地に留置し、其戰爭中は一切交戰行爲に關與せしめざる所置を取るべきものとせり、而して其撤去せしめたる武器の最後の處分は如何に之を爲すべきかを見るに收容者のため費したる費用賠償の擔保として或は之を留置することあるべきも、最後は之を收容者の本國に還附すべきものにして決して之を收容者の敵國即ち交戰國の他の一方に引渡すべきものにあらず、此點より推すも武裝解除の船舶は平和克復の後に於ても之を其敵國に引渡すべきものにあらざるべし。又今日の海戰の規則に於ては私有財産尊重の原則未だ承認せられず、學者は大に之を論難するも實際上尚之を是認する理由は畢竟敵國の商船も彼にあるときは容易に彼の軍用に使用することを得、我之を取るときは我亦容易に之を使用することを得て我軍に利ありといふ所謂戰爭上の必要より來るに過ぎず、尤も之れは商船に關する場合にして今回の如き軍艦に關する問題とは直接の關係なきが如しと雖も、其海戰たると陸戰たるとを問はず、軍艦、大砲、其他一切の武器を鹵獲し、其戰鬪員を捕虜となすは敵國の戰鬪力を減殺し、若くは之を全滅せんとする所謂戰爭の目的を達せんが爲めなり、然らば其器械たると人員たるとを問はず、一旦中立國の權内に屬し、其戰鬪力を失ひたる場合に於ては交戰中之を鹵獲し、若くは捕虜となすの要なし、又中立國の方面より見るも之が引渡をなすの義務あることなし、斯くして平和克復の日に至るときは交戰國双方共に在來の權利を回復するがため、器械人員の如き其固有の本國に復歸すべきが如し。是れ我輩が寧ろ消極說に傾ける所以なり。（七月十三日口述）

學生の夏期生活の方法

寺田勇吉

歸省は學生の義務——內地漫遊の利益——韓國旅行は緊急的旅行なり

我輩の考ふる所によれば、學生が夏期に於て休業をなすの目的は、主として心身の休養をなすにあるべし。殊に日本人の體格は從來甚だ惡しき方なりしを以て、如何にもして之を健全ならしむるの策を講ぜざるべからず。而して之を健全ならしむるには先づ今日の學生をして健全ならしむること實に刻下の急務なりと信ず。此等のことよりして考ふれば、暑中休暇は學生の爲に必要缺くべからざるものにして、學生は此等に於て一ヶ年內の重荷を卸し、充分心身の健全を計るべきなり。而して夫れに就ては學生が夏期休業の間如何なる生活をなすべきかの問題を生ず。若し其生活の方法にして宜しきを得ざるときは夏期休業の目的を達すること能はざるのみならず、或は却て學生の精神を紊だし、且つ身體を害するが如き原因をなすやも知るべからず。かるが故に夏期生活の方法如何は大に攻究すべき價値ある問題たるを疑はざるなり。勿論此問題に就ては我輩敢て喋々の辯を費さゞるも學生諸君は其利用方法に就て熟考せられたることならんと思惟すれども左に參考として我輩の意見を述ぶべし。

元來人間は各自異りたる希望を有し、又異りたる嗜好を有するものなるが故に、總ての人間を一律の下に論ずることは勿論不可能のことなりと雖も今其通則ともいふべきものを揭ぐれば

第一　直接又は間接に精神に慰安を與ふること。

第二　身體に休養を與ふること。

第三　總ての行爲は道德上の原則と一致し、且つ之がために要する費用は成るべく少額ならざるべからざること。

なり。而して之が爲めには地方の人は必らず歸省すること第一ならんと考ふ。元來鄕里を離れて遠く都會の地に遊學するものは、暑中休暇の來ると共に必ず先づ其父母を尋ぬることを——即ち歸省せざるべからず、父母は居常只其子の遊學中果して健全なるや否や、又果してよく勉强するや否やにのみ心を勞し、終始指を屈して其子の一日も早く歸宅せんことを望むものなる

を以て、何か非常なる支障なき限り、學生たるものは暑中休暇に於て必ず父母を其郷里に訪ひ、己れの身體其他の狀况を直接に父母に示すことが父母に對する學生の第一義務たりと信ず。人によりては歸省するには多大の旅費を要するを以て、此旅費を以て都會に留りて勉强せんとの考を有するものあるべし、是れ一應最もらしく聞ゆれども其實は暑中休暇の本旨に背くものといはざるべからず、勤學といふことは平素に於て已に充分なり、上に述べたる如く暑中休暇は平素の勤學の疲勞を回復し、健康を增進せしめんが爲めなれば、休暇中依然都會に止りて勉强することは甚だ間違なり。夫れよりも父母の喜ばしき顏を拜し、淸潔なる空氣を吸收して明媚なる風光を賞する方遙かに優れりとせざるべからず。加之今日は交通機關も漸く進步し、如何なる遠國にても往復に何等の不便を感ずることなし、况んや學生の如きものに對しては官私の鐵道に於ても概ね割引劵を發行する等のことあれば、我輩は暑中休暇には學生が先づ都會に止らず、父母の恩愛に應ずる義務としても必ず鄕里に歸らざるべからざることゝ考ふるものなり。

然れども世には又父母を失へるか、又は其他の原因により て歸省する必要なき人もあるべし、例へば父母と共に都會に生活する學生も隨分あれば、かゝる人は父母の承諾を經て內地の漫遊を試むるもよし。旅行も其やり方によりては隨分多大の金額を要すれども、又其方法によりては僅少の費用を以て目的を達せられざるにあらず。學生の旅行に就ては我輩は人力車は勿論、馬車も、電車も、汽車も一切之を退け、專ら徒步によりて一日五里位を進むことゝすれば、或は名所故蹟を尋ね、或は田園の風光を賞し、或は英雄興廢の跡を察し、或は神社佛閣に詣で、或は名山に登り、大川を涉ることを得て、地理的、歷史的の智識を養成する効能も決して少からざるのみならず。又人情風俗等についても大に研究するの便を得べきなり。而して此旅行は單獨に之をなすときは興味も薄く、又得る所も少きが故に、成るべく仝行者を選定せざるべからず、即ち適當なる朋友を選んで之と共に旅行することを以て最も優れりとなす。之に就て最も注意すべきは其友人の選定如何にあり、其友人の選定を誤れば啻に利益なきのみならず、却て害を招くことあるを以て是れは餘程謹まざるべからざることなり。

內地の漫遊に續て我輩の殊に學生に勸めんとする

とは本年の夏期休業中韓國に旅行することと是れなり。韓國の經營は今日の學生を俟て初めて完備を告ぐるものにして我輩をしていはしむれば韓國は實に今日の學生の勢力範圍にあるものなり、近來韓國に渡る日本人は隨分多數なるも、軍人以外は多く營利を目的にするものにして、將來韓國を如何にせんとする考を以て渡韓するもの極めて少きなり、今日にては京釜鐵道も出來、又制海の全權は我國にあるを以て航海に危險なきのみならず、旅費を要することも左程多からざるが故に今日韓國に渡りて豫め其土地、山河の形勢、住民の風俗、人情、教育、實業等の有樣を視察し、將來の計書を立つることは多少の資力ある學生の夏期休業の利用方法として最も其當を得たるものなり。我輩は今日の學生にして將來韓國の利源を開發する大任に當らんことを希望するがために之を尋常一樣の避暑的旅行となさずして、緊急的旅行として渡韓せんことを希望するものなり。

寺田氏を訪ひて談偶々學生の夏期生活に及ぶ。氏直ちに其意見を述べられたるを筆記せるものなり(記者)



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と精力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず、

モロッコ問題の眞相

「スペクテートル誌」

現今外交家をして不安ならしめ、新聞紙をして論議せしむる二問題——中立問題とモロッコ問題——中、吾人は後者を以て一層重要なるものなりと信ずるものなり。素より佛國は日本の有なる臺灣に近く薄弱なる印度支那(インドチャイナ)の殖民地を有するものなれば、日本と爭を開くことを願はざるべく、日本も亦露國との戰の終らざるに佛國と爭を開くことを欲せざるべきは言を俟たざるなり。日本は疑もなく佛國の態度に就て憤り、佛國殖民地長が露佛同盟を重んずるの餘り、露國艦隊に對す

る好意の甚しかりしに不滿なるべし、然れども一般の思慮ある佛國民は露國が未だ最後の敗北にまで至らざることを知り、且つ戰爭の範圍を擴大ならしめんと欲するものに非ざるを以て、終に日本をして最後の手段に訴へざるべからざらしむるが如く思惟せしむるの擧動をなすことなかるべし。又一方に於て日本は大英國を爭鬪の渦中に卷き入れんと欲すと想像するものあれども、日本の政治家は今日までよく完全なる自立獨行の態度を取り、同盟國の力を援て自らの弱きを示さんよりは、寧ろ獨力事をなして以て其大勢力となれることをあらはさんと欲するもの丶如し。日本は佛國に向て交戰國に需用品を供給することを拒み、露國艦隊の碇泊を許さずして之を立去らしめ、以て中立規則を嚴守せんことを要求すべし、然れども之が爲めに佛國に戰を挑むが如きことは必ずなさざる所たるべきを信ず。若し躁狂なる國民ならば或は之をなすべし、然れども日本人は最初より今日まで堅忍なる人民たることを示したり。故に中立問題は事頗る重大なりと雖も未だ政略の變動を起すに至らざるべきなり。



THE WAR HOLOCAUST IN ASIA.

Not only money, but men to burn.

—*Fischietto* (Turin).

然るにモロッコ問題に至つては其意義極めて嚴肅なり、何となれば其解釋は未知數——獨帝の秘密政策の上にかゝればなり。一派の杞憂家の疑ふが如く、獨帝が日露交戰中佛國の孤立援なきに乘じ、之と戰を開き、一般獨逸人が熱望する强大にして富裕なる殖民地を得んとするものなりとの說は吾人の與みしあたはる所なり。佛國と戰爭を開始することは如何に軍備の整頓ある國と雖も非常なる冒險事業なりといはざるべからず、何となれば自國の存立の爲めに戰ふ時の佛國人は一般に如何なる態度に變ずべきや、又佛國の危急なる時に佛國を援助する如何なる勢力のあらはるべきや、兩つながら未だ不確の問題なればなり。佛國は已に英國と協商條約を締結せり、故に若し佛國と戰はんか、少くも多大なる危險のあるべきを豫想し、且つ陸軍のみならず海軍に於ても勝利を得んことを期せざるべからず、又墺太利は獨逸の重要なる同盟國なれども、獨乙が佛國を粉碎し、以て獨乙の非常なる膨大を來さんことを欲せざるなり。而して又獨乙帝國内の小聯邦と雖も獨乙帝國が非常に膨大するの結果「帝國の隷屬に非ずして同盟なり」といふ從來の關係を失ひ、一層好ましからざる地位に立たんことを恐るゝものなり。或は獨乙皇帝は其最も嫌忌する英佛協商を破壞せんと

試むべし、何となれば英國は陸に於て其設備完ならざるも、海に於ては到底他國の侵すを許さず、獨帝は未だ完全せざる艦隊を最初の海戰に危險ならしむることを欲せざるべければなり、若し英國にして佛國を援けず、佛國は獨乙の爲めに敗れたりとせんか、是れ實に獨帝の非常なる滿足にして、彼はモロッコ——大西洋に於ける港に於て眞の利益を得べし。又サルタンは其陸軍の爲めに佛國敎育の代りに獨乙式を採用し、將來は其獨立の爲めに佛を去りて獨に依賴すべしとはターテンバッハ伯の意見なりと傳へらる。又最後の說として獨帝は單に埃及、モロッコ問題を決するに英佛の協商によつて彼を除外したることを不滿とし、佛國を苦しめて其復讐をなし、且つ世界の大問題は必ず彼の容喙すべき權利あることを彼の國人に驚嘆せしめんと欲するに過ぎずとするものあり、若し歐洲が獨逸とモロッコとの條約を認め、佛國をして惝惶たらしめば是れ彼の外交上の勝利にして、一毫の犧牲なく、一毫の危險なく、彼の素志を逹したるものなりと。吾人は此最後の解釋を以て最も穩當なるものなりと信ず。(下略)


GERMAN STYLE IN MOROCCO.
Since the visit of William II to Tangier, the joyful Mussulmans adopt a new style of shaving, and swear no longer "by the beard of the prophet" but "by the mustache of the Kaiser.
—*Jugend* (Munich).

露艦大敗の原因

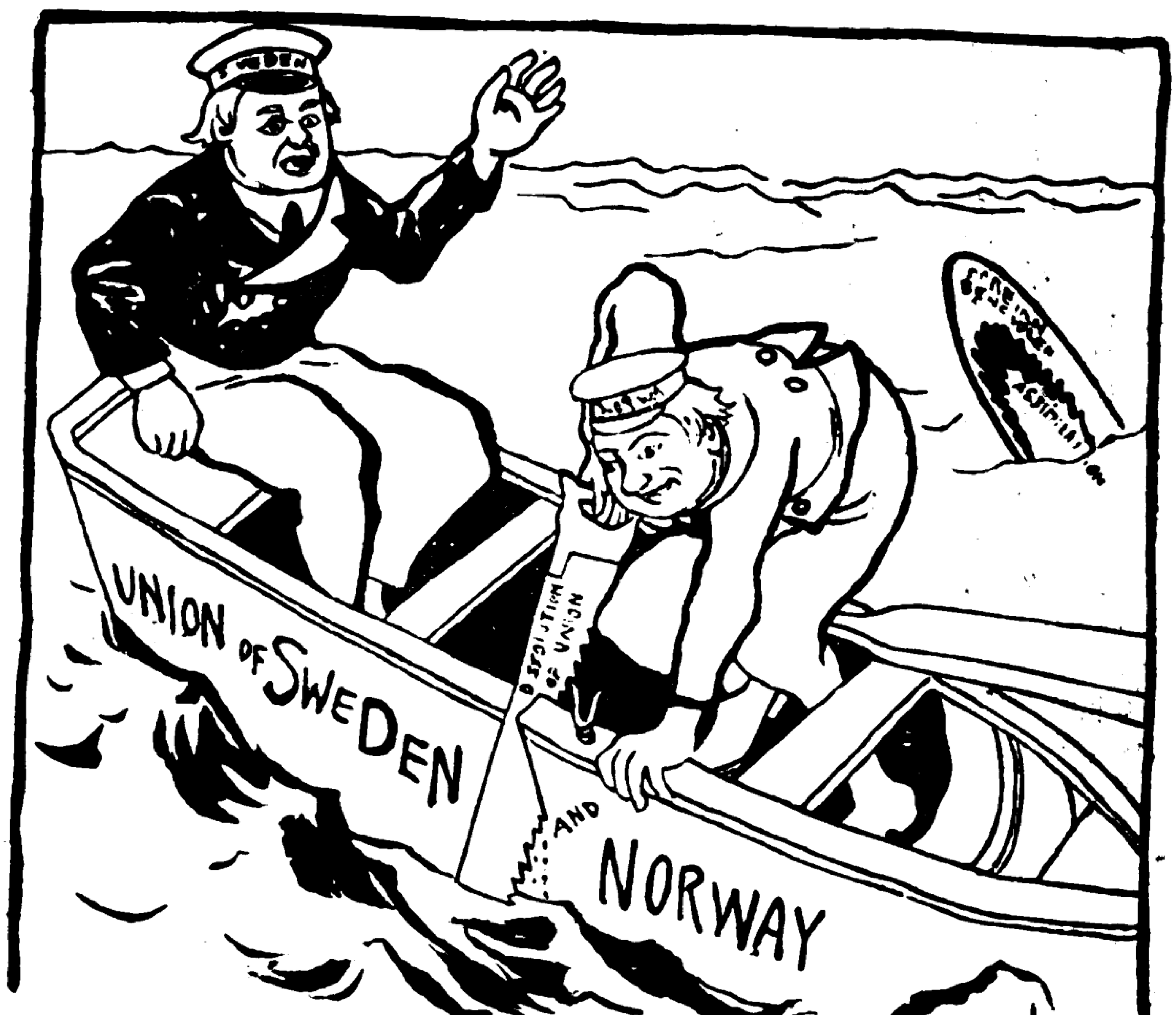
「ニューヨルク、トリビユン」

日本海の海戰に生殘りたる露國海軍將校連との會談度重なるに從ひ、愈々露國艦隊大敗の原因明瞭となり來り、旗艦クニヤツ、スワロフ沈沒し、提督ロヂエストヴエンスキーの負傷後遂に全滅の不運に遭遇せしことの強ち怪しむに足らざることを知るに至れり、將校連の語る所によれば露國艦隊の士官中誰一人として司令長官の計畫に參考せしものなく、各分隊の司令官と雖も猶之を知らざることは毫も其部下の下士官等と異ならず、凡ての軍機は只一に旗艦の信號に依賴するありしのみ、ロヂエストヴエンスキー提督負傷後之に代りて全艦隊の指揮を委任されたるネボカトフ少將すら第二艦隊との合併後只一回ロヂエストヴエンスキーと面談したるのみにて、而かも其會見は僅かに十五分間に過ぎざりしといふ。

マダガスカルに於て屢々盛なる射擊演習を行ひしとの風說は全く虛妄の事實にして彼等は全航海中たゞの一回も射擊演習などゝいふべき程の

ことをなしたることなく、時々射撃試驗のやうなものは爲したることあるも、之とて各艦の發射する重砲の彈數は僅かに三發に限られたりき、マダカスカル滯留中の出來事には聞くも忌まはしき醜聞あり、水兵の中には全く射擊に無能なるものすらありて、且既に八ヶ月の航海のため全員健康衰へ無力消耗したれば、砲術には驚くべき才能を有する日本の艦隊と對抗して花々しく雌雄を決せんなどとは到底思ひ寄らざるところなりき。

日本の艦隊は常に其砲火を先頭の一艦にのみ集注して先づ之を沈沒せしめ、然る後第二第三と順次に其砲火を他艦に移し、かくして海戰の當初先づオスラビアを沈め、次てアレキサンデル三世、クニアヅ、スワロフを沈沒せしめたり。露の艦隊中には其構造上誠に憐むべき缺點を有するものあり、現にオスラビアの如きは水線下に一の彈丸をも受くることなくして敢なく沈沒したり、これ海水の水線上より浸入したるものにして又航海中屢々變更せられたる防水房の爆發して此處よりも海水浸入し遂に其を沈沒せしめたるによる。艦種及び艦形の一致を缺き居たることも亦其動作の不調和を來したる原因にして、ウラヂミル、モノマフ。ア



DIVIDING THE BOAT.

—Maybell in the Brooklyn *Eagle*.

ドミラル、ウシヤコフ及びアドミラル、セニアウイン等は之がため艦列を離れて後方より徐行することゝなり、總て容易に敵手に斃るゝに至れり。彈藥の如きは初日の戰爭に於て已に缺乏を告げたり。愈々戰鬪の始まる日の朝、露國の各艦は互に無線電信もて日本の哨艦が既に我艦隊の排列を東郷提督に通知したるを警戒し合へりし時すらロヂエストウエンスキーは猶依然元の隊形の儘にて進行を繼續し、終に日本艦隊の前に現はるゝに及びて取返しのつかざる不利の地位に陷り、其尖頭を三面より夾擊せらるゝの止むを得ざるに立ち至れり、此に於てロヂエストウエンスキーの地位は全く拘束せられ、且つ運送船の排置又宜しきを得ざりしため愈々混亂を來し、日本軍は此機に乘じて其機關砲よりすらも彈丸を雨注するに至れり。露國の艦隊は其排列整はざるを以て味方同志の彈丸を避くる爲互に相擾亂し安全に砲火を敵に送ることを得たるものは只艦列の先頭に立てる戰艦のみ、而かも不熟練たる砲手は只無暗矢鱈に發砲するのみなりき、殊に露艦隊をして一層混亂を加へしめたるは各分隊の行手に當り敷設水雷及び浮流水雷の數多散亂せることにしてボロヂノ、アドミラル、ナヒモフ及びナワリンの

離艦は遂に此等の障害物のため沈沒の運命に陷るに至れり、露艦隊中にも亦勇士少からず、オスラビアの艦長ベルフは其艦隊の沈沒する際自ら免るゝことを屑しとせずして艦橋に立ちて自殺を遂げたり尚此他にも勇士の數は舉て數ふべからず、只彼等は不幸にして其名を世界に知られざるのみ。

韓國於ける日本人の施設

「倫敦タイムス」

驚くべきかな、韓國の變化し行く樣の著しきこと。諸種の改革已に其緒に就き、民人の幸福增進しつゝあること誠に明かなれども、韓國皇帝及び閹官、讒言者、外國の阿諛者等を以て充されたる彼の朝廷は益々其人民を恐怖し始めつゝあり、皇帝は屢々人民の强迫を受けたるに拘はらず、彼は尚露國最後の勝利を望み、露國が其蠻的壓制を試たることを察せず、今尚ラムスドルフ伯と其意見を通じ合へり、

然れども韓國人民は多く日本人を賞讃し、其軍隊の行爲を以て模範的なりとなせり。韓國に於ける日本人は何物に向ても寛大に支拂ひ、國內に於て多額の金錢を費す。韓國人は未だ嘗て日本人に雇はるゝ位の賃錢を得たることなし。又內地より日本官吏の來るもの多く、往々家族を率ゐて渡韓す、四月までに韓國に來りたるもの已に六万人にして今尚日々多數の日本人の達するあるあり、南は釜山より北は鴨綠江に至るまで日本移民は殆んど一聯の鎖をなして連續せりといふも過言にあらざるべし。

鐵道は實に著しき延長をなせり、釜山鴨綠江間の鐵道は全通し、其他の支線皆非常の速度を以て敷設せられつゝあり、又最も注目すべきは、日本人の事業をなすによく命令し、よく靜肅なるにあり、命令は極めて少數の力を以て全鐵道工事を處理するに足れり、露國が多大の勢力を以て之を處理するを得ず、且つ人民の不平不满を起したると比して甚だしき徑庭あるにあらずや、從來韓國の經營施設に關して所謂管理の任にありし各國の吏員は漸く其職を去りて日本人之に代て其管理に當りつゝあり、日本は今已に內務、軍事、財政、敎育、及び警察に關する管理者の地位を得るに至りたり、財政に於ける目賀田氏の勢力の如き千八百九十七年十一月に於ける露國の財政のアレキシーフの地位にあるものと謂うべし、彼の指揮の下にニッケル通貨改革は六月一日より行はる。又日本の銀行は數年間關稅銀行なりしが今正に政府の銀行となりたれば通貨を組織し、國稅を改め、從來の收稅官吏の貪婪を免れしめ、總ての財政の處置が日本の手より出づるも近きにあるべきを信ず、其軍事にまれ、通商にまれ、鑛山業にまれ、總て日本人の施設管理すること甚だ多きを加ひ、個々たる年月の中日本人の韓國に於ける施設大に其光輝を發すべきことを疑はざるなり。

浦鹽要塞軍事上の價値

「ウエースタペンハーゲン氏」

抑も該要塞戰略上の價値は旅順要塞の如く良好ならずと雖も天然及人工の力に據る時は決して侮る可らざるの地なり。夫浦鹽は千八百六十二年始めて商港となり千八百七十五年西比利亞艦隊の碇泊所と定められ千八百七十六年始めて築城せられし以來東洋の霸者を以て目せられ、現今約三万七千の人口を有し當地の商業は主として獨逸人及び日本人により

て盛に響まると雖も惜むらくは冬期に至り三四ヶ月間該港の氷結するに在り素より破氷船を用ゆる時は交通に妨げなし又毎年三月より十月に亘り屢々濃霧を以て覆はれ其位置「マルセーユ」の如く南方にあるに反して氣候不順にして健康に害あり、然れども浦鹽斯德市は外部に金港灣と稱する美麗にして且つ安全なる商港又軍突を有せり該港は西より東に約六乃至七吉羅米突陸地に灣入し一吉羅米突以上の廣さと五米突乃至二十五米突の深さを有し善良なる碇泊所を成形せり又該灣の前方に横はる外部港灣は長幅共に十吉羅米の露西亞島によりて海方面に對し掩護せらる此島は市街及港灣を海上の攻擊に對し安全ならしめ開戰以來防備を嚴にせられたり此外部港灣は東西兩端の入口によりて內部の港灣と連絡し深さ二十乃至四十五米突幅○吉羅米突乃至一吉羅米突五にして此二個の廣濶なる港口は彼の狹小にして航行に不便なる唯一の港を有する旅順口に比すれば其利益遙かに大なり

其他浦鹽斯德市の長所は長さ約三十吉羅米突幅十乃至十二吉羅米突なる全土高山を以て滿されたる半島の極端に市街の位置するにあり此半島は西「アムール」灣に接し東烏蘇里灣に瀕するを以て陸上よりの要塞攻擊は非常に困難なるに反し正面狹小なるを以て其の防禦は甚だ容易なり且浦鹽要塞は市街の北部を圍繞せる高地上に編組せられたる數多の堡壘より成り頗る宏大の設堡陣地なり、且つ千八百九十六年以後の新工事は爆裂彈に對する安全の掩舍を欠ぐと雖も充分敵の進入を支阻するに足れり蓋し其の掩舍の「ベトン」製掩蓋は其原度僅に一米突五乃至二米突一に過ぎざるを以て稍薄弱なる感あり而して濠線には障碍木柵を繞らし濠底及び斜堤には鐵條網を張り備砲は穹突內或は横墻間に掩蔽せられ全要塞に於て大約千門なりと臆定し得べし、尙ほ要塞は逐次防禦を便ならしむるのみならず恐らくは又旅順に於けるが如く一旦攻圍を受けたるに際し務めて靭軟の抵抗を爲し得る爲めに要塞の前記に數多の掩護陣地を構成せりと雖も內部圍廓を欠くもの丶如し又水雷の障碍は海上七浬に及べりと云ふ



"I SUPPOSE THE BEES GO WITH THE HONEY."

—Rehse in the St. Paul *Pioneer Press.*

論者曰く海岸要塞は敵艦隊の砲擊に對し浦港を保護するに不充分なりと然れども余は決して然りと信ずる能はず論者は要塞守兵の數を明かに示さずと雖も其主なるものは第二第七東西比利亞狙擊師團より編成され（第一西比利亞軍團に非ず）其第五聯隊は旅順にありしを以て合計二十

一大隊にして全兵力は殆んど五万を以て算し其一部は目下尙ほ朝鮮に在りと云ふ兎に角日本軍は一度リネウヰッチを痛く擊破したる後甫めて浦鹽斯德の攻圍を企圖するに至るべしと余は信じて疑はざるなり。

近東の風雲

「セ、グローブ」

極東に於ける戰爭活動の沈靜は漸く世人の目を轉じて近東問題に注がしめ、こゝにも亦穩かならざる風雲の漲めることを心附かしめたり、極東の戰爭日々猛烈を極めつゝありし際に當ては各人皆其目を開いて此國際間の大活劇を觀察したり、然れども奉天の會戰に於て露軍の大敗北を受け、海戰の方面又全く沈靜となりたるにつれ、極東問題漸く世人の注意を惹き、外交界の一問題たらんとするに至りたり。若し國際的關係よりして之を觀る、東南歐羅巴の問題は北東亞細亞の戰爭よりも重大なる難問を含めりといふべし、日露をして單獨に交戰せしめ、其他一切の勢力を此戰爭より離隔せしめんとの盡力はよく其効を奏し、各國皆其約を守りて單なる傍觀者の地位に滿足したり。然れども若しある重要なる事件のバルカン半島に起ることあらんか、必ずや歐洲の平和を攪亂するに至るべきなり、何となれば歐洲の一强國が此問題に手を附くることあらば早晩他の强國も之に引かれ、以て一般の爭鬪となること疑なければなり、由來土耳古は外交界の問題を提起する中心點なり、內部の腐敗と管理の惡しきとによりてオットマン帝國の潰裂したるとき、其處に數個の斷片的國家を現出すべし、而して此等の小なれども爭好きなる諸國は皆各々自家の特權を擴張せんと試むべし、然れども墺太利匈牙利、露西亞、及獨乙の諸國は素より之れに就て沈默を守るべきやうなし、彼等亦土地又は政治的利益の請求を呈出し、以て歐洲權力の平均を維持するに就てビザンチン帝國の復活を主張すべし。此問題の如何に解決せらるべきやは實に全歐洲の難問にして、當さに外交家の苦心すべき所なり。

日米の經濟的關係

「フイナンシアル、タイムス」

日露の開戰以來日米の商業的關係漸く密なるを加へ、今や此の二國は太平洋を超えて互に其手を握り、殊に米國の西部の如き著しき速度を以て日本との通商を擴張したり。米國が日本に對して好意を有することは日本の軍事公債の應募額三億五千万磅に達したるを以ても之れを知ることを得べきなり、あらゆる資本家は勿論、極めて少額の金を以ても應募せんとしたるもの甚だ多かりしが如きよく米國の上下が日本に好意を有するの證とするに餘りあるべし。若し日本が今後公債を募るに當り單に米國にのみ之を求むることあるも米國はよく之を整ふることあるべきを信ず。

日本が要する所の貨物は水雷より魚に至るまで米國より輸入すること甚だ增加せり、現今日本に於て延長せられつゝある鐵道の鐵軌は皆米國の鋼鐵を以て作られつゝあり、米國の汽關車及び車臺は日本に輸入せらるゝこと夥しく、生綿の日本に輸入せられたることの多き今年程に上りたること未だあらざるべし。履物に用ふる革皮、馬具、及び軍用の皮等は總て米國鞣皮所より來る、又鐵砲、彈藥等の多くは他の異りたる名の下に密かに太平洋岸の港を去りて日本に向ひたり、オレゴン及びアラスカに於ける荷造所にては日本の軍隊に向て多量の罐詰魚類を送りたり、最近一ヶ月の統計によれば日本の輸入は一千五百万磅なるが、米國が日本に輸出したる額は五個の海底水雷艇を合せて殆んど之と同額に達せる

を以ても日本の經濟的關係を熟知すべきにあらずや。日本は戰爭の爲に其商業に打擊を受けざることは領事の報告が戰爭前よりも却て多額に上れることを以ても知り得べし、而して此の商業の大部分が殆んど米國より輸入せらるゝに至りしを以て見れば日米の經濟關係や實に密なりと謂ふべきなり。

媾和に對するウヰッテの談話

「外務省着電」

余は日本全權委員と會談し講和條件の成立し得べきや否やを確めんが爲め吾皇帝陛下より特派大使として選任せられたり余一個の私見は素より最も重きを爲すに足らずと雖も吾皇帝陛下の爲めに力を致さんとするに於てラムスドルフ伯と全然意見を同じくするものなり余は陛下より精細なる聖旨を授けられたれば之れに依遵する精神なり最終の確定は固より陛下の叡慮に依らざるべからず露國の運命を決するは陛下の自ら任ぜらるべき所なり陛下は平和を愛せられ其の成立を念とせらるゝと雖も日本の條件は吾國に取て到底妥協し得さる性質のものなるべき事是れ余が憂慮に堪へざる所なり



" HE WHO GOES A DORROWING GOES A SORROWING. "

How France treated her ally in the good old days.

And how she treats that ally now that war loans are wanted.

—*Jugend* (Munich).

第二、或は余を以て露國は如何なる代價を以てしても平和を欲するものなりと論ずるものあれども是れ誤れり吾國論に二派あり一は飽迄戰爭を繼續せんと欲するものにして其の説を持する者頗る多し其の勢力や頗る大なり一は即ち平和を欲する者にして余の如き誠實に之に屬せり余は茲に腹藏なしに事實を明言す何となれば余は居常眞實を語るを以て政事の要訣なりと認め來りたる者なればなり余は開戰前にも平和を主張せるものなり然るに開戰後に至りて形勢一變せり現下の情況に於て戰爭を終局とするを得策とするや否やの問題に就ては今尚前述の二派ありと雖も若し日本の條件にして我國民を辱しめし又は國の存立を危うするものならんには兩派は茲に合同する事となるべし余にして日本の條件は承諾すべきものに非ずと報告するに至らば國民は余の決定を是認し若し必要なるに於ては數年間と雖も敢て戰爭を繼續すとの決心をなすべきや必せり

第三、外國新聞は世人をして露國が已に壓潰せられたるが如く思はし

むれども斯くの如きは實に反せり國內に重大なる紛擾あるは余に於ても之を拒止せず然れども歐米諸國は未だ事實の眞相を詳悉せず外國通信員の如きは我國に來りペートルプスルグ又は莫斯科にして僅々數百人と語話し目擊する處の事件を瓦解し我國の將來に關し世人をして徒らに疑惑せしむるに過ぎず

露國と西歐諸國とは軒輊する所少なからず露國を承知し露國民の精神を了解するは露國に生れ多年露國に居住せしものにあらざれば能はず我國人の習慣歷史眞理は全然西歐國人に異る所ある露國は西歐諸國の標準を以て判斷すべき國にあらず露國は疆域廣大にしてこれを組成する因子及利害關係も互に相異ること少なからざれども其の國民全體は恰も一大家族に似たり彼等は目下內訌の爲め區々分裂の狀あれども愈々國家の保全及其の將來の運命に危害の及ばんとするを認むるに於ては斯の如き分裂は忽然として消滅すべきのみ露國未た瓦解に瀕せるに非ざるが故に如何なる條件にても之に屈從せざるを得ざるの必要を認めず目下國內に紛擾あり幾多の重大なる事件を生じ且つ之れに類する事あるべしと雖も此危期たる總て經過し去り今より數年の後には露國は再び歐洲列國中に雄飛することとなるべし

怠惰の福音

ゼロム原著
二松庵主人譯

○世に怠惰の神が在るとすれば、僕はたしかに其神の權化と言つて可い、怠惰は僕の一大長所で、而もそれが天稟の性である、習慣に依つて成されたとか、教育に依つて作られたとか、そんな薄弱なものでは無い、て怠惰の福音を傳へるは、僕が最も適當の人だと思ふ

○僕は天才の懶け者である、そしてこれが僕唯一の誇りである、唯手を懐ろにして、空しく日を送る閑人とか、無性者とか、この種の懶け者は世に其數多い、がこれ等は皆出來損ひの代物で、僕の如き眞個の懶け者を詮索すれば、其數極めて少ないのである

○僕は閑人では無い、極めて多忙の人である、僕は無性者では無い、極めて勤勉の人である、終日劇務に從事して、最も忠實に最も熱心に、繁忙の裡に生活して居る者である、が忙中の寸隙を偷んで、怠惰の天才を發揮する處、此處が天才者たる所以であらう、此時に於ける怠惰の有難味、閑人はそれを知る事が出來まい

○多忙の人で無ければ、怠惰の眞味を解する事が出來無い、僕は疑ふ、爲すべき業務の無い時、また何も爲無い時に、其處にどんな樂しみがあるかと、思ふに、空しく時間を費やすは、たしかに一種の仕事、最も疲勞を來すべき最も苦しき仕事であらう、

○眞の怠惰は、音曲の合の手の如きものである、二つの動作の結びである、また、眞の怠惰は接吻の如きものである、一寸人目を偷んだ處、其處に限り無い味ひのあるものだ、怠惰の福音とは、所謂此處の消息である、

○僕は自己の實驗を以て、この福音を傳へやうと思ふ、乞ふ幸ひに僕を語るを恕したまへ

○以前、僕が青年であつた頃、大病に罹つた事がある、自分では、左程の重症とも思は無かつたが、今一週間も手後れすれば、本復も覺束無い程の病勢だ、と醫者の言つた事から見れば、容易で無い病氣であつたに違い無い、僕は諦めた、人間の軀體は一つの舞臺で、造面の「病」も來れば、首を捻りつゝ「藥」も來る、これが自然の役割であらうと

○然うた、今や「病」が重々しく迫つて來た、で醫者は切に僕に勸めた、凡ての要務を拋て、一日も早く轉地し給へ、少くとも一ヶ月餘、靜かに療養を加へ給へと、唯轉地を命ずるのみで、碌に藥も與れ無かつた、察するに、「靜養する」といふ外、適當なる療法が無かつたのであらう、兎も角、其言に從つて早速に轉地した

○非常に多忙なる青年は、此日から全く無聊の閑人となつた、此時の僕は、未だ怠惰の天性を自覺し無かつた以前である、で繁忙なる業務を離れて、恣まゝに息ふべき身となつたと歡んだ、「一ヶ月餘、思ふ儘に息へよ」とは、何たる嬉しい診斷であらう、「この醫者は、能く僕の病氣を看拔いたものだ」と僕は心に醫者の明を稱讚した、そして愉快なる一ヶ月を想像して、獨り雀躍して居つたのである

○いよ〳〵閑散の人となつた、直ぐ其日から朝寢する、宵寢する、晝寢もする、屋内が厭やになれば、庭園の内を逍遙する、ハンモックの中に揺られ〳〵、心地好く小説を讀む、目には青山白水を見、耳には鳥の鳴く音、木の葉の響きを聞く、と云ふ氣樂三昧の生活に入つたのた、

○が毎日二回、一定の業務があつた、それは鑛泉水を飲むべき事で、正しく守れよとの忠告であつた、僕は思ふた、世にこれ程容易い業務があらうかと、先づ第一日は造作無く飲んだ、第二日にも飲んだ、が三日目には少し厭やになつた、四日目には眞に飲み難くなつた、最早飲む事が苦しくなつた、病ひを厭はしむるには、毎日鑛泉を強ゆるに加くは無い、と思つた位に之を嫌つた

○嫌ひつゝも、六日間は飲み續けた、が彌々辛抱が出來難く無つた、と言つて全く廢する譯にも行か無いから、飲んだ後に引續いて、更に強いブランデー一杯仰ぐ事にした、根が酒好きの性だから、不圖思ひ付いた儘、然う云ふ冒險を遣つたのである、がどう云ふ拍子か、この冒險が大當りて、身神頗る爽かになつた、其後醫者に聞けば、それはアルコールが作用して、鑛泉中の鐵質を打消した故であるとか

○幸ひに毎日二度の苦は免れた、が新しい實苦が又一つ涌いて來た、外では無い、日々の生活に倦み果てゝ、無聊が苦痛になつたのである、僕は正直に醫者の吩咐を守つて、轉地以來、用事には一切手を下さ無かつた、が今や仕事の無いのが苦しくなつたので

○山水の美、自然の聲、庭園、小説、ハンモックなど、曾て僕を悦ばしめた物は、今や悉く癇癪の種となつた、陰氣で退屈て、そして單調なるこの生活！　僕は今の生活が全く厭やになつた、否、實に苦しくなつて來たのである

○算へてみれば、丁度轉地してから二十日目であつた、苦しくて苦しくて堪ら無い、で早朝に起きて、少し離れたる市街へ出掛けた、そして其處此處を彷徨して、軈て歸らうとする途中、路傍に一人の石工が居つて、物さも苦しさうに、石を割つて居るのを見た、僕は其人の前に立つて、物好きにも、一つ手傳つて遣らうと言つた、そして僕――轉地療養の病人――が三週間保存して置いた元氣を出して、重い槌を振り上げて、ドシ〳〵石割りを始めたのである、

○石工の爺は側に息ひつゝ（即ち怠惰の眞味を味ひつゝだ）、始終僕の機嫌を取つて居つた、僕は彼の眼前て、僅か三十分の短い間に、彼れ一日分の仕事を遣つて見せた、爺は大歡びて、唯僕の腕前を褒めそやすのみであつた

○この日はこれて宿に歸つた、心地が極めて好く、夕飯の味が極めて佳く、そして眠りが極めて安かつた、この味を知つて以來は、毎日遠方へ散歩して、力を養ひ心を慰め、そして夕方からは寄席へ出掛けて、頻りに耳目を悅ばすを事とした

○がこれも日々趣味が減つて來る、四五日目には、全く倦んで仕舞つて、再び苦痛を感じ初めた、唯此上は、早く一ヶ月を過ごしたいと、日の經つのを待つのみてある

○軈て三十日となつた、此時の僕の嬉しさは、恰も囚人が出獄する時のやうてあつた、僕は蘇生した心地て、この陰氣な保養地から、多忙の業務ある吾家へ運ばれた、そして暫く離れて居つた家族と隣人とに迎へられた時の嬉しさ、生れて以來、僕はこの時程嬉しく感じた事は無かつた

○辛うじて一ヶ月の怠惰を恐んだ、怠惰の苦しみを悟ると同時に、眞の怠惰の樂しみを知つた、否この機に觸れて、僕天稟の怠惰性が、其覆面を挽ぎ取つたのてある

○以後、多忙の時て無ければ、僕は怠惰を求め無かつた、即ち怠惰してはならぬ時に、怠惰するのが大好きとなつた、急用の書類が机上に山積する時、其時は僕の最も怠惰を欲する時てある、繁き夜業を目前に控ふる時、其時は殊に長く夕飯の食卓に就いて居たい時てある、特に早起を急ぐべき朝、其朝は特に長く床の内に居たいのてある、

○業務が増せば怠惰の快樂も共に増す、とこれは僕の數理てある、即ち、業務の時間が長くて、怠惰の時間が短かければ、快樂の分量は更に増して來るのてある、試みても見給へ、寢返りしてから、今一度寢入る時の心地好さを、僅々五分間の此時の怠惰は、眞に千金の價あるては無いか、

○僅々五分間！　睡眠の快樂をコンデンスした時てある、人生の最も樂しき部分、最も心地好き安息時てある、

○次に寢床！　此處は僕等の疲れたる手足を伸べて、安き眠りに落つる眞似事の墓場てある、終日の勞を休むる天國てある、母の温き懷ろてある、母の懷ろよりもより寛大により自由なる天地てある、政治家が百計を案ずるも此處てある、乙女が失戀に泣くのも此處てある、

○此外、尙一つの天惠がある、それは即ち煙草てある、英國人は懸う言つた「煙草は慰め草てある、快活の友てそして平和の母てある、中世紀に於て戰爭の多かつたは、當時盛んに禁煙を行つたに原因する」と煙草の德を讚嘆して

○上來、怠惰たる僕は、聊か怠惰の福音を宣傳した、尙今から、爲すべき業務は山程ある、が次の業務に移らうとする今は、自ら怠惰の趣味を享くべき恰好の時てあらう、さらばよし、今一寸の間懶けやう！　そして煙草を吹かさう!!

本書は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想界に貢獻するところあらんとを期す

△時局より見たる武士道(十九年七號)　井上哲次郎氏
△武士道と今後の教育(十九年八號)　戸水寛人氏
△武士道に就いて(十九年九號)　渡邊子爵
△武士道の復古(十九年十號)　根本通明氏
△武士道は基督教に酷似す(十九年十二號)　本多庸一氏
△武士道と人格の觀念(二十年一號)　綱島梁川氏
△武士道と歌(二十年二號)　坂正臣氏
△武士道の將來(二十年三號)　島地默雷氏
△武士道と佛教との關係につきて(仝上)　南條文雄氏
△武士道とゼントルマン(二十年四號)　山川健次郎氏
△武士道論(二十年第五號)　大隈伯爵
△西洋の武士道(二十年六號)　箕作元八氏

以上は旣に揭載せり敢て江湖の一讀を乞ふ

雜錄

滿洲地名談
附 好太王の碑文に就て

文學博士　白鳥庫吉

△奉天△松花江△黑龍江△長白山△鴨綠江△好太王の碑文に就て

○奉天　奉天といふのは無論支那語である、又Mukden といふのは無論滿洲語である。兩方の言葉にテンとデンといふ音があるから、人によつては同一の語を兩樣にいふものと解するものもあり、或は二つは全く異つた場所であつて何の關係もないものであると思ふ人もあるが、それは双方共間違てある、一は滿洲語てあつて一は支那語てある、同一の場所に兩樣の呼び方があるのてある、Mukden といふのは滿洲語で宮殿といふことであつて古は其處に宮殿があつた爲にさういふたものてあらう、西洋の地圖には多く Mukden とあり、支那の地圖には奉天とあるが同名の異譯でもなければ、又場所の異つて居るのでもない、全く同一の場所を兩樣に呼ぶのである。

○松花江　今日の西洋の地圖を見るとSungari ula とある、スンガリといふのは滿洲語で其の意味は天河(銀河)即ち西洋の milky way であつて、之れは天河の如く流れて居るといふので、かゝる美名を附けたのであらうと思はるゝ、支那では之を松花江といふ、松は sung の音で、花は hoa の音であるから松花は Sungari の飜譯である、ula は滿洲語で河即ち江であることは申すまでもありますまい、此河の名は隋唐の頃より見えて居るが其時分は粟末水といふた、これは無論土言其儘を支那の文字に寫したものであらうが其意味はわからぬのである。

○黑龍江　は餘程古い名であつて晉時代からわかつて居て之を弱水と名つけた、夫れから隋唐の時代になつてから之を黑水といふた、黑水といふのは隋唐時代に土言を飜譯したものである、土言といふのは其當時の滿洲人の言語で saghalien ula というて居つた、サガ

レンといふのは滿洲語の黑といふことである、それで支那人は之を飜譯して黑水といふたのだ、今日樺太を薩哈連といふのも即ち同じ語源から出たものである、サガレン、ウラ(黑水)の向ふにあるから薩哈連島といふたものであらうと思ふ。遼の時より之を黑龍江と稱し、又烏龍江ともいふた、今日は專ら黑龍江といふが其れは黑水から出て、黑水はsaghalien ulaの飜譯であることと上述の如くである、又今日歐洲の地圖には此河をAmurといふ、これは黑龍江の上流に住む蒙古人と滿洲人の雜種ソロン、ダクール等の土言で大河のことを總てアムールといふのを其音を取つたものである、恰度支那で江といへば楊子江、河といへば黃河といふやうなものである、Amurは即ち土言の大河といふ音を寫したものであつて、種々なる西洋人の說や解釋は總て間違であると思ふ。

○長白山　白山の名も餘程古くからある、長白山の歷史にあらはれたのは山海經の時分からあつて其當時は之を不咸山といふた、其頃は肅愼人が此山の近傍に住んで居たと傳へて居る、不咸山といふのは予の考ではBurkhanの飜譯であつて、ブルカンといふのは蒙古の神といふ意味である。之を北魏の時分には徒太山といふて其意味は大皇、大白即ち天であつて天山又は神山といふことである、こゝに居た人民は此山を神聖のものとして祭をなしたのである、面白いことには此等の人民は此山を汚してはならぬといふので、此山には決して大便や小便をしてはならぬのである、それで此山に登る人は必らず大便や小便をする器物を持て行くので、下山してから之を捨てるのである、隋唐の時代には之を白山というて先きの黑水と相對したのである、而して其後金の時になつてから長の字を附け長白山といふに至つたのである。

○鴨綠江　支那人が朝鮮の方へ來たことは餘程古いことであつて、朝鮮へ入るには申すまでもなく鴨綠江を通らなければならぬ、鴨綠江のことは餘程古い時分から支那の書物に見えて居る、記錄によると秦漢時代から此河の名があらはれて居て其時代には之を浿水といふた、周末に於て燕の國の如きは鴨綠江より南の方朝鮮の方まで領土を擴め、秦の始皇帝の時も朝鮮内部に其版圖を擴げた、浿水は此等の關係から知られて居るのである。始めは浿水というて居たのが隋唐の時代になると之を鴨綠江と稱するに至つた、鴨綠江はまた馬訾水ともいふた、唐人が鴨綠江といふ名を解釋

するのに、此河の水の色が鴨の頭のやうに綠であるから斯く名つけたのだといふて居る。然し私の考にては之れは唐人が文字によつて解釋したもので、實は其土言の飜譯であらうと思ふ。馬此言水といふはマシ、水と讀むのであつてこれも恐らく土言の飜譯であらうと思ふ。今日西洋の新聞雜誌に Ya-lu といふのは鴨綠といふ字の今日の漢音を寫したものであつて、日本で鴨綠といふと同じいのである。朝鮮の方では此河を Am-nok-gang と發音して居る。鴨綠江を朝鮮讀にすると ap-lok-kang であるのであるが朝鮮人は l の發音が出來ないので l が n と變り、其れが爲めに前の h も m に變り、又 k は g に濁りて am-nok-gang となつたのである。

○弘太王の碑文に就て　此鴨綠江のことに關聯して歷史上に面白い事蹟がある。鴨綠江が歷史上に有名であるのは此河が朝鮮の天然の國境をなして、其事自身が已に歷史上に大關係を有して居るからである。此河の上源地に高麗の本地があり、高麗の都があつた、即ち今の洞溝といふ所に國內城といふ城があり、其處に廣開土王の碑文がある。其碑文を刷つたものは日本の博物館にもあつて之を弘太王の碑文と呼んで居る。

此碑文の有名であるのは、朝鮮の南部に偏つた新羅、百濟、任那の三國が日本の臣民であつたことを明かに書いてあるからである。これは歷史上非常に價値のあるものである、勿論日本の歷史にも此三國が日本に朝貢をしたとか、或は屬國となつたとかいふことがあるけれども、日本の歷史なとは所謂傳說であつて歷史上價値の少いものである。然るに此碑文は當時に於て最も信用すべき歷史上の遺物である、これによつて日本が朝鮮の南部を支配したことを確實に知ることが出來る、これは我國の歷史に重要なる材料を供したものである、私は此碑文を日本に持て來て博物館なり、公園なり建てるのは實に面白いことであると思ふ。英吉利とか、獨乙とか、佛蘭西とかなら何萬圓かゝつても必ず自分の國に持て來るに違ひない。只此碑文に日本に面白くないことが書いてある、當時日本は三韓半島の南部を支配したのであるが、北部の高麗とは反對の地位に立て居たのである、高麗といふは恰度今の露國のやうな關係であつて日本が半島の南部に勢力を得んとすれば高麗が之を挫かうとする、高麗が新羅をオダテて日本に背かせようとする、であるから日本は半島の南部を從へることは從へたが、到底長持をすること

が出來ない、日本も高麗が新羅をオダテて居るといふ事情を知つたので、南部の三國を支配し、且つ持續するにはどうしても北部の高麗を控かなければならぬ。其關係は恰かも日本が今の朝鮮を充分に制するには北の露國を伐たなければならぬと少しも違はぬのである、日本は朝鮮に勢力を得たいといふ希望の爲に先きには支那と戰ひ、今は露國と戰ふたが如く、政治上の關係より日本は高麗と戰を開いたのである、處が高麗には廣開土王といふ有名な王様があつて、此碑文には廣開土王の二度共日本を破つたことを賞して居る、一度は黄海道の臨津江の近傍で日本軍を破り、一度は平壤附近に於て日本軍を破つたとある、此碑文は廣開土王——即ち好太王の子の長壽王が建てたものであるから、無論父の偉績を頌する爲めに潤色をしたこともあるだらうが、此時に高麗が四方に擴張したことを考へて見ると、廣開土王は餘程の豪傑であつたに違ひない、又日本の歴史を見ても此時以來日本の勢力が半島に振はないのであるから、ほんとうの所日本は高麗に負けたらしいのである、此高麗に敗れてから日本の勢力が振はなくなつたのであるから、日本が大陸の戰爭に負けたならば再び大陸に乘り出すことは容易でない、現に今回の戰爭などでも是非とも露國に勝たなければならぬ、若し負ければ今後の國勢上に容易ならざる影響を及ぼすべきことは古の歴史が已に證明して居るのである。

記者一日白鳥博士を訪ひ、博士の談話を筆記せるものなり

明治闇黑史（八）

有磯逸郎

○自由民權論の勃興（二）

『自由民權論の勃興した當時の事を思ふと、色んな事が胸に浮んでくるわい。政府が、國會請願運動に水を浴びせ、有志原を東京より逐つ拂つたのは良いが、有志者がおの〳〵國に歸ると、今まで中央都會の運動であつた自由民權論は、パッと日本全國に飛散し、山村、水郷、到る處、自由民權の議論が謠はるゝやうに爲つたから妙ぢや、左様ぢや、政府の鎭壓策は、東京

て抑へて、全國に傳播させたので、甚だ鮫蛇であつたのさ……餘りに政府の遣り口が、皮肉であつたものぢやから、此時より、二三有志の間には、一種の革命思想が醞釀してゐた、いや、公然にしたのは、元より遂然と後の事よ』

『政府が鎭壓策を用ゐた結果として、今一ッ、著るしき事實が生じた、それは今日の言葉で、ハイカラ式に言ふと、民權文學の勃興といふのぢやから、新聞も起れば、雜誌も出た、論著も出れば、小說も出る、講談も流行れば、俗謠も流行る、それが皆んな民權とか自由とかいふ文字を冠して出たのぢや、之は東京ばかりでなく、四方に此の風潮は傳播して、一時は非常な勢を示したものぢや、今日地方で、幾千號といふ古い新聞紙は、大抵此の時起ッたのぢや。であるから、今日に爲つて、冷然と考へると、政府が民權黨に鎭壓を加へたのは、一方には有志者に陰險な一種の思想を與へたに相違ないが、また一方では、地方に文化の途を開いた動機と爲つたやうにも見ゆる、斯う思つて見ると、彼の時の政府の壓制も、餘り無茶とばかりも言へないやうぢや、ハッ〳〵』

『特に土佐は、自由民權の本家本元である丈け、意氣の昂つてゐたのは、言ふ迄もないことであるが、此頃大學の學者連が、獨乙に行つて學者の洗禮を受けてくるやうに、その頃、民權有志といふには、土佐の土を踏まねばならぬ、といふ勢で、誰も、彼も、土佐に出向いて、有志者の洗禮を受けたものぢや、河野廣中は、その以前に、土佐の土を踏んだやうぢやッたが、その他、杉田定一でも、栗原亮一でも、その頃一寸頭を出した有志者連は、大抵土佐の本山に參詣した、ホ、彼の頭山滿のやうな無頓着な男さへ、何んと考へた歟、明治十三四年頃に、土佐に遣つて行つて、有志者の洗禮を受けたやうに覺えとる』

『我輩も何か要事があつたので、その頃一寸土佐に足を入れたことはあつたが、土佐に入つて、成程自由民權の本山であるわい、と驚いたのぢや。眼に見ゆるものは、一切、全切、自由づくめて、湯に、自由湯、自

由温泉、自由批葉湯あれば、菓子にも、自由糖、自由萬歳菓子といふのが出來てをる、料理店に、自由亭あれば、寄席も負けずに、自由講釈といふ名を附けて居る。特に、青年社會の意氣込は最も凄まじく、民權に上下の別なし、といふ理想を現實せんとしたもの歟、發陽社の青年は、發議して、各社の青年が、何れも人力車夫と爲つてゐた。隨分突飛千萬な擧動であつたが、此の突飛な擧動の中に、おのづから其の頃の青年の元氣が見えてをるから、面白いのぢや」

『當時人力車夫を遣つた青年は、能くは覺えて居らぬが、安藝喜代香、德弘馬域郎、明神安久、片岡恒次郎、弘瀨重正、岡本方俊、兒島稔、能勢源之助、佐野義二、葛田成藏、上岡和枝、小笠原鹿太郎、森田馬太郎等であつたやうぢや、待てよ、また種々な青年が加はつてゐたやうぢやつた、左樣ぢや、後に板垣の婿に爲つた宮地茂春も、後藤の子息の、彼の猛太郎も、皆んな梶棒を握つてゐたやうぢやつたわい。爾うして、此の一夜作りの車夫原は、身に勞働服を纏へるにも拘らず、金を出だす乘客に對し、嘴を尖らし、何れも傲然として、自由民權の說法を試つてゐたのぢや」

『人力車夫といへば、卑賤な職業であるが、不思議と、此の職業は、民權時代より、有志者の注意に上ぼつてゐたから、妙ぢや。ナニ、今より二十年も前の事であるから、今日若い奴等が騷いでるやうな勞働問題の意味が含まれてゐた譯ぢやない、……最も今日言ふやうな社會問題の意味は無かつたが、政府が餘りに迫害を加へたものぢやから、丁度魯西亞の虛無黨や、獨乙の社會黨の境遇に似て居るといふので、その方より、有志の或部分では、社會問題に趣味を有つてゐたものが、多かつたやうぢやつた、併し當時は頭で工場などいふやうなものは無かつ時代であつたから、そこで手ッ取り早く、眼の前の人力車夫に注目したものと見ゆる」

『て、序ぢやから聞かすが、その後青年有志の間に、斯んな事も起つた。之は後の事であるが、彼の名古屋事件で、無期徒刑に處せられた奧宮健之よ、あの男は

馬車鐵道の起つたのを機會に、車會黨といふものを計畫したことがあつたわい、當時奥宮は、東京府下で、政談演說も禁ぜられ、詮方盡きて、講談師に化け、寄席に出て、むしやくしや腹てゐた際、に丁度東京の市街に馬車鐵道が出來たのぢや。奥宮は、好機到れり、と起つて車會黨の組織に取り掛つたので、今日から見ると、隨分無鐵砲な計畫であつたが、奥宮の身に爲ると、當時は斯う爲るべき順序であつたのよ』

『奥宮は、今は何を遣つて居るか知らぬが、當時好んで過激な言論を口にした男で、二十二三歲の少年の身でありながら、馬場辰猪や、大石正巳の間に交り、國友會を創へて、一寸顏を賣つてゐたのぢやが、馬車鐵道が出來ると、當時の繪入自由新聞に、佛蘭西の革命を仕組んだ西海血汐涵嵐といふ小說を揭げてゐた櫻田百花園と謀り、その頃駿河臺で、手廣ろく宿車を遣つてゐた三浦龜吉、左樣ぢや、今、壯士の親分株でゐる彼の三浦龜吉を尋ねて、車夫團結の必要を說いたのぢや、一種の氣象を持つた當年のチビ龜、一議に及ばず、奥宮等の意見に贊成し、東京市中の重もなる親分株に檄を飛ばし、或日を期して、神田の明神山に、大會を開いたのぢや』

『集つたわい、集つたわい、その日になると、殆んど千人ばかりの人力車夫は、明神山に集つたのぢや、大井や、河野なども、大に奥宮等の擧を壯なりとして、百圓内外の金を出だし、此の車夫大會――車會黨の爲に、菰冠り數十樽を寄附した。車夫の服裝に姿を換へ、頰冠りに、手拭で顏を隱くした奥宮は、づらりと菰冠を騈べた間に、すつくと立ち、群がり立てる人力車夫を前にして、馬車鐵道攻擊の演說を初めたのぢや、道路は天下の公路なり、然るに、馬車鐵道なる者は、縱に此の天下の公路を橫斷して、人力車夫の職業を奪ひつゝあるは、何んたる事ぞや、と血氣に任せて、馬車鐵道を攻擊したものぢやから、群集者一同、手を拍ち、腕を扼して、奥宮の說に贊成したのぢや、その結果は、如何爲つたといふのかい、大政官に、馬車鐵道廢止の建白書を出だすことに決して、此の大會

は、芽出たく解散したが、二三日すると、奥宮を初め、チビ龜等は、淺草で巡査と喧嘩したといふのが口實で、石川島にぶち込まれ、その儘、此の車會黨も、モノに爲らずして仕舞つたのよ、ハツ〳〵』

『之は自由黨組織後の事で、慥か十五年の五月頃であつたやうに覺えとるが、當時は人力車夫ばかりでなく、職人でも、小商人でも、四角な字が見へる者は、大低自由民權の說に耳を傾け、途中で、巡査に會つても、臂と肩を怒らして、人民の權利、といふ言葉を口にするのが大流行りに流行つたのぢや、東京でさへ斯んな風であつたから、自由民權の本山であつた土佐の如きは、一時は兒童走卒に至る迄、自由風に吹かれてゐたのは無理もない事。特に可笑しいのは、藝娼妓の間にまで、自由かぶれの女を出した事ぢや、我輩は、土佐に行つた時、突飛藝妓といふ奴が、有志の間に持て囃されてゐたやうぢやつた。

壓制しやんす、壓制しやんす、滅法矢鱈に壓制しやんす、お前達ア、民權自由はお嫌ひか、矢張壓制がお好きかね、ナモマアおかしなお人じやね、

といふのが、此の突飛藝妓の唄つた俗謠よ、ヒーヤ〳〵と囃すので、不妙らない調子の俗謠ぢやつたが、壓制しやんす、壓制しやんす、と唄へ出す口氣が、妙に有志の人氣に投じて、老成株の仲にさへ、やんやと持て囃されたのぢや。今、あの突飛藝者メ、如何してゐるぢやらう、と苦勞性の我輩は、時々思ひ出す、圓轉滑脫な女郎であつたから、案外氣樂に消らしてゐるかも知れない、ナニ、突飛藝者ばかり責むるに及ばぬ、志士の標本と尊ばれてゐた連中でも、今日は突飛孃の言ひ草ぢやないが、滅法矢鱈と、政府に盲從してゐるではないか』

『その頃最も行はれてゐた俗謠は、如何なのであつたと聞くのかい、左樣さ、今は大低忘れたが、小室屈山の作つた「自由よ、自由よ、やよ自由よ、汝とわれのその中は、千代も八千代も末かけて」などいふのが、到る處に行はれてゐたが、土佐では、よしや節といふや

つが流行つてゐた。

「よしや南海苦熱の地でも、粋な自由の風が吹く」

「よしやお前の仰せじやとても、權利ない身に義務はない」

といつたやうな俗謠よ、之は二上りか何かで、つゝゝ、ちりつゝつゝ、しやゝん、しやんゝゝゝ、しやゝらしや、しやん〳〵、と調子を取るので、一寸妙ぢやつたわい、その外色んな俗謠が流行つてゐた、常磐津將門の替歌で

「命ないとて苦にせまいもの、野邊の石碑に月もさす、見やれ昔にお花が咲き、監獄もどりで袖つま引かれ、今宵逢ふとの目遣ひに、招く合圖の旗印、すゝきに雜る髑髏、心と讀んだが無理かいな」

などいふのは、我輩は面白く思つたが、青年有志は、斯んなのよりも

「監獄から東京の景況を想像すれば、東京は繁華でよいけれど、官吏の跋扈を見る時は、悲憤慷慨扼腕する、竹槍蓆旗て、堂々と、一時に亡ぼす夢を見た、愉快〳〵、斃れて已め〳〵」

などいふのが、大に流行つてゐたやうぢや、國友會や、嚶鳴社の民權演說が民心を鼓吹し、自由思想を宣傳したに相違ないが、此のやうな俗謠も、民權の普及に與つて力があつたのぢや、て、板垣のやうな四角四面な先生でさい、時には俗謠を作つたこともあつた。

雨風が育てるとても、雨風が强けりや、花も散るぞいな

ホンに、お世話もほどがある

といふのが、板垣が作つた俗謠ぢやといふ評判であつたが、眞僞は知らない、ホンにお世話もほどがある！俗謠談など話してゐると、陽氣で、面白いやうであるが、當時政府の干涉といつたら、ホンにお世話もほどのある所ではなかつたのぢや』

『右のやうに、政府と民間と、隱約の間に、激烈な鬪爭を遣つてゐると、十四年の七月に爲つて、彼の開拓使官有物拂下事件が生じて、暫らく靜謐であつた東

京の市街は、又候地方有志の群集する所と爲り、建白書を携へて、四方より入京したので、國會請願運動の當時と同じく、政府と有志との間に、花々しき戰爭初まり、當時日々新聞で瓢簞鯰のやうな議論を吐いてゐた福地源一郎のやうな男でさい、嚶鳴社の沼間守一や、田口卯吉等と組んで、新富座に大演說會を開き、政府攻擊の矢を放つた、左樣ぢや、その時は、まだ福地も民權黨の一人であつたのぢや」

「而して此時政府に幅を利かせてゐた大隈重信も、廟堂の上で、國會開設を稱へたので、ますます人氣を添へ、遂に此の官有物拂下事件が動機と爲つて、明治二十三年を期し議員を召して國會を開く、といふ大詔が煥發さるゝに至つたが、それと同時に、大隈は、矢野文雄や、小野梓や、犬養毅、尾崎行雄等の子分を率ゐて野に下り、板垣を中心として、民權を唱へた我輩等も、黑幕に後藤象次郞を控へて、自由黨の組織に取り掛つた、や、あの頃は、我輩等の最も多忙多事の時であつたわい……二十年後の今日、此時民間の泰山北斗であつた板垣大隈等は、一隅に屛息して、當時世人の口の端にだも上らなかつた桂や、小村や、曾根や、清浦等が、日露戰爭といふ世界の大舞臺に立ちて、我國百年の運命を定むる花役者に爲らうとは、夢にも期しなかつたのぢや」(禁轉載)

進化論の法則より戀愛を論ず

K、生

威武も屈する能はず、富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、げにや熱烈天に冲する戀愛の焰は、千古、萬古、萬々古、大和田の源を開き、地球の水を傾け盡すも決して之を熄やす能はざるなり。城を傾け、國を傾け、家を失ひ、身を滅ぼし、流離邅迍、坎坷落魄、肝腦地に塗れ、肢體處を異にして尙且悔えざるの戀的悲史を讀む每に、吾人實に紙を覆うて戀愛の力の絕大なるに驚かずんばあらず。

抑も戀愛とは何ぞ。兩性相見て紅を其若き頰に潮

し、情思纏綿夢寐尙忘るゝ能はず、遂に相擁して眠り、家を作し子女を娩むの謂ひか、若くは彼の詩人の稱する如き星郎菫女愛の爲に愛し、戀の爲に戀し、必ずしも肉交を意味せずして永久に渉るの謂ひか。ショウペンハウエルの定義に依れば「戀愛は種族の意志を遂行せんが爲めに甘餌を與へて思慮なき男女を驅使するに過ぎず、故に生殖力未發達の少年少女に起らず、生殖力殘衰の老翁老媼を誘はず、唯種族繼承の器械たるに足る人生成熟期の兩性にのみ行はる。生物の横着なる、戀愛の蜜なしには種族繼承の勃窣なる勞働に服するものに非ざればなり」。余の戀愛觀に至てはこの說に一歩を進め、人類の戀愛は進化論の大法則を以て解釋せらるべしとなすものなり。

進化律に所謂適種生存なるものは、種族の特長の遺傳を意味するものなり、保護色を有するの動物は之を有せざるものより生存の便利多かるべく、沙に住む虫の褐色は其特長にして、青葉に住む虫の綠色はまた之が特長なり、豹駝（ジラフ）の長頸は他の同類の達する能はざる樹枝を嚙み得て、他が食物の缺乏に斃るゝの際にも能く其生を保つべく、兼ねて望樓の用をなして襲敵を危險なき遠距離より認め得て之を避くるの便利さへ有せり、或種類の苜蓿は其花に特有の色と香氣とを含み、巧みに昆虫の注目を惹き、足繁く自家の花を來訪せしむることに依て生殖の媒介たらしむるに都合よきこと他の種類に勝るの事實は、其特長を遺傳して益々生存せしむるのことゝなるべしとは進化論の法則の一班にしてこの特長を發揮して多々益々生存することは、「生めよ、殖えよ、地に充てよ」と宣告して天地を創造したる大能の經綸より出づる宇宙の大要求、否な大命令なり、故に之を奉ずるものは昌え、之に叛くものは滅ぶ。

然らば人類には何の特長ありや、何の特長ありて之を遺傳して生々の大經綸を遂ぐべきや、吾人に獅子と格鬪して之に勝つの爪牙ありや、象と相搏て之を斃すの膂力ありや、鳥の如く空を翔り、魚の如く水に潛み得るや、吾人に保護色のあるなく、吾人に芳芬美色あるなし、吾人の特長は別に存ず。

黑岩氏の天人論に曰く「吾人の強きは弱きが故なり」と、弱きが故に相互に扶助せざるべからず、扶助せざるべからざるが故に愛せざるべからず、愛するが故に進歩あり、智能生ず。泰西の詩人は歌うて曰く、「吾人がこの大地球を想像して其偉大を思ふ毎に自らの小にして數ふるに足らざるものなるを感じて意氣銷沈を禁

ずる能はず、然れども更にまた吾人が胸に誇の囁きを聞く、地球は大なり、誠に大なり、されど汝は想ひ得るにあらずや、愛し得るにあらずや、されど地球は之をなし能はざるにあらずや』と。噫々吾人は獅子の利爪と、象の膂力と、蟲の保護色と、花の芬芳とを缺く、されど吾人に彼等の有せざる愛の心あり、救世大聖の垂訓に曰く、神は愛なり、故に汝曹も相愛せよと、吾人の人たるは實に愛あるに依る、吾人は戀愛の歷史を讀て愛が與へたる驚嘆すべき弱者の勇氣を見る、噫々勇氣！これ實に一切の事物の根源に非ずや、故に曰く、吾人の特長は勇氣の源泉たる愛にありと。

愛の至純至粹なるもの之を戀愛となす。戀愛の起るはこの特長を遺傳せしめんとする進化律の大要求に依る。蓋し青春戀に燃ゆる兩性の求むる自然力に見よ、人の世の奸惡より出てたる小倫理の鐵鎖なき彼等は驀地に其遺傳行爲に走るに非ずや、吾人は之を以て美なる自然の現象にして、かゝる衝動に依て性交する兩性を目するに自然律の大忠臣と諧美するものなり。

兩性に依らずんば營まるゝ能はざる遺傳行爲は、必ず兩性の愛の均一を要す。一毫の輕重あらんか戀愛は成立せざるなり、聞かずや「可愛さ餘つて憎さが百倍」ダビデの兒アムノン其異母妹タマルを戀ひ、之を自己の寢室に誘致し、イスラエルに愚かなる事なるの故を以て拒める妹を力の爭ふ能はざるに乘じて遂に强ひて之と寢終るや、彼は初めに愛せる愛に百倍するの憎みを以て之を惡み、人をしてタマルを其室より逐はしめたりと（サムエル後書十三參照）情を以て之を見る、固より殘忍無道の行爲なり、而かも自然の要求は斯くあらざるべからざる處、物平を得ざれば必ず鳴る、當事者の一方が愛し、一方が愛せざる場合は決して特長の遺傳を能くす可きに非ざればなり。

昔者基督婦を見て色情を起すものは心の裏已に姦淫したるなりと叫び、鈴木醇庵（なりしと覺ゆ、嘗て日本人に出たる論說）は生殖の目的を以てせざるの性交は之を姦淫といふと叫びたり。吾人は實に曰はんと欲す、兩性同一の愛情を有せざるに漫りに性交するもの之を姦淫といふと。或は曰はん、愛は無形なり、如何にして其量の同じきを知らんと、然れども吾人に測量の法あり、互に自己の對手を以て人類の中に之に勝て自己の愛を捧ぐるものなしとの自覺、藤村の詩に所謂『戀は我身の社にて、君は社の神なれば、君の登壇の上ならで、何に生命を捧げまし』の如き自覺是れなり。

結婚は學校卒業の故になすべからず、ダイアモンドの指環の故になすべからず、門閥の故に、血族の故に、資産の故に、地位の故に、若くは才學容貌の故に爲すべからず、唯々唯一無上と自覺せる互の愛の故に之を爲すべし。

星といひ、菫といひ、神聖といひ、永久の理想といひて性交を輕蔑するが如きは戀愛を飜弄し、冒瀆し、宇宙の大法則に對して反逆を企つるものなり。

知れ『天に星あり、地に菫あり、食後に苺ありて人に戀愛ある』はヘボ詩人に戯れの材料を供せんとにてはあらざることを。

（完）

閑窓走筆

茅原華山

▲僕に嗜好なく、道樂なし、酒飲まず、菓子喰はず、寄席に入らず、劇場に赴かず、碁圍まず、將棊指さず、相撲看ず、藝妓招かず、唯最も入浴を好む、更に野外の漫歩を好む

▲僕、今や頑健なりと雖も、少時病多きに苦しめり、英人が戸外の遊戯を愛するを嘆美し、遂に野外の散策を以て、其日課と爲すに至れり、僕の頑健なるは、焉ぞ此野外散策の賜ならざるを知らんや

▲僕の浴を好むは、論語を實行したるなり、嘗て村塾に在りて、暮春に春服已に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らんの語を誦し、是より間あれば溫泉の客たるを樂みと爲せり

▲山形縣は溫泉國なり、長野縣も亦溫泉國なり、身久しく溫泉國に客たりしを以て、能く其理想を實行し得たり、靈泉に浴し罷み、輕衣にして山川を跋涉す、我れをして自然の兒たらしめ、我れをして宇宙の寛きを知らしめたるは、實に溫泉癖の賜なりと謂ふべし

▲信に別所溫泉なるものあり、僕屢々遊ぶの地、詩あり此に錄す

樓凌㆓縹渺㆒倚㆓斜暉㆒。宇宙行來活潑機。事可㆓端倪㆒奇與㆑正。場堪㆓出入㆒是還非。陽生㆓地脈㆒梅爭發。雨過㆓江頭㆒雲亂飛。浴罷靈泉心自胖。好披㆓春服㆒詠而歸。

此樂や王侯將相も亦容易に到り得ざる所

▲都門に入りてより、衣奔食走、風塵面に堆し、而も復た溫泉の客たるに暇なし、唯廢せざるものは、郊外

の漫歩のみ、我家市ヶ谷停車場に近し、電車一たび馳すれば、近きは新宿、澁谷、目白に到るべく、遠きは品川、大森に到るべし、更に市街鐵道に由りて、上野、向島に赴くべし、僕は淺草公園を愛せずして、上野公園を愛す、上野公園を愛せずして、向島の長堤を愛す、向島の長堤を愛せずして、隅田村を愛す、其益々野趣に富むを以てなり

▲東京の郊外を幾往還して、物足らぬ心地に堪へず、何故に物足らぬかは自ら解する能はざりき、唯何となく物足らぬ心地するなり、物足らぬと直覺しながらも、容易に自ら其然る所以を意識する能はざりしなり

▲或日、ハタと手を打ち、自語して曰く『東京の郊外は、秋色春光共に愛すべしと雖も、獨り山なきを奈何せん』と、曩きに屢々物足らぬ心地したるは、全く山なきを以てなり、羽前の如き、信濃の如き、群山重嶺の裡に生活したるものよりして、月子が草より出て、草に入るてふ一望千里の武藏野に入る、其山なきに物足らぬ感を起したるは、亦已むを得ざるなり

▲然りと雖も、夕陽暮雲に映じ、五彩燦然たる裡、遠く白芙蓉が夢の如く、半天の外に立つを望むに方りては、物足らぬ心地は忽ち消え盡くし、喜て自ら頓ぜんと欲す、『我宿は松原つゞき海近く、富士の高根を軒端にぞ見る』昔人の遺歌を誦し來りて、詩魂は早く已に神山の絶頂に在り

▲人あり、書を寄せて、僕に問ふて曰く、汝は來世を信ずるやと、僕答へて曰く我れは信ぜず

▲來世、天國、極樂の問題は、人が永遠の生を樂しまんとの慾より來る、換言すれば、生命の慾より來る、人生五十年、勞々役々として經過し了す、別世界を渇求する以なきに非ず

▲所謂、前世、當世、來世とは、平く言へば、昨日、今日、明日なり、昨日、今日、明日は即ち永遠なり、不朽なり、夫れ昨日は始めなき始めに繋り、明日は終りなき終りに繋る、人此間に生きる、人生は即ち既に永遠の生、不朽の生なるに非ざる歟

▲時間と永遠とは一なり、猶空間と無極と一なるが如し、人、或る空間を劃す、故に空間あり、然れども無極の外、豈別に空間なるものあらんや、時間も亦然り、時間とは人爲的に永遠を劃したるものゝみ、午前といひ、午後といひ、昨日といひ、今日といひ、明日といひ、皆人自ら便宜の爲に限劃したるのみ、自ら限劃したるを知らず、時間以外に永遠を求め、不朽を趁はん

とす、惑へるも亦甚しからずや

▲人生唯往を繼いで以て來を啓くべきのみ、人生は生存競爭なり、生存努力なり、競爭と努力とは、苦痛を豫想す、然らば則ち、人生に於て樂は遂に得べからざる乎、曰く、否、苦處樂にし得來りて、始めて眞樂在焉

▲我家亦星ヶ岡と相近し、最も晩涼を趁ふて登るに適す、四面皆綠樹、天綠、地綠、樓臺亭榭皆綠、人の鬚眉衣袂亦綠ならんとす、茂樹の間より城市隱見す、城市亦俗ならず、電氣燈亦俗ならず、瓦斯燈亦俗ならず、繁絃急管亦俗ならず、增上寺の鐘、一杵二杵三杵、雲を破りて響く、是れは此れ舊日本の聲、麻布兵營の喇叭、一聲二聲三聲、水を渡りて傳はる、是れは此れ新日本の聲

▲若し夫れ、暫く岡上に徘徊し、日枝神祠の鈴、天半に響くを聞くに至りては、唯是れ神、唯是れ靈、好て神秘を言ひ、好て靈化と言ふ所の端書文學者、能く解して此境に臻り得たるや否や

斷雲片月（二）

高瀨文淵

▲來世の希望

○過去をいへばさうである、さらば未來はといつて見ると。未來も矢張り人の靈は必ずそのやうな世界に還つてゆくといふ自覺と自信とが各人にあるので、これは何者も拒むべからず遮るべからざる萬人共通の信念である。

○死といふことは、譬へば油の盡きると共に次第〳〵に消えてゆく燈火のやうなものである。さう思ふのは、近世の生理學を根據とした淺薄極つた考であるが、腦の細胞が人間の靈魂を支配する主人でないといふことは、その細胞の生滅の極めて迅速であることゝ、自我の觀念が永久不變であるといふことを較べて見ても、個中の消息に判らうではないか。

○無常迅速の神經細胞が、どうして常住不滅といふ自我の觀念を生み出すことができやうか。生理學はまだ其邊の理由を説明し得るまでに進んでゐないといふことは、恰も、星學が全宇宙を説明し得るまでに進んでゐないと同じである。

○もう一つ腦髓が、人の主人となるに堪えないといふ證據を擧げると、彼れには睡眠といふことがあつて、その作用が、一時休息しなければならないといふ事實である。腦は睡眠時間に於て全く働きを停止する。その機能は動物的官能ばかり支配し得るもので、植物的官能は大腦の直接の支配を受けないのである。知覺と運動との二つの作用は、如何にも大腦の管轄であるが、消化や血液循環などは、大腦の關係がないとすれば、そも〳〵睡眠時間に於て、この全身を支配するのは、靈魂でなくて何であらうか。

○眠催術は、大腦を一時睡眠狀態に陷らしめるものであつて、普通の塲合に於ける知覺や運動の作用を中止させてしまふが、さりとて人の靈魂までも眠らせてしまふことは出來ない。否、靈魂は大腦の媒介作用が無くなつたために、却つて活潑に働きはじめて、その本來の超自然的作用に基き、空間を超絕し、時間を超絕し、無限無邊の大靈と相呼應して不思議の働きを始めるので、その生活の範圍の絕大なことがわかり、その生命の不滅であるといふことも之で判らう。

▲樂土の實現

○この超自然的實在は、單に過去や未來にばかり關係をもつものでないので、すでに、現在に於てすら物質を離れて存し、又物質を離れて活動してゐるのである。

○物質世界の現象の裏には、現に、不變不拔の理想が實在してゐるといふことは、すでに疑ひのないことで、物質そのものは頽れても其の內容たる理想だけは決して變らないではないか。彼の櫻の花などを見るに、これを構成するところの材料は即ち物質から借りたもので、その植物細胞は土から借りたものなればこそ、落花と共に、元に還して以前の土にするのである。物質世界から觀察した櫻といふものは、かくの如く墓ないものであるけれども、理想世界から觀察した櫻は實に常住不變で、美を盡し善を盡したものである。年々歲々、少も變つたところのない花の姿は、即、櫻に固有の理想で、その花の美は、理想の具へた天然の美ではあるまいか。

○蓮を見ても、薔薇を見ても、椿を見ても、海棠を見ても、一草一木皆悉く固有の形式を具へてゐる。この形式こそ即ち理想で、自然の賦與したものである。彼等は自然より賦與された理想は實現し得たのであるが、尙、その理想の源を辿つて、遠い樂土をあこがれ慕ひ、能ふべくんば、今一層美しい理想に近づかうとして、夢想し、欽仰し、憧憬し、苦悶しつゝあるのである。

▲現代思潮の缺點

○淨土といひ、極樂といひ、天國といひ、アメといふのは、やがて、この夢想し得た世界を指すので、理想世界の眞相が、その夢想し得た世界の通りであるか無いか、それまで追窮して尋ぬるには及ばぬ。

○草木といはず、禽獸といはず、人類といはず、あらゆるものが、皆そのやうな世界を夢想してゐることだけは事實で、唯一人としてこの事實を拒否することは出來ないのである。

○かういふ世界を欽仰し、讃美し、憧憬するところから、そこに宗敎そ成立つので、その理想を現實し得ないで苦悶し歎息し絕叫するときに、宗敎意識が愈々切實なるものとなるのではあるまいか。

○かういふ消息は、猶宗敎家にばかり委れておくべきものではないので、詩人小說家の筆を藉りて、隨分奇拔な幽玄なたよりを聞かせることもでき、又讀者に向つても無限の藉慰を與ふべき筈であるのに、今の作家は當世の時代思潮を寫すが急で、曾て這般の消息を傳へようとも思はないのは、そも〳〵どういふものであらうか。

○自分は敢て今の時勢にダンテの神曲やミルトンの失樂園を推奬しようとは思はぬが、しかし、人間は肉體ばかりでは出來て居らない。誰一人として靈魂を具へてゐないものはないので、時には詩人小說家が靈界の消息をも傳へてくれるようにしたらば、いかに單調な殺風景な無趣味な現世の風尙に向つて慰藉を與ろか判らぬであらう。

▲寫實派と理想派

○もとより今の時代思潮は、この淺ましい肉慾と浮沈し惑溺しつゝあるのであるから、その恐るべき驚くべき又歎ずべき有樣を寫出すこともわ

ろくはなからう。併し、それては、たゞ事實の半面を傳へただけて、他の靈界の半面を示してくれないては、一向に肉の爭の淺ましい次第も判らないわけて、餘韻といふものが美術文藝に現はれ來るべき筈がなからうてはあるまいか。

○自分は久しく文壇の消息といふものを聞なかつた。又劇壇の樣子なども知らなかつたが、高田實の評判をきいて、先頃本郷座を覗いて見て、はじめて名高い『不如歸』の筋をも伺ひ知ることが出來た。自分は蘆花子の作物の評判のよいのは成程其筈てあると思つた。その作物が時代思潮に觸れてゐるところの多いだけ、あの作物が生命の永いわけてもあらうけれどもあゝいふ作には、それとなく何處かて靈界の消息を傳てもらひたいやうな感じが起つた。

○自分は『竹取物語』の意匠について今に滿腔の嘆美を禁じ得ないのてあるが、權力以外、官爵以外、利慾以外、肉慾以外には何事にも重きを置かない今の人には、時にはあのやうなものを見せ、この世界の限りもなく廣いところ、高へところ、清いところを、見せてやるのが、何よりの慰藉て、又何よりの功德てあらうかと思ふ。(完)

家庭に於ける女子の運動法

井口あぐり

我邦維新以來盛んに歐米の文明を取捨して之を種々の方面に採用し、教育の上などに於ても今日の如き一大進歩を見るに至つたのでありますが、併し是迄の教育の仕方をよく見ますと一般に學術とか文藝とかいふ樣な心智の鍛錬にのみ多くの時間と力とを費し、將來社會に立つに最も緊要にしてしかも人生の最大幸福たる身體の強健を計るのは全く度外視して居た樣に思はれます、永年の其不注意の結果はだん／＼身體上に影響を及ぼして年一年に我國青年の體格上に面白からぬ成績があらはれて來たのであります。又一方に於ては近來種々の動機からして我國民と他國民と比較する場合が多くなるに從ひ、我國民の體格が大いに他國民に劣り此儘で過して行つたならば到底競爭に打ち勝つ事がむつかしからんといふ事がわかり、又一方に於ては學術進歩の結果として心神の密接なる關係はます／＼明かにせられ、體育は實に教育の基礎であつて之がなければ知育も德育も共に完全なる事は出來ないといふ事は世界中の教育家の輿論となつたのであります。かゝる種々の原因よりして我國に於いても體育の必要を說く人が次第に多きを加へ殊に女子の體育は男子のよりも一層おくれて居るといふ處から大いに女子の體育を奬勵すべし、女子の體格を進步せしむべしなどと唱へらるゝ人が日に月に多くなり其道の人々もいろ／＼研

究して其實行の方法を講じて居るのでありますから少くも近來學校生徒中に於ける女子の體育の方面には漸く進歩の色を呈しつゝあるのは國家の爲め誠によろこぶべき現象であると思ひます、

併しすべて事物の改良進歩を計るについては必らず多少の困難の伴ふ事は實際免かられない處でありますがわけて此女子體育の改進といふ事になつては我田引水の申分ではありませぬけれども實に一通りならぬ難事である樣に考へられます、即此目的を達するにはどうしても我國從來の女子の習慣風俗を打破しなければならぬ點が多いので勢ひ古い思想との衝突上つまらぬ攻撃を受けたり、とんでもない誤解をされたりして種々妨害を蒙り實際に當つて見ると實にやりにくい事が多いのであります、夫故世の中の人々が之に伴ふ多少の弊害はなるべく大目に見て多少同情をはらつてをつてくれなかつたならば折角進みかけて來た事も思はしき結果を得ないでやんでしまふ樣の事になりませうと思はれます一體體育と申しますと其範圍がなか〳〵廣いのでありますから眞面目に根本的から其改進を計るといふ事になりましたらそれこそ大變其關係する處が大層大きくなつて我國目下の狀況では何處から手をつけていつてよいやら殆んど別らないやうであります、併し身體を健康にし强壯ならしめ、ひいて精神上の訓練にまでも影響を及ぼす處の一大方法は運動であつてしかも此運動なるものは從來の日本女子にとつては最も不得手なる處、近來までは適當の方法も講ぜられず至りて不進の有樣でありますから此方面の改進を計るのみでも我國女子の體育上少からぬ効果をあげる事だろらうと思はれますからまづ私共は其點に眼をつけて着手して參るのが第一の要務かと信じます、

處で其運動といふ事もなか〳〵意味がひろいのでありまして、あるくのも運動ふき掃除するのも運動米を炊き水を汲むのも運動、洗濯するのも裁縫するのも皆運動であります、それで、或一部の人々は女子なとは家の中に居て其家事上の務めに十分立ち働きさへすれば夫で立派な運動になつて居るのである、別にやかましく體操をしなければならないの、遊戲をしなければならないなどといふ必要は少しもないと言れるのであります、けれども眞に體育の目的を達しやうとする爲めの運動なるものは決して右の如き狹き無意味のものではない、其運動によつて身體全部の機關が調和的發達を遂げ體が達者に力强く擧動敏捷にしかも其容儀風采

を優美閑雅にし同時に鞏固なる意志の訓練や、快活なる氣質の養成などせられるでなければならぬのであるから其運動たるや必らず生理學と衛生學等の理屈にあつたものでなければならぬ、一寸考へて見ても明かでありませう、毎日〳〵家の中にばかり引き籠つて或人のいふた樣に料理や、洗濯など計りして居ては運動せぬよりはましでしやうけれども、夫のみでは不正の姿勢を直したり、身體諸部分の釣りあひよき發達を遂げて優美な態度を作つたりする事は到底出來ぬのであります彼のお三どんや、勞働者の妻女などは其よい例ではありますまいか、

もし我邦の女子が從來我國の美人として大いにもてはやして居た樣な顏色の蒼白い、首の細長い猫脊で胸が狹くて薄い、手足の瘦せた病人じみた樣に、又は豚か角力取りの樣にデブ〳〵に不格好に肥え太り體も思ふ通りに動かされず少しあるいても息切れがするといふ樣な女になつても一向に構はぬといふ事ならこれ迄の通りに家の内にのみ引き込み、日の目も見ず、風にもあたらず碌な運動もせずに日を送つてもよいでしやう。けれども將來の日本女子の責任を考へ當時頻りにあげつゝある國威をます〳〵發揮し世界の強國との競爭に打ち勝たんが爲めに雄壯有爲なる相續者を出さねばならぬといふ至大の事に思ひ至つたならば宜しく大奮發して毎日規則正しい運動を行ひなるべく戶外に出で日光をあび外氣に觸れつゝ活潑なる遊戲をもする樣な心懸けでなければなるまいと思ひます。現今女子の學校では右に述べた樣な方針で體操や、遊戲を課して居るのでありますが中には之を見てお轉婆にするとか、粗暴にするとかいふて大いに攻擊する人もありますが併し夫は餘計の心配であると思はれる。もし果して其運動の爲めに右の如き不結果を來たすならば、夫は其擇む運動が當を得ないか、其指導する人の行き屆かぬかによるものであつてもし理屈にあつた適當の運動で、正當に導いて參りましたならば其體操遊戲によつて體質の虛弱なるものも强健になるは勿論擧動の粗暴なるを優美にし、卑屈なる者を快活に、馬鹿な人をも悧巧にする事が出來る事は實驗によりて證し得る事であります。學校教育に於ける女子體育法は前申上る樣に近來餘程進步しつゝあるものでありますが退いて學校外の一般女子の體育に至りては實にあはれな有樣であります、或は多少其方に意を傾けて居る女子あるにしても未だ設備がない、夫故如何に戶外に出て、

戯したい運動したいなど丶思うても到底實行しがたいのでありますが是等も何時か時が到つたなら遺憾なく出來る樣になる日もありませう、併し其機運が果して何時熟するものやら夫まで空々漠々して打ち過すのも實に馬鹿氣た殘念な次第であります、夫れでこの樣が不自由な、不完全な場合にあつてならば之に處する他の方法を考へ、なるべく手輕にしてしかも割合に效果の多い運動法を見出す事が必要かと思ひます、その樣な運動法はいくらでもあります、即ち何の設備も要せず金もかゝらず、強て外に出るにも及ばず只自分の體と疊一枚位の場處があれは出來る仕方があります、今左に之をあげて見ませう、が併し設備もかゝらず一金もかゝらない代りに他に大變なもとでかいるのでありまし、夫は忍耐といふ事であります、即ち其運動法は大勢と一處にするのではなく、只自分一人で行ふのでありますからどつちかといへば苦しくて割りに興味がないのであります、夫故苦しいとか、面白くないとかいうてすぐとやめてしまふ樣では到底其成績はあがりませぬ、其苦しいおもしろくない點をよくこらへ、毎日の三度の食事をすると同樣に、お役目の樣に考へて毎夜寢につく前十分か二十分かの時間をさいて、まじめに熱心にやつて御覽なさい、きつと其運動のきゝめがあると思ひます、併し藥劑の樣に一服飮んですぐ腹痛が平癒したの、下痢が止まつたのといふやうに即時に其效驗はありませぬ運動をして其成績があらはれるまでには多少時日を要するものでありますから心永く、ゆつくりと、絶えず、怠らず續けて行くのであります、その樣にして月日をかけて參りますならばだんだんに内部から整うて參りまして自然に天然の美が發達し皮膚の色澤や肉つきがよくなり肥えすぎず、痩せすぎず、擧動も優美閑雅になつて其風采も大いにあがつて參ります事だろうと思ひます、彼の食物、運動などを度外視して徒らに紅粉を用ゐて其容貌を飾るものなどは比較にならぬ程の差が必らず見出される事は受あひであります、

運動の種類及順序

何の運動をするにも其立ち方が正しくなければならぬ即ち其姿勢を正しくしなければいけぬ、其正しい姿勢とは兩足の踵を合せて足尖はひらき膝頭はよくつけて且つ伸ばし腹は前に出てぬ樣胸を張り肩を後に引き腮を内に頭を正しく保ちなさいそしてあまり固くならないやうになさい、其姿勢をとつて夫か

ら次の運動を順次におはじめなさい

第一 下肢の運動

兩手を腰にとりて足尖と踵とをかはる〴〵上下す、

第二 首及胸の運動

頭を後方にまげて再び前の位置に復す、頭を後に屈する時は腮を首から離してはいけませぬ、腮を内に引き頭を後に屈げると同時に鼻から充分空氣を吸ひ頭をおこすと同時に口から充分息を吐くのであります、

第三 上肢の運動

兩臂を上下左右前後に屈伸す、

第四 調和運動

兩手を頭の後にとり左右の一脚を前後左右にあげるのであります、肩はよく後方に引き又脚を擧げる時は膝頭も足首も充分に伸ばしてよく胸を張る樣になさい、

第五 背の運動

兩手を腰にとり上體を前に屈し元の姿勢にもどす、頭をよくする、肩を後に引き脊柱の曲らぬやうにしないと此運動の目的にはづれます。

第六 腹の運動

兩手を腰にとり上體を後に屈して元の姿勢にもどす、上體を後に屈げる時に、膝頭をまげぬ樣にどこまでもよく伸し、また腹部を前にあまりつき出さぬ樣になさい

第七 腰の運動

兩手を腰にとり上體を左右にまげ元の位置にもどす、

第八 跳躍運動

名の通り飛ぶか、跳ねるか又は駈足をするか階段を登るか、何んでも急に力を使ふ運動をするのです

是は或は室內などでは出來がたいかも知れませぬがどうか都合をしてやつていたゞきたいものです、

第九 下肢の運動

膝を屈伸するのである

是はもしどうも都合が出來かねて第八の跳躍運動をしなかつたら別にせんでもよろしいのです、

第十　深呼吸

鼻から充分吸息して口から吐くのであります

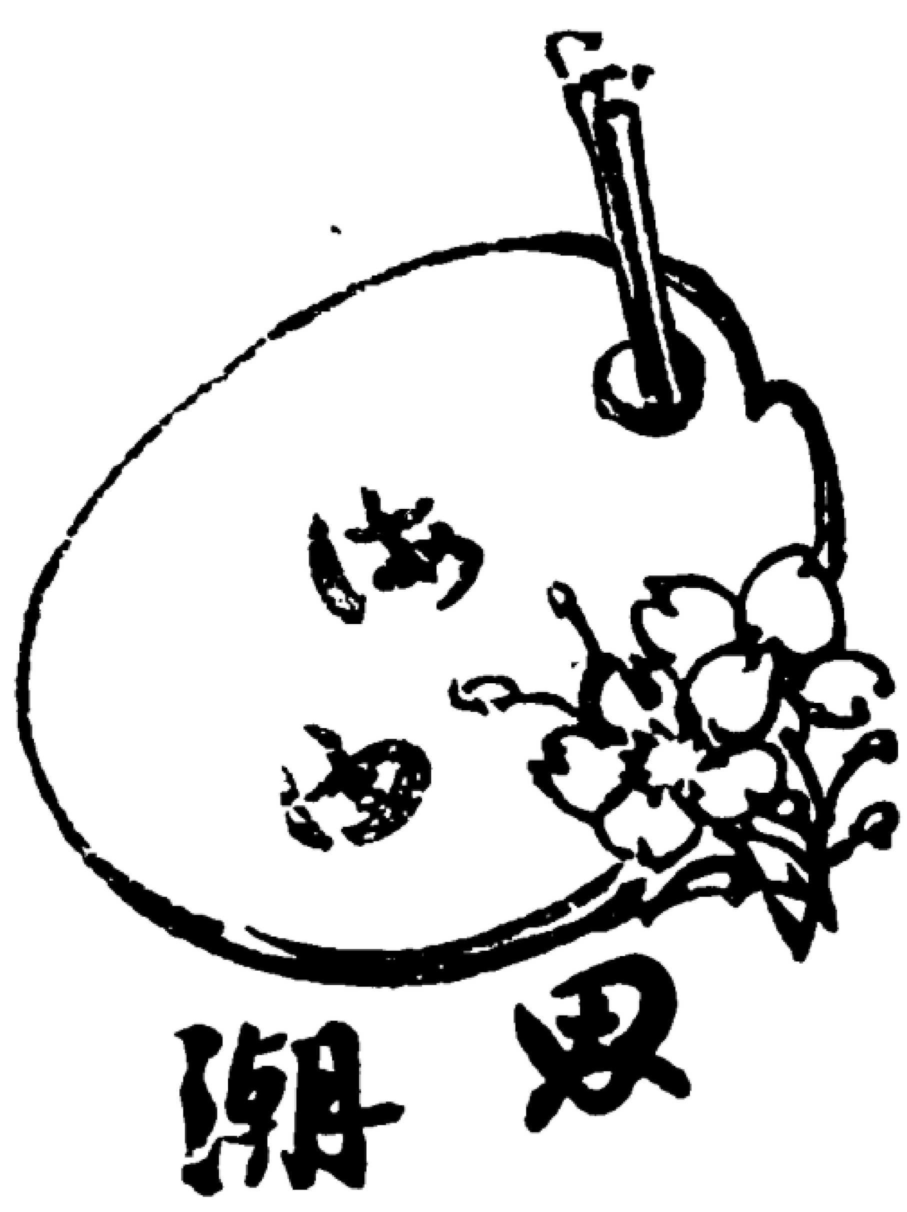
右は私の人にも敎へ自分も行つて居る運動の一端であります、此十種の運動が人の體質、年齢などによつて種々變化するのでありまして右に掲げたのはそのごくやさしいのでありますから大抵の御婦人方にも必らずあまりの苦しくなくお出來なる事だろうと思ひます、毎日右の運動をなさつた上に立ち働らくなり又は他の方法で身體を動かすやうにお心かけなさい、

また右の運動を行ふ回數ははじめ三四回づゝ、なるゝに從つてだん／＼多くなさい、併しあまり疲勞しすぎない樣に少しつかれたと感ずるまでを度合としておやめなさるがよう御座います（圏點は編輯者之を附す）

▲次號豫告

○小說『一夜』　夏目漱石作

髯のある人と、髯のない人と、涼しき眼の女が會して一夜を過した物語。「彼等の一夜を描いたのは彼等の生涯を描いたのである」とは作者の言。奇拔斬新此作家獨得の詩境。



近時外交のサイドライド

［慶應義塾政治學會に於いて］

竹越與三郎

我國が西洋列國と交際して以來最早五十年にもなりますが、其中は實に外交なるものはなくして來たのでありまして、外交らしいものゝ出來たのは日清戰爭の時であつた、此日清戰爭に就て三國が如何なる干渉をしたかと云ふことは、諸君も御承知でありませうが、其時のことを今聞いて見ると、實に慄然として恐ろ可きことがあつた、それは日本が牙山に勝ち平壤に勝ち愈々滿洲を破竹の勢を以て行くと云ふ時に、最早英露の間に默契があつて此戰爭を止めさせて仕舞ふと云ふ話合が始まつて居つた、之は當時新聞で御承知で御座いませうが、英國のアドミラルフリーマントルと云ふ人が、始終我軍艦の後を追ふて來て我軍艦が燈火を消して偵察に行く向ふから燈火を點じてやつて來て、兎角邪魔すると云ふ風說があつた、其後日英同盟が出來た時、フリーマントル氏が日本に來て其當時決して他意はなかつたと云ふことを辯疏しましたが、吾々は其フ

リーマントルのアクションが單獨でなくして英國政府とは關係はなかつたにせよ、北京在留英國公使と話合があつたことは掩ふ可からざることであると思ひます、それは當時英國の北京に於ける公使はオコンナーと云ふ人である、之と露西亞の公使と話合がありまして、日本を此上何處までも行かせると云ふのは甚だ不利益だから、一ツ忠告して止めさせやう、但し勝ち誇つて居るから忠告位では止めなからうから、二三發位大砲を撃たなければ行かないと云ふので、オコンナーは露西亞の公使と相談した結果、フリーマントル氏に日本艦隊の邪魔をさせることになつた次第であつたと思はれるのです、これにオコンナー氏が時の英吉利政府に建策して恁う云ふ風にして戰局の發展を邪魔しなければ、支那に於ける英吉利の利益は地に落ちて仕舞ふと云ふことを頻りに八ヶ間敷云つたのでありますが、併し當時頭腦の最も冷かにして且つ外交の上に於て極めて老練の名ある、ロイズベリー卿が内閣の首相であつて、スペンサー伯が外務大臣であつたので、トウ／＼其策が容れらなかつたのは誠に幸でありましたが、兎に角恁う云ふことがあつたのであります。此のオコンナー氏は其後聖彼得斯堡駐剳大使となつて行つたことが御座います。

英露の協同運動が彼れに了つた結果三國同盟と云ふものが始まつたが、オコンナー氏の建議を斥けて容れなかつた所のローズベリー卿は、無論獨逸の誘に拘らずして之れを拒絕しました、其後英吉利の政府が代つて、今の印度の太守カーゾンと云ふ人が外務次官をしたことがあります、其時我國の或政治家が同卿に向つて、三國干涉の時日本が若し非常に突張て三國と戰端を開く樣なことがあつたならば、英國はドウ云ふ態度を執つたであらうかと問うたに就て、カーゾン卿は、或は此場合英吉利は厭や／＼乍ら戰爭の渦中に引込まれて三國と戰爭をしなければならないと云ふことになつたのであらうと恁う云ふ話であつて、此一言は非常に價値のあることゝ思ひましたから、此政治家から時の政府に報告したのであります、之が日英同盟の成る端緒であります。

自由黨に由て立つたローズベリー卿三國干涉を斥けて、オコンナー氏の策も斥けて稍々日本に親近になりました、其次に代つて立つた保守黨の政府に於ても、同一の意見を持つて居りました、之が日本と英吉利と同盟する基礎でなくとも、少くとも先驅と云ふてよいのでありまして、此等の發は我國には甚だ不愉快には聞えなかつたのである、時に朝鮮に於て我國の公使三浦と云ふ人が餘程豪傑であつて（以下暫時速記中止）非常な亂暴な騷ぎをやつたことがある、其結果として朝鮮の國王は露西亞の公使館に逃げこむことになつた、之は餘談でありますが、此時福澤先生などの熱心と云ふものはエライもので、當時權榮鎭と云ふ亡命者が日本に來て居つた、此人は先づ金玉均などを除いては其智惡のあること朝鮮の志士の中でも一等である、之は平壤出身の、元は賤しいもので、巡査上り見たやうなものであつた、福澤先生は此時朝鮮に於てさう云ふ悲劇が起つた結果、ドウでも朝鮮は露西亞に取られて仕舞ふ、何とかしなければならぬとて權榮鎭を呼んで非常に激勵して、英國がドウも朝鮮問題に就て甚だ熱心が少なくていかん、故に之はドウしても英國を引込む考へをしなくてはならぬ、それに就ても日本が朝鮮を取ると思ふから行かん、之は一ツ權榮鎭が英吉利公使の所へ行つて日本は迚も賴みにならぬから、朝鮮の國を舉げて英吉利に命を聽くから朝鮮が露西亞の手に落ちるのを救つて貰いたいと云つたらば宜からうと云はれました。そこで權榮鎭が日本政府が愚圖々々して居る矢先でありますから、先生の命を聞いて、早速英吉利の公使館へ行つて英國公使に逢つて、右の樣に話をした、所で、英吉利の公使は又霞ヶ關へやつて來て恁う云ふことがあるがドウであるかと尋ねる、其時は陸奥伯が外務大臣であつたが、之は何れ其

策士が附いて居ることであらうと云ふので取合はなかつたから問題にはならなかつたが併し、福澤先生は其位朝鮮問題に熱心に力を入れて居られました、其頃は川上操六氏が參謀總長でありましたが、一日陸奧外務大臣の所へやつて來て、ドウも朝鮮問題に就ては非常に國論が騷がしくて、此結果再び出兵しなければならぬ樣になるかも知れぬが、今日の所力を以て爭ふことは出來ない故に、玆は一つ國家の爲めに外務大臣は極めて憶病者になつて貰ひたい、軍隊が力を以て是非に遣ろと云へば、それはイケまいと云ふ態度を以て、今は政略上手を出すべき時でないと云ふことに、貴官の一命を國家の爲めに捧げた積りでやつて貰いたいからと云ふと、陸奧はそれは能く分つたことであるから、自分は何處までも憶病者になるから參謀本部の方では飽くまで強くお出でなさいと云ふ樣な譯で、外交の當局はまだ〳〵出兵の時機でないと云つて色々と民心を押へる樣にしたけれども、トウ〳〵押へきりに押へる譯に行かんから、英國と話合をして英吉利は手を出す氣があるがドウか、假しや手を出さなくとも軍艦でも遣つて示威運動でもすると云ふ氣があるか否やを探つて見やうとて、英吉利に向つて朝鮮問題は近頃非常に六ヶ敷なつたが、英吉利政府は之れに對してドウ云ふ方針をお執りになりますかと云つてやると、ソールズベリー卿は答へて云ふのには、『英吉利政府は朝鮮が暴力の爲めに寸土尺地なりとも露西亞に取らるゝを傍觀するとは出來ぬ』と恁う云ふ返事であつた、英吉利政府は寸土尺地と雖も暴力の爲めに露西亞に取られるを傍觀することは出來ぬとは非常な返事である樣に思はれる、それを聞いて參謀本部及び其の他の人々は之は實に千載の一時、今やられば行かんと云ふので、議論が八ヶ間敷起つた所が外交の當局が云ふには、諸君は暴力と云ふ字を御覽になりましたか、朝鮮は今露西亞のものになるとも朝鮮は自ら甘んじて居る、之は即ち取るでなくして遣るのである、暴力で取られるでなくして詐欺師に瞞着されるのである、英國の返事は手を出さぬと云ふではないか、暴力を以て取られるのは傍觀が出來ないと云ふ、詰りプレスチッジを保つ爲めに恁う云ふ返事をしたので、此言葉の裏には朝鮮は如何ともすることが出來ぬと云ふ意味が含んで居る、外交の言葉と云ふものは中々恁う云ふ婉曲なものであるから能く注意しなくてはならぬと云へば、一同大に絶望して軍人も手を引込まして仕舞つた、玆に於てか最早露西亞と衝突いてやることは恐てあるから、露西亞とアンダースタアンクを行つて更に角觸を一日なりとも先へ延ばし國力の恢復するまで、一時を濟する外はないと云ふことになつた、之が即ち朝鮮に於ける日露協商の始めであります』（下略）

文學者に望む

井上圓了

『東洋哲學』

余は元來文學に疎き者にして、文學の眞意義を解せずと雖も、古來我が國の詩歌には倫理道德に關せる者殆んど皆無にして、歌は專ら男女の愛情を旨とし、詩は專ら風月を主とせるを見る、我が國歌の元祖と稱せらるゝ素戔嗚尊の御歌

八雲たつ出雲八重垣妻ごめに八重垣造る其八重垣を、

の如き既に人情を現はすを以て其端を開けり、又假令風月を讀めるものあるも、其の多くは之に寄せて人情を現はせる者なり、詩は稍々之と趣きを異にし、詩經の如きは比較的人情を咏める者多きも、唐詩選の如きは殆んど風流詩を以て滿たされたり、西洋に於ては愛を主とするを以て

從つて人情的詩歌多きも、亦倫理道德に關せる者少なからず、讃美歌の如き其一例なり、然るに我が國にありては倫理道德に關し一般的訓戒を與ふる如き詩歌は皆無の狀態にして、加ふるに在來世上にもてはやさるゝ詩歌の多くは皆有爲轉變を骨子とせる者にして、悲觀的たるを免れず、例へば

花の色はうつりにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

花さそふ嵐の庭の雪ならでふりゆくものは我身なりけり

年々歲々花相似、歲々年々人不同

の如き之なり。斯の如く悲觀的詩歌の多きは實に一大缺點にして、當今の時勢に適せざる者と言ふべきなり、元來、世界人生は見方に由り如何樣にも觀ぜらるゝ者にして、寺門靜軒の如きは佛教の所謂、輪廻轉生說に對し、吾人は此世に處する程面白き事なし、極樂に生まるゝは却つて迷惑なりと言へり、又

限りあれば吹かねど花は散るものを心短き春の山風、

と言へば悲慘極まるが如きも、落花の風は開花の風にして、櫻花の開くを見るのみが樂しきにあらずして、翩々として半天に飛舞するも亦心目を喜ばしむるに足るものなり、亦彼の有名なる

明日ありと思ふ心のあだ櫻夜半に嵐の吹かぬものかは、

の歌の如きも樂觀の方面より考察すれば「明日ありと思ふ心があればこそけふ一日も樂しかりけれ」となり「人生五十恥無功」の如きも亦「人生五十當立功」となる要するに唯一つ心の置き所如何により、悲觀は轉じて樂觀となり、惡苦は化して喜樂となる、

上來述べし如く、我國の詩歌は專ら悲觀的にして、倫理道德に關せるもの少しと雖も、忠孝勸學に關する教訓として

少年易老學難成、一寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲、

心こそ誠の道にかなひなばいのらずとても神や守らむ、

の如きは稍や其要を得たる者にして、又哲學的の詩としては、

含莊洞理化、涉老遣虛無、玄珠握中照、道心益恬愉、

の如きは、蓋し其粹を得しものならん、

抑も詩歌はもと美を主とするものなれば、必ずしも人倫五常を説く必要なく、自然の美、人情の美を現出せば能事終れるが如きも、人格の美、理想上の美、道德上の美も亦一種の美なるを以て、今後の文學者は能く此點に留意して教訓的文學を獎勵し、人格を高尚にし、圓滿完全なる道德上の美を發揮せしめば、蓋し得る所、小少にあらざるべし、これ余が茲に此題を設け、聊か所懐を呈せし所以なり、

（紫紅會公開演說會に於ける演說）

清國に於ける出版事業

靑柳篤恒

『成功』

目下清國に於いて最も賣行きの好い出版物は、普通學の教科書とその參考書で、就中理化學や博物學に關したものは賣行き好く、次には法政、理財等に關するものが好く賣れて居る。百科全書的のものも既に澤山飜譯せられて、大分諸方に行渡つて居る。總て此等の出版物は、全然日本の物を飜譯し、若しくはその編纂の方法を日本式にしたもので、印刷、製本の體裁なども一寸器用に出來て居る。併し大缺點は飜譯に誤譯の多いことで、以上の飜譯物を一見してもその誤譯は實に甚だしいのである。將來清國で出版事業でも遣らうといふ人は、先づ此の事に就いて

大いに注意しなければ成るまい。何うしてそんなに誤譯が多いかといふに、先づ此等の書は如何なる人の手に依つて飜譯せられるかと云ふことを穿鑿すれば、その最も主なる原因はスグに分るのである。即ち出版物の多くは、文字ばかりを知つて、喩へば理化學の如きものにせよ、また數學にもせよ、その學問に就いては、何等の智識をも有して居らぬ清人の手に依つて勝手氣儘に飜譯せられ、飜譯者自身ですら此の書物には何んな事が書いてあるか御了解に成らぬのだから、況んや他の學生などに了解せられやう筈はない。それ故今日の所では、まだ此等の書を文字の外には何等の頭腦をも備へて居らぬ清人に飜譯させるといふのは實に危險千萬なことである。如何に文字ばかりは知つて居つても、例へば數學の智識の無いものに、數學の理論を書いた書の全然に飜譯出來やう筈は無い。然らばこの大欠點は何うして補へば好いかといふと、文章は少し位は拙にしても、その學問に對して正確な頭腦を有して居る日本人の手に依つて先づこれを飜譯し、清人には單にこれを潤色させる位にしたならば好からうと思ふ。また實際の上から云つても、譯文ばかりが如何に巧妙でも書いた理論の分らないのよりは、譯文は少々位拙くても、その主義を確實に譯述した書の方が、遥に勝つて居ることは申すまでも無いことである。清人にしてこの二つを兼ね得た者があれば、それに越すことは無いのであるが、まだ今日の所では、清國人にしてそんな使へる人物は、甚だ尠からうと思ふ。また今日の清國では粗末な出版物でも賣れるとしても、段々智識の進むにつれて、今後は左樣は行くまいと思ふ。自分は目下清國に於ける我が出版業者諸君に向つてこの邊の事も一考を煩はしたい。次にこの種の新出版は、つい近年までは清國で、實業家方面の人以外には餘り多くは讀まれなかつたが、その後官吏の試驗問題に、此等の書中より問題が選ばれた爲に、今日では俄に飜譯物が賣れるやうに成つて來た。

清國出版事業の中心點は上海に限られて居るやうであるが、將來は天津などでも今に盛んにやるやうに成るであらう。今日日本の出版事業者で、清國(上海)で大いに發達せんとして居るのは、金港堂主原亮三郎氏と清人某の共同事業にかゝる『商務印書館』で、これは既に今日でも總ての機關が整頓して、印刷部あり、編輯部あり、營業部あり、中々盛大なるものである。『商務印書館』の今日までに發達し、將來また大いに發達せんとして居るのは、原氏の女婿で、上海の三井物産支店長をやつて居る山本條太郎氏の清人に對する勢力と信用とが大いに與つて力ありと云ふことである。加ふるに『商務印書館』の編輯部には前の高等師範學校教授長尾槇太郎氏が編輯主任となり、清國の名士張元濟氏もこれに加はり、早稻田大學卒業生諸氏もその編輯に從事し、印刷部には加藤駒次氏が部長の任に當つて、大いに事業の繁榮を計策して居る。此の外に博文館主大橋氏も亦近時上海に出版事業を始め、伊澤修次氏外四名の共同事業にかゝる『泰東同文局』あり、故岸田吟香氏等の事業に屬する『勸學會』あり、他にまだ幾多の事業家が彼の地に渡つて此の新事業を始め、上海は書肆競爭地に爲つて居る。其處で清人出版物に對する購買力は何うであるかと云ふと、由來中流以下の清人は、眼に一丁字も無いのであるが、中流以上の人物丈でも何分頭數が多いので、清人の氣に投じたものであれば、隨分賣れぬことはあるまいと思ふ。目下清國人の頻りに渴望して居るのは、主に實用的方面の出版物で、例へば保險、運輸など、云ふことに就いて、詳しく說明したものを飜譯したならば、非常に歡迎せられるであらう。他の方面に亘つては、既に種々なものが出版せられて居るが、獨り實業的方面の出版物は、まだ餘り多く飜譯せられて居らぬやうである。

日露媾和論

渡邊國武談

『太陽』

日露交戰の大主眼は、東洋永遠の平和を維持せんとするにあり、露國の侵略を抑制して東亞に於ける、彼れが呑噬の野望を斷念せしめ、以て清韓の領土を保全せんとするにありしなり、是れ開戰の　大詔に宣給ひし處の根本的大問題なるにあらずや。而して兩國干戈に訴へて以來茲に十有六箇月、其間常に我軍の連戰連勝に歸し、彼の奉天附近の大會戰に於て露軍の大半を殲し、亞いで日本海の大海戰に於ては敵の第二第三の太平洋艦隊を全滅せしめ、我制海權を確實ならしめたりき。此に於てか米國大統領ルーズヴェルト氏は、既に大局の決定せるを觀破し、この上戰爭を繼續するは徒らに殺戮を行ふものなりとなし、率先して日露兩交戰國の間に入り、媾和の仲介者となり、一日も早く戰爭の害惡より脱せられんことを希望せられたり。我輩は世界の平和、人道の上より米國大統領の提議を喜び且つ感謝するもの也。我が帝國固より平和の爲めに戰ふ、露國にして從來の野望を拋棄し、眞に平和の終局を見んことを希ふの誠意あらば。この平和克復の時に當りて焉ぞ躊躇逡巡するの愚を學ぶ可けんや。左れど奉天會戰の敗衂、波羅的艦隊の全滅は果して能く頑迷彼れが如き露國を根底より屈服せしめたるか、彼れが東洋に出でんとする年來の大野心を放擲せしめたるか。戰爭の永續は決して喜ぶべきの現象にあらず、況んや戎事に從ふ殆んど一年有半、其間民心の漸く倦怠を來すの憂慮なきにあらざる可しと雖、一旦平和破れて既に成敗を戰場に爭ふ以上、飽くまでも其の當初の大目的を貫徹せずして止む可けんや。若し夫れ中途にして戰を止め、其根本的大問題を解決せざらんには、寧ろ始めより戰なきの勝れるに如かざる也、我輩は恐る、我が國民及當局者にして萬一にも姑息手段に出づるが如き、勿論一時の小康を來すならんも、近き將來に於て否な三年或は五年の後に於て、再び恐るべき大禍亂に遭遇せんことを。されば戰爭を永久に終結せしむるにあらずして、一時の休戰を爲すと均しからんとす、是れ畢竟東洋永遠の平和を克復するの策にあらざる也。然りと雖、我政府は既に米國大統領ルーズヴェルト氏の媾和開始に關する勸告に應じ、露國もまた媾和に意志ありとせば、我が帝國は最早兵火の舞臺より轉じて、樽俎接衝の間其外交手腕に依りて、この問題を根本より解決し其の目的を貫徹するの覺悟なかるべからず。此に於て媾和條件問題の生起する所以也。

抑も媾和條件たる最も重大なる問題なり、是れに依りて露國年來の野望を根底より挫折せしむることを得べく、是れに依りて東洋永遠の平和は其の基礎を確立すべく、是れに反してまた百戰百勝の効果を沒了せらるゝも外交の如何にあり、我輩の以て東亞將來の禍福は一に繫りて今回の一擧に存ずとなすもの、決して誇張の言にあらざる也。然らば我が外交の局に當るものは愼重熟慮常に其の大目的に着眼して、戰局と終始せしめざる可からず。故に我輩は媾和條件に關する卑見を聊か開陳せんと欲す。則ち、

第一、露國の沿海州即ち朝鮮の國境より浦鹽斯德克を經てカムチヤツカ一帶の地及び樺太島を割讓せしむること。

第二、滿洲及び韓國に關しては自今露國をして一切容喙せしめざること。

第三、日本は清國の領土を保證して何れの國と雖、割讓するを許さゞること。

第四、東清鐵道は我帝國の占有たらしむること。

第五、償金は少なくとも二三十億圓を取ること。

第六、開戰以來中立港灣に竄入したる露國の艦船は悉皆我國に引渡さしむべきこと。

以上は何れも媾和の主要條件たるものにして、この他俘虜處分の如き細目に至つては多々あるべしと雖、此處には單に其主眼點を擧示したるに過ぎず、而して是れ實に我輩の最小限度とする處のもの也。然るに浦鹽斯德克の割讓に關しては世間應々說をなすものあり、是等の論者は曰く、彼の浦鹽港の如き宜ろしく軍備を撤回せしめて以て貿易港として開放せしむれば足ろ、決して我が帝國の領土たらしめざるも可なりと我輩は絕對に反對するものなり、畢竟するに是等は所謂其の一を知りて未だ他を知らざる者の言のみ。何となればよし浦鹽斯德克をして單に貿易港たるに止め、其軍備を撤回せしむると雖、熟々露國沿海州の地勢を觀察するに、浦鹽以北に於て軍港となるべき良好の港灣に乏しからず、其の今日まで是等の良港灣を措いて顧みざりし處のものは、露國が一意專念支那朝鮮の地に於て不凍港を得んと欲したるが爲めのみ、然るに一朝にして日本の打擊を蒙り、支那海朝鮮海の沿岸に其の根據地を失ひ、浦港にして遂に商港に變ぜんか、必ずや露國は急轉して是等數多の良港灣を選定し、新たに海軍の根據地を築造せんこと、炳として火を睹るよりも明かなるにあらずや。斯の如くんば一浦鹽軍港の商港となりたるが爲めに、第二の浦鹽第三の浦鹽は露國の沿海州に於て續出すべし。是れ豈東洋の平和を永遠に確保するの策ならんや。却て露國に復讎を企圖するの機會を與へて、帝國の前途並に東亞の將來に憂患を貽すものたらずんば幸甚也。故に何處までも交戰の大主旨を貫徹せんとせば、少なくとも我輩の主張する六箇條の主要點を實行するの外あらず。而して是れ必ずしも露國に過重の負擔を爲さしむるものにあらずして、東洋の平和を確實に保證し、世界動亂の禍根を斷ち、兼れて帝國が自衞の必要上より當然起らざる可からざる處の問題也。故に露國にして誠心誠意世界の平和、人道を重んじ、媾和の終局を見んとするものならば、進んで快諾すべき責務あるにあらずや。若し夫れ露國にして我帝國の要求に應ぜず、躊躇逡巡するに於ては、到底東洋の平和を永遠に尊重するものにあらず。却て他日の捲土重來の時機を期待せるものと判せざるを得ず、故に事此處に至れば我帝國は露國が衷心より媾和の誠意なきものと斷定し、飽くまでも彼れを屈服せしめずんば止まざるの一大覺悟なかる可からず。

我輩想ふに、今後戰爭の繼續に連れて憂慮すべきは、單に財政問題なりと雖、開戰以來帝國財政の基礎は甚だ鞏固にして其の實力の意外に豐富なるを示せり、內地に於ける前後五回の國庫債券發行の如き、常に募集額の四倍乃至五倍の應募者あるを見、外債も亦好果を得たり、之を經濟界に察するも綽々として餘裕の存ぜるを見る。況んや波羅的艦隊の全滅は帝國の制海權を確實ならしむると同時に、通商貿易は回復せられて平時と異なるなく、自今益々發展を見るに至らん、此際我が國民にして持久の策を講し、戰爭に從事するの準備を怠るなくんば、假令戰爭の長期に繼續することあるとも、毫も憂慮すべきにあらざる也。



日露交戰錄

奉天附近大會戰

石版三色刷戰局大地圖其他挿入

本書は沙河及黑溝臺の會戰に筆を起して奉天附近大會戰より鐵嶺の占領に及ぶ、敘事の精密世の未だ知らざるを傳へて頗る詳細、順序の整頓唯是れ一大パノラマを展ずると比して以て戰況の一貫を觀る、更に筆致の壯快は鐵馬空を駛り般々たる砲聲閃々たる劍花座間に迫り來るが如く、身其境に臨むが如し、寔に是れ一時的のものに非ずして傳へて子孫に讀ましむべき戰勝國民が最好紀念たらずんばあらず。

菊判　三百餘頁
實價　四十錢
郵税　六錢

福地櫻痴居士著　鰭崎英朋畫

小說 烏丸光廣卿

菊判　美本
實價　四十錢
郵税　六錢

德川幕府の基礎漸く鞏く更に三代家光の豪强を以て天下の勢翕然として之れに趨きあはれ朝家の萎靡衰退昔に返す人もなし、見渡す限りは優柔不斷の公卿殿原、中に烏丸光廣卿あり孤松の冬嶺に挺然たるが如く遂に幕府の嫌忌を招く、櫻痴居士得意の筆を執て當時の光景を描出す、書中花あり玉葩の艶、書中月あり玲瓏の光、眞にこれ夏季綠蔭の好讀物。

發兌元　東京日本橋通四丁目角　春陽堂

帝國文學

第十一卷第七目次

◎新派興行脚本募集◎シルレル百年祭紀念講演ドクトル、カルル、フローレンツ述、片山正雄譯◎神經質の文學片山正雄◎詩人ノワーリスを論ず山岸光宣◎夢、藤井紫影◎龜、野村傳四◎戸叩く人なでしこ◎夢のふるさと、齋川聖影◎所謂淫靡文學とは何ぞ◎叙事詩の新形式◎眞砂座の金色夜叉◎自然詩人を憶ふ◎本郷座の目黒巷談◎獨乙現代の叙情詩人◎六月文壇彙報◎新刊批評種々

定價　壹冊金十五錢郵税金一錢｜六冊前金郵税共金九十錢｜十二冊前金郵税共金壹圓六十五錢

丁酉倫理會 倫理講演集

第卅四輯目次

講演

◎女學生の修養……文學博士　井上哲次郎

◎歐米に於ける男女關係……隈本有尚

◎孔子研究を評す……中島德藏

雜録

◎世の武士道論◎桂花書屋雜抄◎戰爭中に於ける將士の意識情態◎社會教育上より見たる醜文字◎泰西名家談叢◎應問◎批評

定價　壹冊金十貳錢郵税金一錢｜六冊前金郵税共金七十二錢｜十二冊前金郵税共金一圓參十二錢

發行所　東京銀座一丁目　大坂北久太郎町　大日本圖書株式會社

出版界唯一之貢獻的事業

ダルウヰン氏進化論の豫約出版

法學博士 文學博士 男爵加藤弘之先生序

東京帝國大學理科大學教授 理學博士渡瀬庄三郎先生原著者評傳

チャーレス、ダルウヰン先生原著

東京高等師範學校教授 理學博士丘淺治郎先生校訂

◉開成館謹譯

豫約期限 八月中！



種之起原

(THE ORIGIN OF SPECIES)

洋裝全一冊
原著者肖像入
紙數約千百頁

定價金參圓
送料貳拾錢

加藤博士序

（前略）此書の始めて出るに至つては、實に世を驚かしたのであつて、大學者中に強い反對も起つたが、又大に賛同した學者も少くなかつた。併し反對説は年一年と減じ、賛同説は年一年と增すことゝなり。遂に此書は學界に一新紀元を開くべき未曾有の書と稱せらるゝに至り、忽ち、あらゆる文明國の國語に飜譯さるゝことゝなつた。のみならず生存競爭自然淘汰の主義は特に生物學上に用ひらるゝのみならず、漸次諸學科は勿論哲學上にさへも採用さるゝことゝなり、今日に至つては、あらゆる學科が決して生存競爭自然淘汰の理を等閑視することの出來ぬやうになつた、換言すれば此理に依らざれば何事も解釋の出來ぬと云ふ次第になつたのである。博士の功勳は實に大なるものと云はねばならぬ。（下略）

本書豫約方法

申込期限	三十八年八月卅一日限
豫約價	貳圓拾錢及送料貳拾錢
代金拂込	前金一時拂（官署學校は前金不要）
現品送發	三十八年九月中

發行所兼豫約申込所

東京開成館

東京市小石川區小日向水道町七十三番地

詞藻

(禁轉載)

窓掛

柳川春葉

某會社の執務時間は過ぎて、多くの社員は籠から放された小鳥のやうに、我勝にと家路をさして歸つて行く。

今しも小使が跡片附を爲て、椅子や卓子を動す音を聞きながら、峯村といふ今宵の殘番と、其同役の川口某が、風通しの好い窓の下に椅子を並べ、うら淋しげに雜談を爲てゐるのであつた。

此二三日は暑氣が特に酷しく、一降と願ふ夕立もかゝらぬので、大路の砂埃は煙のやうに舞あがり、絶へず往來してゐる水撒車もなか〳〵効能が見えぬのである。窓に近い柳は枝も隱れるばかり繁つて、夕風に重い頭を掉つてゐる。

峯村は西の空に怪しい雲のムク〳〵と立つのを望んでゐたが、施て振向いて、

「何うだい、今日も實に熱かつたなあ、毎日斯うてはやり切れん。」

「然うさ、戸外を見るのも苦しい位だ、今年は又殊に烈しいやうだね、夕方に成つたら少しは涼しさうなものだが。」

二人とも三十位な年格好て、川口は柔さうな頭の毛を整然と分けた、髭の無い、色艶の好からぬ男である。

「駄目だ。」と峯村は首を掉つて「彼の雲が出て來たから、夕立でも來れば好いと思つて先刻から見てゐるが、迚も望は無いよ。夜に成つて蒸々爲るのは實に不愉快だ。斯ういふ時には行水でも浴び、冷した麥酒でも飮んだら少しは可からうが、斯うして汗染みた洋服を着て、電車の音を聞き、砂の交つた空氣を吸つてゐるのは情無いね。」

「然し、又此廣々した室に居るのは何程か涼しいやうな氣が爲る。」

と川口は天井を見あげて、

「家に居るのと氣持が違ふ。」

「大きに然うだ。僕なぞは御承知の下宿住居だから、歸つた處で二階の隅の六疊へ閉籠り、トタン葺の屋根の餘熱を受けた薄暗い處に巣を造らにや成らん、夫を思へば廣いだけが結局利益かな。けれど君のやうな人は家へ歸れば細君も子供も待つて居る、月下に虫を聞なから行水をつかふなぞは實に羨むべき身の上だ。寒い時分も可いが、家庭の夏も亦極めて樂しさうなものだよ。」

「然うかな。」川口は一向氣の乘らぬ返事。

「時に君は今日は大分悠々爲てゐるではないか、何か用でも有るのかい。」
「別に用も無い。」
「ぢやあ早く歸り給へ、最う戸外も日が沒つたから歩くに樂だらう。」
「僕が居つては邪魔か。」
「妙な事を云ふな。」峯村は目を丸く爲て「邪魔どころか、此方は談對手が有つて、何んなに好いか知れないのだが……然し君は滿らんでは無いか、家で待つてゐるだらうに。」
「何有！家へ歸つても面白くは無い。」
「ぢやあ喧嘩でも爲て、それで歸るのが面白く無いんだね。那樣都合で心配させてやらうと言ふのか……夫も稀には可からう。君のやうに仲が好過ても、波瀾が無くつて興が少いから。」
「仲が好い？」川口は吃驚したやうな顔を爲て「君達には全く然う見えるのか、那樣事は夢にだつて有りはしないよ。」
「馬鹿を言へ、仲の好く無い筈が無い。だが今も言ふ通り喧嘩も稀には可からうさ。」
峯村は上靴の爪尖で壁を突付きながら、椅子の凭木に身を反らし、巻煙草の煙を緩く吹いてゐる。
川口も少時無言て、窓掛の風に飜るのを茫然として見詰めてゐたが、施て重々しく口を開いて、
「だか君人間といふ者は誠に下らんものだなあ。」
「何だ突飛な事を云出して、君は今日は餘程變だぞ。」

「今日ばかりては無い、四五年以來何時でも變なのだ、僕も初めのうちは斯んな考の浮ぶ度に又妙に氣が狂つたのかとも思つたが、今では心も丁と靜に成つて、眞面目に考へるやうに成つた。實に人間の事は愚だよ。家庭等といふものは不快の製造場だ、耐らん位可厭な處だ。」

「僕は獨身だから能くは知らんが、家庭は人の休息所で、凡ての樂を產む處だと信じてゐる。特に君の家なぞは團滿で、我々仲間の手本だと誰でも云ふぢやないか。君が那樣な事を云ひ出したのは何が一時の感情なのだらう、きつと或事に激してゐるからだ。」

「激する勇氣が有るものか。僕は死物だ、唯斯うして働く機械だ、家庭には斯んな機械が必要なんだらう。」

「えゝ？」峰村は益怪訝な面色で「然し君は其主人ではないか。」

「即ち主人と名の附く機械さ、君は主人の爲に家庭なるものが拵てあると思ふと大きな感違だよ。家庭に於いて一番權力の有るものは、世間には一番無勢力な奴なのだ。」

と冷に笑つて、

「君も今夜は怠屈だらうから、少しばかり僕の身の上を語らうかね。」

「うむ、願はくは然う爲て欲しいものだ。」

「然し面白いと思ふと違ふよ、今も云つたやうに家庭の不愉快話だ。一體君達は僕の家を非常に買被つてゐるから、或は信じないかも知れんが、まあ何でも聞いて見るさ。

敢て僕の家には限らん、誰でも多少買被られてゐるのだらう。抑も此家庭などといふものは人生に於ける最も邪魔物て、是さへ無くば人間はもつと高尚な高潔なものに成れるが、不幸にして妻を持ち、子を産むからして、實に憫むべき生涯を送らねば成らないやうに立至るのだ。個人は滅び、天と離れ、徒に金を戀しがつて、食はんが爲に無意味な一生と化して了ふ。恐らく誰でも然うだらう。」

彼は漸く活氣を帶びて、常の沈鬱な樣に引變へ、昂然として手を振り首を動かした。

「我々は情慾を制する事が出來得れば、決して家庭なんぞを造る必要が無い。慰藉だの休息だのと、馬鹿な、全然筋違な註文だ。我々も實は其立派な看板に欺かれたので、何有内へ入つて見ると、緣日の見世物よりも酷い相違を認めるよ。」

「何うしたのだ。」峰村は呆れ返つて「那樣暴亂な事を云ふな、君は偶然一つの面白く無い事を見出したが爲に、他の九つを何處かへ棄てゝ了つたのだらう。餘り暴言だ、人に話したら笑はれるよ。」

「恐らく妻を持ち、子を持つ人は内心大に頷く處が有るだらうと思ふ。眞理だ、僕は決して一時の感情て云ふのでは無い。」

「全體然うまで憎む君の家庭は何ういふものだ、夫を語つて呉れたまへ。」

「僕の家か？、話すのも心持が惡い。而して何程話したつて君は事實とは思ふまい。是だけ聞いて大概想像して見給へ。」

「僕には全然思ひも及ばん。」峰村は躍然と成つて叫んだ。

「老人は孫を玩弄物にして、精々悪い智慧を吹込むもの。妻は夫に苦痛を與へて、心にも無い勞働を爲せるもの。子供は事實上主權者だ。是等の人間が唯金を欲しがつて、起るから寢るまでギヤア〳〵云つてゐるのだ。而して怠屈すると各個に理由も無い事で喧嘩を爲たり、可厭な顏を爲合つたり、時を費す爲に斯んな事も爲て見る。年が年中心から樂しむなどといふ事は嘘にも有りはしない。之に加ふるに金を得る機械と成つて、煑返るやうな不平と、向上心の無い勉强を爲てゐる亭主有り。是が僕の家庭で、又凡ての世の中の家庭なのだ。」

彼は說來つて未だ何か言足らぬものゝ如く、口の内で沸々と言つてゐる。

「川口、然う君のやうに貶して了つたら、夫こそ何でも醜ならざるものは無い。が然し一體君は家庭に向つて何を要求するのだ。何いふ家庭なら滿足するのか。」

「別に無理な注文は無い。……慰藉を得て心安く暮せればそれで十分なのだ。」

「では唯それを求めれば與へられるぢやないか。君のやうに頭から悲觀して、敵の如く思ふから、家庭でも君に其樂を與ふる事が出來んのだらう。」

川口は幾度か頷いて、

「成程、僕も其を思はん事は無い。だから今迄隨分自分を制して、出來得る限りは我慢を爲て見たが、猶且無駄な事さ。此方が小く成れは成る程、主人の權利は減じて他の者は增長する、其苦痛が殖へて來るばかりだ。海鼠を皿に入れたやうに、家庭に於ける不愉快は、何程形を變へても唯廣がつて行くばか

り。」

と悲しさうに言つて衝と席を立ち、窓掛から首を出して、暮行く空を見上げるのであつた。峯村は氣の毒さうに、而して半信半疑の體で其後姿を見詰めてゐたが、

「實際君の言ふ通りなら眞に情無いものだ。然し又何うかして好い事も有るだらう、然う滿らなくばかり考へずに、大いに陽氣にやるが可い。」

「僕が斯んな事を云ふのは嘸可笑しからうな。」

と川口は振返つて、

「僕自身も實に然う思ふ。是程可厭な家庭なら何故打壞して了はないかと。然し何うしても其決行は出來ん。首へ繩が付いてゐると同樣、足搔きながら引摺られて歩いてゐるのだ。哀れなものぢやないか。斯うして惡口を云ひながら、猶且家へ歸る事を忘れては居らんよ。」

と彼方此方室の中を歩き廻つたが、急に立止つて、

「あゝ歸りたく成つた、歸つて又可厭な思を爲るのが、何だか待たれるやうに成つて了つた。何うだ君、人間も斯う成つては意氣地の無いものさね。」

峯村は椅子に腰を下したまゝ、

「おい歸るのか、餘り急ではないか。猶且其歸りたく成る處が樂なのだらう、口では惡く云つても……夫だから未可いのだ、何うしたつて家庭は樂しいよ。」

川口は淋しさうに顧て、
「僕の今の心の中が解るか、……君も何れ家庭の人に成つたら思當るだらう。然樣なら。」
彼はフラ〳〵と室を出て行つた。
「然樣なら！」
峯村は猶且立上りも爲ずに聲も懸けたが、軈て階子段を靜に降行く靴の音を聞くと、俄に身の周圍が淋しく感じて、耐らない程不快を覺え、我にもあらず椅子を立つたのである。
コツ〳〵と段を踏む音に引かれ、彼も入口の方へ歩み來て、今閉てたばかりの扉を開け、階段の上から見降すと、最う川口の姿は無くて、階下の白い窓掛が風のまに〳〵飜へるのが、何と無く胸を刺すやうに思はれた。



落日惆悵歌

吉野臥城

辛夷、花木瓜、日はあかう
暮れなむとして笑む光、
躑躅、山吹、影薄う
石をすべりて咽ぶ水、
ゆく春の譜に淋しさの
こだまを返す名なし鳥、
遥幽かに草の家の

うしろに通ふ樅木立、
影も共に棲むわが眼に、
時と移りゆく景色かな。

秋保に二里の山を越え、
温泉の宿の人となり、
戰傷癒ゆれば歸り來て、
自然の愛子の山の村
田畑を打つ賤となり、
さながら、昔軍陣の
譽を棄てしおちうどが
奥山住の老忘れ、
安く世を經し歌のごと、
市の古夢また追はず。

少女ごころの美しき
胸に秘めたる戀の香は、
天つ空をも蔽ふべけれ、
花を散らして、劫風の
邦の邊疆陲涯威を布きて、
野の青草を靡けむの、

矜り空しく塵と化り、
笛に追はれし小羊は、
遠山川に消え入りて、
地の高さも增し得じな。

かくて怒れる劫風の
氷を、雪を吹き吹きて、
ひがしの原に運ぶとも、
萌え出づる芽を遮りて
春の彩筆奪ひ得じ。
時しも來らば、庭の野の
花は花とし咲かむもの、
草は草とし生ひむもの、
強きを誇る人ぢから、
そこに何等のかひありや。

迷へるものよ、汝が禱る
神の心によみがへり、
憐憫の眼をあげて見よ。
折れし劍に花咲きて
世の春まさに盡きむとし、

乾きし血に草生ひて
みどりの夏に入らむとす。
黒う暮れゆく夕づく日、
ながめて愁ひ賦せむより、
たゞよふ船の末思へ。

戀失ひしわかうどが、
枯木まばらの小笹谷、
空しき影を夢みては
木精を呼びて驚れたる、
聲に情のこもれども、
そびらに潜む黒き魔の
息に熟酔ふ毒夢に、
砲を天部に擬するとも、
弾は汝に砕けなむ
滅亡の響何の趣ぞ。

剣をさめて、平和の
その一絃を奏でなば、
亂るゝ草も姿かへて
天の光を仰ぐべく、

東ゆ受けし屈辱も、
人の道知るあさぼらけ
眸はとはに輝かむ。
深宮、燭のまたたきに、
白き手執りて泣かむより、
神のみ旨をおもひ見よ。

軍の敗をいきどほり、
幾萬の無辜犠牲として
名もなき戰つゞくとも、
恨に高き髑髏塔、
乾血黒ずむ「罪」の字を
太う描くに過ぎざらむ。
あゝ自己を高うして
「正義」を呪ふ夜の幕に、
「破壊」の影の仄揺ぎ、
幕をたぐらむ手を見ずや。

野に潜みたる先達の
「時運」を呼ぶなる喚聲に、
めしひの民の草戸出や、

「光明」を慕ふ讃歌に
和して、どよもす革命の
聲よ、喩へば、石見の海
荒潮捲きてかへるごと、
古き都に、冬宮に
寄せて、溢れて、逆捲きて、
遠野迢かにくづれ行く。

思へ、櫻のうましくに
大を誇らぬ大和びと、
いかで戰を好まむや。
唯汝が揮ふ毒の刃を
平和のために折らむとて、
世界にさきだちて起てるもの、
たとへば、神と惡魔との
領を爭ふたたかひや、
天の瓊矛のひらめかば、
雲も嵐も靡かでや。

文明、ひかり晃かに
照り耀くに、紅花を

知らぬ野蠻の洞穴の闇、
闇に生涯終ふる子の如く、
かれの貴族と官僚と
田鼠に似たるわざを成し、
邦土荒して顧みぬ。
ああ白鵠の飛ぶ心、
自由の翅を咒ひたる
專政、などか振ふべき。

われ幸にくにたのみの
愛の力の強ければ、
もえて名ぐはし花と咲き、
凝りて劍とまかがやく。
天職を自覺りて勇み立ち、
精力のかぎり働きて、
生命消ゆとも悔いなくに。
見よ、おほみこと下らへば、
鋤なげうちて村を出る
若ますらをの勢鋭や。

村の古妻、ゆく春の

田畑に出でて莠拔き、
老嫗は家の日向椽、
紡車を繰り暮し、
わが爲政家の弱腰に
力を添ふる勤勞の
叫ぶを聞けば、とこしへの
平和を得むためなれば、
數年の後にわざはひを
殘す平和は望まずと。

ああ何の日か、「文明」と
「自由」と「正義」呪ふ子が、
手に侵略の鉾捨てて、
かの「平和」の美し名を
現世に成さしめむ眞心の、
涌躍の胸をおし披き、
「光明」讃ふる時の來む。——
辛夷、花木瓜、色暮れて、
ゆふべ寂しき水の音に、
行く春、思多きかな。

（明治三十八年五月稿）

歌

尾上柴舟選

村田愛美

この身五尺小さきにゑまむ才ならず天の驕兒と神泣かしめむ

起たばみな地上のほこりわれにあり一指天さし力にゑまむ

橄欖に朝の氣高きヘレナ島あけのみ星の夢とゆらめく

力こめて山の大鐘わが撞けば世は常闇の夢より醒めぬ

森かげに白光ゆるゝ朝あけをやさし小鹿の夢まださめぬ

杣人が小斧枕の春の山ゆめはかすみにたゞ薫るらむ

曙は祝福にやはらぐ靈光と神が賜びにし榮にはあらぬ

歌も誦せてゆふべつめたき扉によればわりなや人のたゞ泣かるゝよ

○

長谷白眠

朝雨やかきつばたさく池殿に片袖ぬらす夏の人

かな

鳩を呼ぶ葉月の姫の御冠やみどり薫ずる瑠璃の白露

花苑に小さき女王が花まつり朝の日榮えぬ靈華(れうげ)の房に

鐘の音の花にまぎれし春の宵かり寝の君の夢(ゆめ)美しき

○　橋本靜江

竹椽や月となりてはあまき香の薔薇しだれて撲つ人の夢

短夜を松葉焚きつゝ椽さきに與作と語る高わらひかな

丸山は海見るところ草に寝て風にふかれて白帆かぞへむ

金佛(かなぼとけ)に小坊主すゑて鉦きけば山の雨ふりなくほとゝぎす

○　村田敏子

賜びませし讃歌はわれに偉(おほい)なりたゞ小さき子(こ)とあはれみ給へ

君によりてせめて桂(かつら)の詩(し)の門のとはの美(よ)き香(か)に醉はむの願ひ（柴舟先生に）

このおもひさてあかされず秘められずいかなる歌と君にまゐらせむ

またしても天(あめ)の平和(やはらぎ)したはれて女神(かみ)の御像(すがた)を夢かに仰ぐ

わかき春たかき光(ひかり)を戀ひつゝもわれとこ闇(やみ)に迷(まよ)ひゆくかな

ソロモンの榮も快樂(けらく)も一本(ひともと)の野邊(のべ)の小百合に如(し)かずといはずや

○　秋田華溪

あかつきの靈にひかれて紫の潮(しほ)の花ちる海あこがるゝ

わが戀は露をすべりておのづからかさなり落つる椿に似たり

夕闇やしめりがちなる曲もれて楠の葉かげに星ながれよる

何となう思ひ亂るゝさゝやきよ宵月くらき野のさゝれ水

黑髮に小百合かざして春の宵すぼめし傘(かさ)にかくれてきませ

山越えて二里を青葉の君が里機織る響かろらかにして

○　　小谷寒鴉

聲高う自ら呼ぶに夢破れてほと息つくに夜はあけそめぬ

なつかしき流の岸にいく十とせ朽木の柳なほ折れやらぬ（故郷にかへりて）

○　　鷲尾美雲

花瓶に百合さし居ればひぐらしの聲こぼれくる山の温泉の宿

○　　岡田道一

松虫が母の秋姫いでたゝす御裳に咲くかつり鐘ぐさの

○　　安藤安

繁り合ふ若葉に暗き藪影や風なきにちる山栗のはな

○　　鈴木静

二十一歳はいかりの時か向日葵のまひるひかげにほてらふがごと

○　　上村静草

長き日を柳ねむれる柴の戸に燕呼ぶ子の小扇ならす

氷水

漱石選

氷水床几に高荷下しけり　初聲
氷水あたり時めく灯かな　同
盆上に月や砕けて氷水　同
氷水襟くつろげて胸毛かな　同
氷水夜涼覺へて戻りけり　同
服脱いで和服に着換へ氷水　小舍人
匙もつや指さき寒き氷水　可翠
氷賣る女美し村祭　美雲
起きてすゝる病の人や氷水　葩人
峠茶屋に午睡さめたり氷水　枕石
氷水ありと旗たて麓茶屋　四綠
氷屋の提灯池にゆらぎけり　翠謙
水たるゝ葱吊して氷茶屋　圓外
氷屋に麥酒の酔を吹かれけり　英子
養父入や淺草入てて氷水　浦亭

氷水冷たき腹をなでて見る　黄村
玉簾椽に池見て氷水　五習
澤潟をガラスの壜や氷店　蘆風
あゆみ來て馬車の立場や氷水　鳴子
氷水碁盤に落ちる雫かな　石羊子
歸着して村の祭や氷水　同
晝閑に氷水屋の美人かな　五遷
銀匙の舌に冷たし氷水　同
二階から氷水呼ぶ溫泉の泊　同
愛想なき女なりけり氷水　白紅
見覺の店變りけり氷水　同
賑かや通り背むけて氷水　同
氷屋の壺提灯や水を打つ　青龍
氷屋の易者と並ぶ柳かな　同
竹植ゑて提灯靑し氷店　同
錢湯の剩あまし得て氷水　脫子
うろ船の高提灯や氷水　同
削氷の山や崩しぬ銀の匙　同

氷水幕間長き芝居かな　者吟
前曳を俟ふ轎や氷水
氷水俗腸頓に冷却す

九月分課題　野分　八月十八日限
十月分課題　蓼の花　九月十八日限

▲募集

俳句　東京市本郷駒込曙町十一番地大谷正信宛の事
和歌　東京市小石川區原町一三三番地尾上柴舟宛の事

朝、天遊君きたりて頻りに戀をかたりて歸る。『野狐、忠實（まこと）を說かんとき、君は手飼の鳩を隱さば足りぬ。』と西の邦の諺にいへり。この君が戀の言葉の多さよ。すゞろに吾をして鳩はと後（しり）へを顧みさしめぬ。幸にして隱すべき愛孃（まなむすめ）は持たぬ身なりけり。（白玉姫より）



評論

雜誌評判記（一）

△血來山人
○楞陰迂人

重なる雜誌を取つて一々之に評を加へんといふ野心を起したものは同行二人、各々其思つたまゝ感じたまゝを遠慮なく云つて見やうといふのが此記の目的で、彼の讀者を嬉しがらせん爲にする内幕話や、或る事情の爲に褒貶する當今流行の批評なるものとは、全然其趣を異にして居る、故に酷に過ぐると思つて敢て思はぬお世辭をいつたり、可いと思つても惡く云ひたがる商賈氣を出す事は同行相戒めて決して爲せぬ、若し評の當る當らぬの叱責を受ける事はあつても、依估贔屓の沙汰ありといふ不足はいづれからも受けないと斷言して置く、只妄批酷評の罪の至大なる事は、前以つて各雜誌に謝せねばならぬ。

▲帝國文學

△帝國文學といふ名の立派に聞えて、而も其内容の甚だ帝國文學の名の如く、堂々たるものでないのは如何にも殘念な事である、いはゞ文科大學の校友會雜誌で、若し之が外の學校から出たものとすれば、世間は決して之れに向つて一顧をもくれまい、只その名の立派に聞えるのと、發刊以來十一年の星霜を經たお蔭によつて漸く人に知られて居るに止まる。

何故にしかく罵倒するかといふに、第一毎號一として文藝の作物として價値のあるものゝない事、及び文藝評論として聞くに足るべき者ゝない事、第二殆んど凡ての文字が翻譯で西洋臭く、從つて片假名の文字と横文字とが煩ろ^うさいまでに並べられて居るか、さもなくば古文めいた大和言葉の讀みにくい、如何にも我は國文科の出身であるといふお郷里を露したのが麗々と文藝の作物顏して出張して居るか、兎に角獨創の見地に乏しい事、創作の技能のない事等が此雜誌最大の欠陷である、第三には編輯の体裁の拙い事、これは編輯者の交替の頻繁なのと、其編輯者が多くは經驗に乏しいからである、第四文學雜誌中稀に見る惡文を書く人の多い事、第五筆者が悉く文學士か文科生で、他の大學に關係のない名家のものを容るゝの雅量のない事、と書いて行くと全く長所は見附からぬ、而も尙文學雜誌として斯界に重鎭たる地位を有するのを見れば、何か特長がなくてはならぬが、それを知つて居るものはない、自分は今尙疑問として居る。

○雜誌に（承前）と（未完）とが多くなれば讀者の數が極つて了ふといふのがお僕の意見ぢや。法律とか歷史とかいふ專門の學術雜誌は別として、文學雜誌の中で（承前）（未完）の多いこと恐らく此帝國文學の右に出づるも

のがなからう。近來非常に賣れなくなつたといふ主因も確かに此(承前)(未完)の文字にあると思ふ。又僕の最も此雜誌に慊らぬのは卒業生即ち文學士の作物が大部分を占めて在學生の文章が僅かに片隅の方に埋まつて居ることである。どうして今の大學生はこんなに無氣力であるか。或は無氣力ではない、研究心が深くなつて漫りに文筆を弄せざるに至つたのだと辯護する人があるかも知れぬ。けれども僕は斷然無氣力になつたと攻擊する。何故といひ玉へ。芝居の批評をする人はある、小說の批評をする人もある、けれども將來文壇に立つて花々しく自己の主張抱負を天下に行はんなどといふ人は一向に見えんぢやないか。皆々打揃うて倫理の敎師や、英語の敎師や、高等學校の敎授や、大學のプロフエッサーを志願せなくつてもいゝぢやないか。樗牛、桂月、醒雪、晩翠などの揃うた廿八九年頃の帝文は日本の文壇の先驅をなしたものだ、今の帝文は實に文壇の殿將である。退軍の時なら殿將も難儀であるが、進みゆく文壇の殿將は餘り名譽でもあるまい。備はれるを君子に求む、僕の敢て赤門の角帽諸氏に酷なる所以である。

▲太陽

○太陽は大砲の如し。尨大にして內容も乏しくはないが、どうも僕の好かん雜誌ぢや、高山博士の筆を絕て以來僕は一册も買たことがない、從て精讀したことがない、ぢやによつて批評の資格もない。然し何というても大雜誌、社會各方面の大家を網羅してあらゆる問題を記述してあるから廣く一般のことを知るには極めて便利である、といふ賞讃の辭を奉つて先きの憎まれ口の埋め合せをする。

△折角高い金を拂つて買つて置きながら、雜誌が着いたとき、チヨツト口繪を擴げて見て、それからパラ〳〵と繰つた限り、殆んど一行も讀まぬ讀者があるとすれば、それは確かに太陽の購讀者であらう。

▲人性

○人性の研究は最も必要なことであつて且つ最も興味のあることである。僕はこの雜誌の發刊を双手を擧げて歡迎するものである。只僕が此雜誌にとつて大に遺憾に思ふことがある。即ち人の好奇心を促がすが如き題目をズラリと並べて、其所說は極めて簡畧、往々不得要領の弊に陷ることである。題目の好奇心を促がすことは其所說を弘く讀ましめんとするにも、又殊に多く沽らん爲の商略上よりも極めて必要のことであらうと思ふから、さまでに尤めぬが、所說が簡畧又は不得要領に流るゝのは斷然改めて欲しい。西洋の大家の飜譯も宜しい、が僅かに一二頁で以て非常の大問題を抄譯的に紹介されたのでは甚だ面白くない、どうか今少し眞面目な、商賣氣を離れたやり方で眞の人性の研究を發表して貰ひたい、否らざれば到底表紙にある宣告のやうなことは出來まいと思ふ。

△樗陰君はさういふけれど。かゝる專門的のものを一般の人に讀ませて、之に趣味を有たせやうとするには、勢ひかく面白く題目を擇び、文章を短くせればならぬ、從つて要領を得ない缺點を生ずるのも勢ひ止むを得ない、若し要領を得たる長論文を專門の術語を以つて書かれたら、此雜誌の本領を沒却せればならぬ、自分は少くとも之に依つて自然科學上の趣味と、おぼろげなる知識を得る人が多いだらうと想像する、只氣に喰はぬのは全文片假名である事、これ一ツ。

▲時代思潮

△政治家と文學者兼宗敎家との兩主筆を戴き、時代の新思潮を鼓吹するといふ意氣込は素晴らしいが、其說くところ往々偏狹に傾き易いので

人々から嫌忌される事がある。偏狹なのは一面から云へば主筆其人の意見てあるからそれて可いとして、其欠點を埋め合せするべき他家の說を掲載するに吝なのは遺憾てある。又名もない人が生若い氣障な評論をして居るのが、どうかすると此雜誌の威嚴を損する。特に姉崎博士の文學評論は、寧ろ輕蔑の意味を以つて人々から讀まれて居る、彼の近時文壇の好佳作といふのが出て以來、博士は文學を論ずる資格が無いものとなつて了つた。横井主筆の主張に至つては可もなく不可もないかして、誰も何とも云ふものがない。と恁うはいふもの丶、實は此種の雜誌中ても最も重きを置かれる方て、其主張の議論の可否は兎も角、常に惡く云はれるべき問題を供給して居る男氣には感服せざるを得ぬ、それも姉崎博士が在るからてあらう。而も見かけの堂々たると、時代思潮といふ名のよき爲め、雜誌屋の店頭ても一寸手に取つて見るものが多い。

○少し堅苦しい雜誌ぢや。今の青年を教導し、感化して物質以外、黄金以外、精神的人格的修養をなさしめんとするのが目的らしいが、かく堅苦しくつては恐らく多數の青年から敬遠主義を取られはしまいかと氣遣はれる。凡そ雜誌には二種類あると思ふ。一は色々な方面から弘く材料を集めて、諸名家の作を世間に紹介して、其間に自家の主義を間接に發表するものてある、太陽とか、中央公論とか、其外の大抵の雜誌は此部に屬して居る。他の一は主筆が自己の筆て、自己の主張抱負を直接に發表せんことを目的とするものてある。遠くは內村鑑三氏の獨立雜誌とか、德富蘇峯氏の國民之友とか、竹越與三郎氏の世界の日本とか。は此の傾向をあらはしたもので、近くは山路愛山氏の獨立評論など此種類の完全なる代表者てある。此時代思潮も恐らく此第二種類の目的を以て起つたものらしい。けれども此第二種類の目的を遂するには主筆は一代の名望を負ひ、力亦之に協ふた人てなければ遂に失敗に歸せざるを得ないのぢや。主筆の一人たる姉崎博士は甚だ眞摯篤學の人てあることは僕の信じて疑ぬは所てある、又偏へに物質的形而下的文明に眩惑して居る今の世に、盛んに精神的形而上的研究を唱導せらるゝ態度も僕の珍として重ずる所てある、けれども筆の力て一代の青年を風靡し、一世の人心を刷新せんとすることは、惜しいかな、姉崎博士は其人にあらずてある。主筆の他の一人横井博士も亦頗る人格の高い人て、嚴肅の人てあることは僕の夙に聞き及んて居る所てある、けれども横井博士も亦文筆を以て其目的を遂するには未だしといはざるを得ぬ。これが即ち此雜誌の國民の友や、獨立雜誌や、世界の日本と同目的に起つたものと思はるゝに拘らず、此三雜誌程に雜誌の特色が發揮せられず、從て主筆の名も嘖々として傳唱せられざる所以てある。又主筆以外の作物にも充分立派な材料が少くはないが、たゞ立派一方て、趣味乏しく、面白味少きは一大缺點てあらうと思ふ。これは賣る方からは勿論、讀を擴める上から餘程の損てあるに違ひない。けれども我雜誌は售らんが爲めにあらず、擴びんがためにあらず、教へんが爲めなり、導かんが爲めなり、吾輩自ら鳴かざるも志あるもの必ず從はん也といはるゝならば、僕亦何をかいはんやてある。

▲精神界

△自分は此の雜誌を稱して常に日本唯一の宗教雜誌てあると云つて居るそして其社說は毎に多大の興味を以つて讀んて居る、實に名文だ、恐らく他雜誌の社說に於てこれだけの名文は見當るまい、思へらく此雜誌こそ彼の獨立評論の如く、主筆一人て書いたら可からうと、即ち他の論說や講話や感興のやうなものは却つて無い方が可い。併し慾をいへば社說は名文は名文てあるが少し堅過ぎて文字の遣方が誇張に過ぎるから、

今一歩砕けて言文一致にして貰ひたいのである。

○血來君が社説を非常に褒められたのは頗る僕の意を得て居る僕は此社説を以て詩歌的宗教、宗教的詩歌の上乘となすものである。釋迦でも基督でも皆宗教家にして全時に詩人であつた、否な宗教といへば必ず其中に温かなる情―詩歌的要素を含んで居るべき筈のものである。單に屁理屈を担つて宗教となすものは僕其眞意を解するに苦しむ、僕は此社説に於て眞の宗教家的態度を見る。必ずしも其小なるを尤むる要なし。

▲天皷

△天皷といふ雜誌が田岡嶺雲主幹の下に生れると聞いたときは、定めし其名から見ても批評專門の雜誌で、現代の重なる文學的作物に向つて精細深刻な批評をするのであらう、と待ち焦れて居た、出て見るとさうでない、小説の批評などは一向ない、あつても斷片的で大づかみて、他の文學雜誌と比較して何等の長所もない、只嶺雲の雄健な霹靂鞭が讀物である許り、自分は少からず失望した、失望したけれどもいづれ早晩は專門の批評雜誌に變化して行くものと信じて今日まで一縷の望をつないで居た、それも駄目であつた。此まゝで行くのなら、何の爲めに出た雜誌であるかゞ解らぬ、此の位のものなら新聲でも文庫でも供給して呉れる、唯一の霹靂鞭、それさへ此雜誌がなければ嶺雲は必ず之を他で發表するであらう、豈天皷が出たから嶺雲が書いたものが見られるといふ譯ならんや、自分は何か約束でも違へられたやうな氣がして仕方がない、あゝ專門の文學評論作物批評の雜誌は出ぬものかなあ。(最近號に男と女といふ一文の斷片ものがあつたが、あれは中々穿つた面白いものであつた)

○主筆嶺雲氏の霹靂鞭チト古臭いれといふ人もあるが其意氣の壯なるは大によし、久しく鳴かず、蜚ばずといへば、鳴けば、蜚べば必ず人を驚かすものと早合點する人もあるが、文學界では久しく鳴かず蜚ばずに居れば聲も嗄れ、翼も萎れて了ふのが例であるのに、嶺雲氏は其例に洩れて、昔日の意氣を失はざるのは大に多とすべしてある。又嶺雲氏は其時々の問題を提へて論議するに速かのは頗る雜誌記者としての資格を備へて居るといふて宜しい。又六號活字の短評ものは何れも面白くて大に才氣と商機あるを示して居る。岡泉といふ人の藝評は肯綮に中るものが多くあつて、二六の鬼太郎と共に僕の感服して居る藝評家である。たゞ時々古臭い漢學者の顔を出すのと、小杉未醒の長詩の屢ゝ載せられるのは此雜誌の爲めに惜むべしとする所である。

▲獨立評論

○僕の好きな雜誌ぢや、愛山氏が獨力で發行する雜誌で、穩健なる主張を眞摯なる態度で忌憚なく發表して居るのは天下の一大快心の事である。惟ふに愛山氏は蘇峯、三叉兩氏程の才筆はなく、又内村氏程の鬼筆はない、が何所かにドッシリと重味のある所は此人の長所である、恐らく福澤翁に私淑して居る所があるぢやないかと思はるゝ、成るべく平易な字句を用ひて、成るべく通俗の文躰を以て、成るべく周密な議論を行らんとするの態度が漸々福澤翁に似て來たやうに思ふ、假令文に福澤翁程の天才的面影がなく、又少しく文に活氣が乏しいやうな憾みがあるにしても、兎に角、現時我國の珍とすべき雜誌である。東京市政論や、三井王國と岩崎王國や、社會主義の評論や、樺太論や皆愛山氏の胸臆を披攊した所謂眞正の獨立評論である。僕は我讀書界に向て此雜誌を推奨するものである。

△自分のいはんとする所は櫻陰君の言に盡きて居る、全くの所、多く

の下らない人の議論を聞くより、この心血をそゝいて書いた一人の文章の方が味がある、ことに表紙や紙質や畫や何やかやて誤魔化さうとする現代の趨向に反して、紙屑のやうな体裁で滿足して居る清廉な風采は山路愛山其人の人格を表して頗る我意を得たものである。(未完)

紛々録

公論子

▲孰れが豪きか

政府當局者某、頃日吾人に語つて曰く、『政客だの新聞記者だのといふ者程頭の散漫極まるものはない、彼等は吾輩の爲す所を是非し、或問題の起る毎に色んな提言をするけれども、其いふ所凡て専門的でない、局外的である、中々立派な議論だと思つて居ても、何處かにヌケて居る所がある、曾て婆艦隊東航の當時、之を邀撃すべき方策を献じたものが凡そ數へ切れぬ程あつて、中には兵法の奥義を極めたものでなければ、是程の事は考へられまいと思はるゝまで立派な立案もあつたが、惜しい哉非専門的で、之を實地に行ふ能はさる欠點があつた、或は水の淺深を知らず支那海と品川沖とを同一視して計を立つる如き、比々皆然りであつた、當局者は一も之に依つて利益を得た事はない、只滑稽笑語の材料となつた計りであつた、それの如く今の媾和問題に就いても、政府當局者は、政客や博士や新聞記者の考案よりは、今一層正確な材料で、今一層精細に調査し、今一層動かす事の出來ぬ條件を作つて居る、由來野にある人は政府で行つた事業の結果を批評するに止まり、之が先驅として少くとも政府をして再考せしむるといふ事は出來ぬ』と、これ餘りに政客博士新聞記者を侮蔑したものであるが、而もかゝる傾きのないとも云へぬ。

▲勘定合つて錢足らず

萬國博覧會を東京に開くべしといふ議論が往々あるが、吾人は何故に世人はかゝる頓狂な言を吐くかを知るに苦む者である、米國陸軍卿タフト氏一行六十人でさへ、之を迎ふべき客舎がないではないか、一時に千二千萬幾萬の外人が來遊する場合に、東京市は果して彼等を滿足せしむべき設備をなし能ふであらうか。萬國大博覧會の開設は吾人の賛成する所であるが、之に附隨する設備の到底出來得べからざるを知るもの、所謂勘定合つて錢足らずとはこれか？請ふらくは少くとも之を十年計畫となし、行る程なら不完不備の譏のない位頗る立派なものとすべしである。

▲一個深刻の活劇

野口家の慘状、寧齋氏の枯骨と共に暴露せられて、全國の人皆其事の意外なるに驚かざるなく當時日々の新聞何れも多大の紙面を割きて此事の成行を傳へんとしたりき。然るに近時或種の論者は新聞紙に報じたる事實の誤謬又は捏造多きと且つ寧齋氏の人格を傷けたる大なるとの理由を以て新聞紙の徳義を論じたるものありと聞く。

野口家の出來事は人情の葛藤、人世の紛糾、殆んど空想の域をも絶したるものあることを示したる一個深刻の活劇なり。吾人は事の眞僞を判じ、義の曲直を正すの前、須らく瞑目沈思して人世無限の意義あることを悟るべき也。

▲眞摯着實の學風

十九世紀の最大著述、ダルウヰンの『種の起源』は『進化論講話』の著者丘理學博士校訂の下に開成館に譯せらるべきを傳へ、世界文學の最大著

「沙翁全集」三十七篇は戸澤、淺野兩文學士の筆によりて譯せらるべしと聞く。

「種之起源」は經濟雜誌社より出版せられたる故立花文學士の譯書ありしと雖も今は絶版となつて坊間に顯はれず、且つ多少直譯の氣味ありて未だ此大著の眞面目を發揮するに遺憾の點尠からざりし也。開成館が此缺を補はんとするの擧に出て、且つ校訂者として丘博士に依囑せるは最も其人を得たるものと謂ふべし。

沙翁の作にして我國に紹介せられたるもの決して二三に止らざる也。而かも梗概にあらざれは飜案、偶〻忠實なる飜譯あるも幾多の缺點を有し、曠世の大詩人は其名は徒らに喧傳せられて、其實は多く邦人に知られざりし也、淺野、戸澤の兩文學士は何れも英文學の出身にして、且つ文字に通じたるの人、必ずや其効績の見るきものあらん也。

「種之起源」「沙翁全集」共に學者の精讀玩味すべき大著述なり。かゝる大著述の飜譯せられんとするに至れる、我が學術界か浮薄輕佻の域を脱して、眞摯着實の學風に向へるを察すべき也。

文藝時觀

七月文壇

孤村主人

◎新古文林の初號が出た當座は、其の編輯の體裁を難じて、屹度地方の何も、知らない連中は新古文林社にて松尾芭蕉樣とか、井原西鶴樣だとか、名家の手紙が來るだらうと下馬評とり〳〵難じたが其れも馴れて見ると、然程でもなく、そろ〳〵編輯人の機敏を說く樣になつた。何がさて當年の論客の一人國木田哲夫君がやつて居るので、作家の顏ぶれは如何かすると尤も新進派、革進派とも云はるゝ樣な人達がずらり幷ぶ。ひよつとしたら此處が文壇の中心と云はるゝ樣な時節が來るかも知れない、今度の卷頭小說の

◎田山花袋君の海上二里。面白く讀んだ。同君の作としては珍らしい書き振りて、いつもなら永々と徐景をやる所を省き、つとめて短い文章の中に意味を含まさうとした具合。一段の進境とも云ふ可き處だ。少女か海へ飛込んで自分を戀して居る若い漁夫を威嚇す鹽梅しき、田山君の思想に近く或る激變が起つたと知られた。末段になつて其の娘が漁夫の家に尋れて來て、月に背向ひになつて涙を流すのはいゝが、恁くはあるに違いなからうが何となく飽足りない氣がした。何故だか、其れは解らないが、とにかく僕は恁う感じたから、恁う評するのが自然派だらう。

◎西村渚山君の金茶リボンをも讀んだ。至極短篇だが此の作家が不思議に細い觀察の眼を持つて居る事か知られた。其の文章もなか〳〵甘味いものだ。しかも此の觀察は餘り彫琢に止まつて居る。纖弱に流れ過ぎるもつと深く見て、强い處が欲しい、奇麗だが響がなかつた。

◎三島霜川君の寒潮。何故此の作家は一つ處はがりを書くのであらう。冬の海邊之が此の作家の唯一の背景なのだ。描かれる人物もいつも同一だ。此の作家は非常な抱負を持つて居ると自分て云ふて居るさうだが、戰爭實記を書いて居る樣では皷に心細い。奮勵一番すべしだ。いくら自分で抱負があるとしても、其れは何の作家でも持つて居る事て、口で云ふよりは事實で示さなくちや否けない。三島君は此處兩三年來一つ處を往復して些の進境を見せて居ない。恁る間に他の作家はだん〳〵進步し

て行くと苦言を差上げて置かう。

◎新小說の德田秋聲君の恐物。主人公は深野英二と云ふ齒科醫の助手。之に高子と云ふ看護婦と、淺子と云ふ妾上りの女とを配合して居る。成程始終沈んだ樣子哀愁の氣味が眉宇の邊に顯はれて居る主人公の性格は全篇唯の一ヶ所も矛盾なくして能く顯はれて居たが、高子にしても淺子にしても女性の書き處が足らずして、恁う云ふ性格であると作家が斷定した割合には人物が少し朦朧として居る。恁うは云ふもの丶作家は人物の性格の書き顯はし方に苦心をして群を拔いて居る事は僕も承知して居る、只此の作の主人公の性格の樣に此の作家の作物に沈んだ、哀愁の氣味があるのが少く氣に合はない。恐らく此の欠點が取れたなら德田君は大立物となるであらう

◎生田葵山君の想はれ人。此の作家が漸々自然派に近づいて行く傾向が能く見られる。隨分思切つて書いたものだ。しかし未だ想像で書いた樣な處が見えて能くない、眞質（ツルース）を語らうと思ふなら今少し勇氣を振起して突込んで書くがい丶。世間の批難なぞは恐れる事なしに、須く突進すべしだ。

◎文藝倶樂部の卷頭は遲塚麗水君の濃眉樓と云ふのだ。いや面白くない。面白くないつと云つて讀者を莫伽にした樣に思はれる。漢文字を澤山使用する作家にしても、もの丶姿、形ちを形容するに之は又餘りて、顏を形容して居るのが文字の爲めに文字の形容をして居るのか解らない樣な處が幾箇所もある。

瀟雲微雨の夜の海に、綿津見の神嶽を聽いて波を披いて起つかのやう。

之が婦人が湯槽の中から出る時の形容である。

玉の肌から珠を蔵む胸より腰を……

些々解らないが、大方支那の小說中にある文字であらう。支那人には通ずるたらうが吾人には恁う云ふ態で時々解し難い點がある。併し若想はいつもの麗水君としては新らしい、新らしいとしても決して眞實の意義で新らしいのではなく、今迄にさん〴〵書顯はされたもので女の虛榮心を描いたものに過ぎない。若し女の虛榮心を描くにしたならば、何も恁うも管々しく長たらしく書かずに、もつとひきしめてきつぱりと描いて貰いたい。麗水君は一部の人から文章家だと云はれて居る。或意味に於ては現今小說家の先驅である。文章が書けるからお談しを書いて見やうと云ふ樣な了見で、小說を書いて小說界に顏出しするのは止めて貰いたい麗水君の名聲の上から見ても能くないだらうと思ふ。

◎恨の焰海賀變哲君の作だ。矢つ張り何處やらに懸賞作家の臭氣が殘つて居る。此の人の作は人物と人世を後景として居るのでなくて、柳盛座三崎座。舞臺の上を後景として居る樣な書振りだ。雪の中を主人公が彷徨して下駄の鼻緒を切り、寺男が顯はれて言葉を交す邊り、何故木の頭見柄よろしくあつて幕と書かないのだ。之から新らしい時代の中に働く新進作家となる了見ならもつと總ての上に研究するがい丶、只山のある事柄を讀者をつる樣〳〵に書かうと云ふ樣なさもしい了見ではとても檜舞臺には登れない。

◎此の月もいろ〳〵と新刊ものが世に出た。此の中で末の世迄殘るものがいくつあらう。三年四年と月日を經つて、月日と云ふ篩にかけられたなら、拾年經つた後でも曉の星の樣にならう、そんな野暮な事を今更めいて云ふでもないが、恁る中で或は之は殘るものでないかしらと思はる丶のは、蒲原有明君の春鳥集だ。机上に飾つて置いていつ讀んでも新らしい思ひが湧く。或人は其の詩想の範圍が狹いのを批難し、或人は其の晦澁を批難するが、狹いのは高いからだ、晦澁なのも此の作家の立場とし

て仕方が無からうと此の作家の愛讀者は云ふ或點迄は此の批難を容れればならないだらうと思ふ。

◎七人に掲載された竹林盤男氏作の竹村眾は同君の初陣の作と云つていゝ、今迄公にせられたものは皆飜譯なのだから間違なく之が處女作なのだ。僕は之を讀んだ時、處女作としては餘り聲が大なるに不尠驚いた近來の新進の小説家と云ふもの、彼の小さい所謂懸賞小説から成上つて來たものが多いんだから驚いたのに無理は無からう。第一折から第三折迄至極自然に進行して少しも無理は無かつたが、第四折に入ると俄然疾風が襲つて來た樣な心地がして、不自然に陷る終局を急いだ行爲であらうか、其れは其れにして日比公園の場など著者が大學生である丈けに善く描けて居る。僕は此の作家の將來に深く望みを屬する情を禁じ得ない、今後いよ〳〵奮勵す可しだ。此の作一つて此の作一家は優に現在作家の好地位を占め得られたと云つていゝ【完】

▲口繪の説明

グルミット(Gurmit)は北印度の名跡なり、圖の中央に存する廢塔は五重の窣堵坡にして高約十七英尺、群峯の重疊して白雪を戴けるはヤッシン地方の高嶺にして各海拔二万英尺、左右の連山は皆峙嶸たる巖山なり、圖中の人物は大谷光瑞伯一行の一部にして、此圖は伯が佛跡探險の際自ら撮影せられしもの也。



人物月旦

漫評

京都の閨秀畫家

長田偶得

其二　上村松園女史

◎女史が初めて正式に畫を稽古したのは、十二三の頃である。其頃までは河原町三條上る、今の議事堂の横丁に畫學校があつて、田村宗立が洋畫の教師をしてゐた。女史は最初洋畫を硏究する積てあつたが、到頭日本畫をやることになり、矢張同校の教員鈴木松年に就いて、初歩を學んだ。

◎女史は、幼いときから美人畫が大好きて、描いて見たくつて〳〵、仕方がなかつたけれども、學校の規則では、さう勝手な譯に往かず。猶且(ヤツパリ)唐紙八つ切りの手本に椿の折枝だの、蕨だのを描いたものから、始めなけ

ればならない。仕方がなさに、當てがはれた手本を習つてゐたが、人並に進まないので、松年から『そんな事では仕方がない、如何しても半期に二十四枚の手本を上げなければならぬ。併し一體嫌であれば仕方がないが、何か畫の中であなたの一番好きなものがありさうなものだ。其好きなものを稽古したがよからう』と言はれたので、女史は渡つに舟、得たり賢しと『妾は人物、美人が大好きです』と答へた。すると松年がそれは面白い日本畫家で、人物を滿足に書くものが少ないから、それでは一つ美人畫を描いて見たらよからうとの事であつた。

◎其頃、學校の規則で、運筆と臨摹の外に、寫生と新案とがあつた。新案は、浮世繪であらうと、何であらうと、畫風に構はず、古畫や粉本に便らず、唯だ意匠の新しいのを執るので、女史は一生懸命、新聞などを讀み、其中から畫題になりさうなのを考案してゐたが、或る日の雜報に、老婆が車に轢かれて殺された、といふ事があつた。で、それから種々考案して、老婆が人力に轢かれて苦んでゐる、巡査が立つて頻りに車夫を叱つてる、其側に小兒が串團子を食ひながら、無邪氣に眺めてる處を描いて出した。その時には、松年から畫題もよく、意匠も新しいと褒られたさうな。

◎其後一年ばかり經つて、畫學校は改革になり、知恩院の方に移轉したが、教員にも變動あつて、望月玉泉や、松年などの代りに、幸野梅嶺が這入つた。女史はこの變動と共に退校し、改めて松年の門に入り、また花鳥を研究するため梅嶺に就き、故實を調べるため榊原文翠に師事した。これは皆明治二十二三年の頃の事である。

◎女史は、美人畫を描くにあたつて、一時モデルを使用したことがある。けれどもモデルでは、靜止の姿勢が出來ても動作の姿勢が甘く行かないからといつて、此頃は餘り用ゐない。其代りモデルが欲しい時は、女史自身モデルとなり、好きな形を拵えて寫生し、夜などは影法師を障子や壁などに寫して、これを描かく。それは啻に人物ばかりでない、床の間の草花の影でも、疎かに見ないのである。

◎女史にいつも言つてる、妾は妙な癖で、唯何となく壁に向つて思を凝らすと、一幅の美人が壁間に現はれて來るから、それを絹紙に複寫するのであると。此れが實に藝術家の興會といふものであらう。

其三　前田玉英女史

◎京都の閨秀書家には、如何な人がありますると、問はれたなら、まづ指を女史に屈するであらう。尤も世間から、最も多く批難の焼點ともなつてはゐるが、獨立の門戸を張り、多くの門人を有して、兎に角一種の異彩を放つて居る。

◎どうしたものか、京都の閨秀書家は、俗にいふお座敷稽古で、女史と六人部暉峯女史の二人を除いては、いづれも油屋なり、葉茶屋なり、友仙の下繪屋なりの店に、即ち御座敷で揮毫してゐるが、中にはまた展覧會で貰つた褒状などを額にして、麗々しく店口に飾つてる人などもある。

◎女史の生國は若狭で、父なる人は、維新の初め東京に出てゝ醫を業としてゐたが、明治十四年に京都へ移り富小路の三條上るに、暫く住して居た。女史が京都の人となつたの、即ち此時からである。

◎當時、綾小路御幸町に居つた父の友達があつて、其家の娘が書を稽古しておつた。女史は父に伴はれて、其家へ行くたびに、娘の描いてる書を、傍から見てはそれを無上の樂しみとしてゐた。その頃は、確かに八九歳位であつたらう。小兒心にも唯だ見た計りでは、中々滿足が出來なくなり、始めは其娘に手を取つて貰ひ、書を描く眞似をしては、面白がつてゐたが、つひ夫が本物となり、いよ〳〵師匠を取るやうになつた。

◎さて最初の師匠は、雲樵といふ南宗書派。自宅に毎日通ふよりも、どうせ學校の教員をしてをるから、學校へ來た方がよからうとの事で、書學校へ入學し、松園などと一處に毎日やつてゐた。處が南宗派の書は、題賛を入れるのが法式であるから、たとへ書が描けても、書と共に多少漢文の素養がなければならぬ。女史の力では、どうしても之を兼修することが、六ケしいので、四條流に轉じ、望月玉泉に師事することになつた。

◎かくて通學僅か半歳ばかりで、退校せなければならぬ事情が起つたといふのは、其頃父なる人が亡くなり、母と姉とが大阪へ移るので、女史も勢ひ一人京都に留る譯には往かなくなつた。けれども折角やりかけた書道を、中途にして廢めるも殘念と。女史のみは京都に殘り、望月玉泉の家で世話になつてゐたが、二十三年、家塾の規則で卒業となり、二十五年の八月から、府立の高等女學校に圖書教員を拜命し、今に引續いて奉職

して居るのである

鬼面魔語

酔美生

▲鏡に向て呼吸すれば其鏡必ず曇る。されど一度其曇を拭ひ去れば再び呼吸するも容易に曇ることなし。藝者上り、女郎上りの女房が、往々箱入娘の妻君より貞操なる、亦此理によるならんか。

▲女湯の流しに三助を用ふるは、男患者の介抱に看護婦を使ふの不都合に似たり。

▲帝國文學にて見るに足るべき唯一の評論は天聲氏の詩壇漫言なり。輕浮ならず、驕慢ならず、諄々として詩歌の本領を說き、温乎として詩家の長短を指摘する所、吾人は氏に於て詩歌を愛戀する一箇篤實なる學者の面目を見る、

▲ホトトギス第百號は漱石氏の「幻影の盾」及び「吾輩は猫である」の一節を載す。今や坊間賣切となつて三十錢の雜誌六十錢にあらざれば買ふことを得ずと。洛陽の紙價をして高からしめしとは眞に漱石氏の謂か。

△一人の狂者あり。世俗はたゞ之を狂者として觀ずるのみ、醫師は診察して狂的となれる經過を知ることを得るのみ、而かも其狂的となれる最初の動機に至つては、獨り人情最奥の秘密を聞くべき鍵を有する詩人のみ之を解することを得べし、詩人は人間最高の審判官たるの意味實に此に存す。

▲ツンと强れて見せる女は少しく男を操るの術を知れり、シク〱と泣いて見せる女は稍々多く男を擒にするの法を解せり。女にして若し强れて且つ泣いて見せるの手管を辨ふれば、男を操ること花屋敷の操人形の如く、男を擒にすること習志野の露助の如くすることを得べし。

▲大隅太夫。伊達、長子等を率ゐて歌舞伎座に乘り込む。而かも其人氣攝津の時の十分の一にも至らず、聽客ガラリとして物淋しき程なり。これ大隅の技藝攝津より劣れるが故にあらず、只其名聲攝津に及ばざると、俗受攝津に若ざるとの爲めのみ。

▲攝津大掾、年齢七十、而かも美聲みづ〱しくして未だ三四十としか思はれず。これ攝津唯一の取得なり、されど其美聲さへ寧ろ唄聲にして所謂義太夫聲にあらず、殊に情を語るの一段に至つては彼の到底能はざる所、義太夫の上より之を論ず、彼は寧ろ「拙の大將」と名つけらるべきもののみ、故小松宮殿下の御贔負を忝うしたると、世俗の人氣に投じたるの故を以て、分外の名望を贏ち得たりと雖も、彼の名望に迷うて其巧妙に和同するもの、偶々其耳の肥えず、其趣味の低きことを暴露するに過ぎざるのみ。

▲大隅太夫其顔達磨の如く、其鉢大臼の如し。其聲には錆びを帶びて、其調には無限の味あり。會話自然にして人物の性格一々明瞭にあらはれ一道の靈氣人の肺肝に迫りて、聽客をして直ちに語物中に惹き入らしむるの手腕、確かに斯界の大立物なり。

▲予今回大隅を聞くこと三回、合邦、松波、すしや是れなり、合邦最も宜しく、すしや之に次ぎ、松波最も劣れり、劣れりと雖も藤作の焼上戸の自然なる、行綱の性格の活躍したる、決して尋常の技藝にあらず、合邦の娘を刺殺して怒る所、娘の心底を聞きて悔み嘆く所、悲壯深刻、滿場の氣を呑み盡して、泣き得るの餘裕さへなからしむ。團左衛門の權太を刺し殺す所、權太の「ホ、其御二人樣と見へたのは」のあたり、異曲同巧

技藝絶妙の域に達して殆んど他人の追從を容さず。かゝる一篇の中心のみならず、入平の如き端役に至ても其の自然、其輕妙、到底伊達のクスグリの及ぶ所にあらず。予は大隅の入氣、攝津の十分の一にも若かざるを見て、轉々東京人の趣味の低きを嘆ぜずんはあらざるなり。

▲東京パックの諷刺畫、題を選むこと頗る巧みにして、筆力亦遒勁なり。近時「度し難き衆生」の名の下に、一警吏猥褻なる繪ハガキ、猥褻畫を兩手に押ふれば、生殖衛生論、避妊法、戀愛文學等の鴬鳥更に高く飛び去るの樣を描けるが如き、一面衆生の度し難きを示したると仝時に、他面に於て我警視廳が人間のなし能はざる所をなさんとするの愚にして妄なるを諷刺し得て妙なりといふべし。

▲スペンサー曰く、社會を改良するは鐵槌を以て凹凸ある葉鐵面を打つが如く、一方の凸を平かにすれば、忽ち他方の凹をして凸ならしむべしと。余は我警視廳が此語を三唱三省せられんことを望む。

▲人と對談して始終對手の顔をヂロ〱と見て、而かも毫も其人物人格の如何を了解し得ざるものは凡人なり。一目見て、或は全く見ざるが如く見えて而かもよく其人物人格の眞相を看破し得るものは傑物なり。

▲「實は美男ならざるも金持ちの家に嫁入し、夜は金持ならざるも美男の家に嫁したし」とは鳩翁道話中の最も皮肉なる一節なり。「よくも人情を穿つたもんだわれー」と今の若き御婦人達は感嘆遊ばすに違ひなし。

▲天鼓誌上栩々逸人の「男と女」よく出來たり。栩々逸人とは恐らく嶺雲氏の別號なるべし。

社會

上野公園

上野公園の沿革

二葉生

上野公園の事を記するには、先づ遡つて其歴史を調査する必要がある。グツトの昔は忍の岡と云ひしてとも古史に明記しあつて、種々の考證などもあるから確實のものだ。能く讀書に引用されてある回國雜記に『次の日淺草を立て新羽といへる所に赴き侍るとて、道すがら名所とも尋ねける中に、忍ぶの岡といふ所にて松原の有けるにやすみて、』と前書ありて

霜のゝちあらはれにけり時雨をば
　　しのびの岡の松もかひなし

とあるにても、正しく今の上野あたりなるを證するに

足る。

又往土圖說、江戸志、江戸砂子、江戸名所圖會等の諸書にも種々に書き傳へられてあるが、今より四百四十九年前、長祿年代の地圖には不忍の池はあるが、上野といふ名樣はなく、現時の上野と思はるゝ邊に代山村と云ふものがある。此處を古城址なりと云ひ、城山と書きしものもあるは、蓋し代山の發音同じき處から城山と書しにあらざるかと思ふ節もある。天正の後今の上野の邊は津輕越中守、藤堂和泉守、堀左京亮三家の屋敷であつて、上野と稱するは此頃からだとも云ひまたそれより以前既に上野の總稱ありとも云へど、それ等の斷案は博學なる讀者にお任せ申すとして、史徵黑室考證に初め天海(中略)一寺を江戸に建むと欲し藤堂高虎と議し、其別業上野を相して幕府に請ふ、時に元和九年なり、明年(寬永元年)幕府之を允し工作料を賜ふ、又明年工竣る、東叡山圓頓院と號し後に寬永寺と改むとあるにて此寺院の創建を知るに足る。壯嚴華麗を極めたも明治戊辰の役に、多くは兵燹に罹つて僅かに其幾分を今に殘すのみである。

その後に至り明治六年三月公園に編入せられて、宮內省の直轄する處となつた。園內の總坪數は實に十六萬九千百六坪にして、全山の樹林欝蒼し都下の公園中第一のものである。

園內にて今も殘る名物または重立ちし建物では、東照宮、御靈屋、兩大師、淸水堂、穴稻荷、大佛、不忍辨天、博物館、動物園、閑々亭、商品陳列場、パノラマ、美術學校、美術協會、音樂學校、圖書館、精養軒、梅川樓、三宜亭、樹木では長古の松、龜の子松、相生の松、秋色櫻、二段櫻、吉野櫻、彼岸櫻、糸櫻、二本杉、羅漢柏、グランド將軍の紀念の樹、等にて、墳墓には彰義隊の墓、法親王の陵墓、藤堂高虎の墓などもあり、其他記する事は澤山あれど、大方は人の知る處であるから、詳記する要もあるまい。

不忍の池の沿革

不忍の池の名は、忍ぶが岡に對して後世稱せしものであらう。古は篠輪津の池と云ひたる由武藏風土記にも出てゐるが、此書に就ては充分に信用を置かれぬ節もあることだから、何うであらうか。また忍ぶが岡につきし池で、しのぶが池なりとか戸田義睡は云つてゐる。

この池は中々古きものにて、長祿年間の古圖によつて見ると、荒川、神田川、淺草川に通じた非常な廣大

なものらしく思はれ、古來言ひ傳ふるには池中に十一ヶ所の堀抜井あつて、いかな旱魃するときでも、此池水の乾燥することはないとか。而して現今池の周圍は十二町二十一間あり、その面積は十三町二畝にして東西二町五十一間、南北四町三十一間あるのだ。

往古には素より中島はなく、中島を築き辨財天を安置したは、上野東叡山を草創した後のことで、水野伊勢守天海僧正と協議して、寺を叡山に形どりしより池をも琵琶湖に倣ひ、中島は竹生島に模したのである。で、其當時は今の如く地續きになつて居なかつた。寛文年間――寛永年間の改修より凡そ四十餘年の後――より地續きとなつたのだと舊記にある。

又この池に蓮を植しも其頃であるが、天明六年の七月――今より百二十餘年前――に大洪水のあつた際、蓮の根も洗ひ去られて、可惜各所も名のみとなり終らんとしたが、漸次また增殖したものと見え、五年を過ぎたる寛政三年には、所々に蓮の花も咲いたよし、井上某が同じ年の六月七日に不忍池に蓮の花を觀るの記に書きたりと、俗耳鼓吹と云ふ隨筆に書いてあるさうだ、われは不幸にして未だ其書を見ないが、信ずる書に斯く記しあるから、暫らく其說に從つて、一寸こゝに受賣りをして置く。實は此原稿を書くときに調査してゐる猶豫が無かつたからで、決して無性を極めた譯では無いのだ。

公園内のいろ〳〵

園内に散在する處の種々のものに就ては、詳細に案內的に記するときは、中々一回や二回にて盡きるものでないし、それ等の内部に切り入つて秘密を曝露するには、勢ひ攻撃に陷る嫌ひあり。で、風紀を害せざる限りのものは、左ほど八釜間敷言はねばならぬ要もないから、その物の簡略な歷史沿革位で止めて置くことにする。畢竟公園の風紀に關する事實を說き、取締の注意を惹起し、東京隨一の公園中に棚引いてゐる惡い空氣と、魍魎を退治して貰ひたいが趣意であるのである。

東照宮は寛永四年の創立にして、入口の木製の鳥居は榎本六兵衛が獻じた、次の石の大鳥居は酒井雅樂頭の獻ずるところである。又當時各大名より獻進せし石の燈籠は二百八十基あり、唐銅燈籠は五十基あつて、輪奐の美を極め、明治九年に至り又石の燈籠二十五基を建つ。

博物館は坪數三万二千五十三坪六合あつて、其表門

はもと上野御本坊の門を修繕して其儘用ゆ。この館は明治十一年三月の起工で十三年二月に竣工し、十四年の第二回内國勸業博覽會に美術館となし、其後山下門内に在つた博物館を移したのである。館の庭園内に有名なるものあり、曰く六窓庵、曰く石燈籠俗に化燈籠と云ふ、曰く五角堂、曰く校倉、曰く傘亭、曰く草蔓堂等である。抑も博物館の最初は明治四年にして九段坂上大學南校内に設け、其後幸橋内元の鹿兒島藩邸に移し、十四年の一月今の處に轉じたのである。

動物園は明治十五年此處に設けたのである。此地は清水谷と稱し、元上野三十六坊中の寒松院の庭園で園内の閑々亭は藤堂高虎が大獻公の休憩所に築きし茶亭であるのだ。云ふまでもなく珍らしき種々の動物を集める、その飼養料のみにても一ヶ月約八百圓を要すると云ふことである。

東京美術學校は元教育博物館の在つた處で、明治廿一年十二月此處に移し、翌年二月より授業を始めたのである。

音樂學校は、明治十三年三月本郷の文部省用地に設け、廿三年二月十二日現在の地に移轉したのだが、此敷地は七千百十八坪七合餘ある。

東京圖書館は明治五年に始め、舊大學講堂にあつたが、十八年六月より上野公園に移した、當時の書籍は七萬二千四百七十三冊より無かつたのである。夫より漸次擴張して今日の如く稍や完備するものとなつた。

兩大師は即ち開山堂にして寛永寺の開山慈惠大師と慈眼大師を祭祀するところ。

彰義隊の墓は明治初年五月十五日徳川氏の爲めに、此處に立籠つて戰死した勇士の墓で同八年に建てたものである。

清水寺に就ては種々の縁起もあるが、今の堂宅は元祿十一年に建立したものと云ふ事だ。

パノラマ館は明治廿三年に始め、廿九年八月當時の地位に移したのである

●●●●●園内の風紀

この公園は、宮内省の管轄に屬するだけあつて、風紀といふ事に重きを置かれて居る。で、淺草の公園の如く、深川の公園のごとく、將た日比谷の公園の如く、表面に現はるゝ醜體は甚だ少ない。また少なくなけねばならぬのである。

割烹店に梅川あり、西洋料理に精養軒あり、茶亭に三宜亭あり、外數軒の茶亭もあるが、何れも醜體を表

に現さぬは誰れも知る通りて、上野公園の價値も亦こゝに存するのだ。畢竟するに若し醜體を外面に露出する如きあらんか、此處に於て營業する事が出來なくなる其點は尤も取締の行屆きゐるを喜ぶのである。けれども裏面に至つては、風紀を以て公園の神聖を害するよりも尙ほ甚だしきものがある。

其事實は詳細に說かんと欲するも、說く能はざる理由があつて、筆を走らす事が出來ないのである。ア、遺憾！遺憾！。

何れの處に如何樣の秘密が伏在さるゝかは、以上の理由があるので筆を愼しまねばならぬが、公園の周圍に於ける魔風は、園内のあるものをも吹き靡かせ、凡吏凡夫との間には甚だ惡むべき所業がないでもない、神聖の笠を被きつゝ糞土の雨露に潤ひ、得々として口を拭き、浮世は兎角に花は紅、柳は綠、世間並の御多分に洩れては人間に生れた義理が立れずと、飛んだ屁理窟を捏ねかへして、ノホヽンで濟すは……オット餘り口が……いや筆が辷ると大變だ〳〵。

不忍池畔の夜

池をめぐる舊馬場へ架する小橋に、花見橋、雪見橋等の名稱あるも空しからず、橋畔に立つて眺むれば、春の花は蓊鬱たる常磐樹の間に點々彩りて、其風景佳絕なるものがある。また冬の朝の雪は皚々として、樹梢を裹みたる光景、雅致謂ふべからざるものがあつて花に雪に橋の名に背かぬ趣きはある、けれども花に浮かるゝものは花見橋に頰杖ついて、眺望するのみにて堪能するもの無く、雪見るものは雪見橋の邊に佇立して、池を隔つる忍の岡を稱するは甚だ稀れてある。然れば盛夏より秋の初めにかけて、池中の蓮華を愛するものゝ多きかと云ふに、之れを愛し、態々池邊を逍遙するものは、猶更稀れと言ねばならぬのだ。

斯ういふやうに觀察を下して來ると、不忍池畔は實に寂々寥々てなけらねばたらぬ事となる。が、夏の夜は納涼をかねて、殊に月明るき夜半には、三々五々手を携へて、池邊を彷徨するもの尤も多く、時に或ひは緣日なとでもあるかと疑はしめる事さへもある。扨てそこでだ。此の三々五々手を携へて散步する連中を、仔細に觀察すると是れは〳〵と驚かねばならぬ ものが、頗ぶる多き數を占めて居るのである。

若い男と若い女か擦れつ絡れつ胡蝶の戯ふるゝやうに、如何にも樂しさうに如何にも睦しさうに散步するを見るは幾組。夜風にひら〳〵と動くリボンから、香

水の馨りがプーンと鼻の孔を衝くもあり、擦れ違ひさまに汗臭い匂ひが、氣持惡く襲ひ來るもあり、口善惡なき職人連らしき半纏着や、七五三五分ましの仕立に意氣がる鼻唄の一群が、お手柔かに願ひますぜ、えッ畜生奴と歎息の聲を聞くも珍らしくない。扨て、先づ女の外容から解剖して見ると、リボンの束髪先生は云ふまでもなく、近頃社會を聳動してゐるところの女學生風である。それが果して眞正の女學生であるやら、將たまた女學生を裝ふ良家の處女であるやら、それとも女學生を眞似て、さうして社會の風紀を紊亂する處の怪物であるやら、一見識別するに困しむのだ。

けれども其種類を大別すると、女學生――非女學生、即ち一種の營業者――下宿屋などの女中、外出を不審がる人もあらうが、此間には種々の理由あり因緣ありさ、消息通でなければ首肯することが出來ぬかも知れぬ――お轉婆女――女工等が重なる部分を占めて居る。而して是等の相手となる男性の種類は何うである此の區別は中々容易でないが、十中の七八までも學生である。他の二分か或ひは三分は、多く下宿生活をする月給取、否らざれば座敷借りをして漸く娑婆の風を受け、將に一人前にならんとするもの、是れには地方の學校出もあれば、復た學校出でも無いのもある。この二種類の男性は、女學生、非女學生、下宿屋の女中お轉婆女等と尤も接觸して居るが、女工なるものとの間には鐵條網が結ばれてあるかの如く、甚だ餘所〱しい光景を呈してゐる、女工等の尤も接近して、尤も親密の關係を持つ處のものは、所謂類は友なる工場の男工どもに多い、是等は自然の結果から來たる處の現象であらう。

て、眞正の清い戀愛に至つては、扨て何うであらうか。彼等の散歩する體裁から推測して見ると、戀愛といふものが。如何にも醜體を現はして居るやうに見え時に嘔吐を催すごとき振舞があるのだ。

廣小路の大時計の針が午後の九時を指すころから、舊馬見所前彼の日清戰役の紀念として飾られてある、鎮遠の錨が兩々相對して屹立する邊を散歩して見たまへ、必らず一組二組の男女相會して低聲私語するを見ん。而も其態度の拗るが如く媚ぶるが如きものあるは女、得意なるが如く慰藉するが如きものあるは男、何故に彼等は斯くの如く爲しつゝあるか、多く語るの必要はあるまいと思ふ。

不忍池畔に於ける昨今の夜景、以上の有樣であつて

三橋の入口より茅町へ出る處までの池の端には、不潔分子を含まない眞面目な營業者は幾軒かある。遠く眺むればイリミネーションを點けたるかの如く、軒燈の輝やきゐるは何營業者であるか、云ふまでもない魔所である、魔窟である。その光を薄ぼんやりと浴びる池邊も兩三年以來夏の夜の光景、轉た慨歎に堪へざるものとなつた、况して當年の如きは層一層甚しきものがあるやうに認められる、聞く處に據れば、神田本郷あたりよりも電車の便を應用して、女學生非女學生が多く散歩に來るとか、アヽ彼等の散歩、散歩！この奥を叩き出して見れば何うであらう、散歩とは金儲？はた安直戀の代詞名？

林中の黑影

上野は神聖な公園として、われ等に不愉快の感じを與へざる清潔な公園として、俗塵を拂ふて散歩せんとする處である。然るに納涼に適する不忍池畔は、前述の如き忌はしき光景を呈し、不愉快の感じを與へつゝあるのだ。又園内の諸事物々に就いて仔細に調査し來れば吃驚仰天せざるを得ざる事實の、瞳眸に映じ來るは是非のない事であるが、啻にそれのみでない。

晝間は流石に左ほどの醜狀も目擊することは無いが、夜陰になるとイヤハヤと歎息せねばならぬ事が多くあるのだ。風俗上の取締といふものは、兎角疎雑なもので、待合の奥座敷に影法師がうつても、個人と個人の秘密は下から仰いで其儘になるのだから、林中に於ける關係などに至つては、殆んど無警察の如き感じがする。併し其筋だからとて、之れを輕々に觀過して居るのではあるまい、けれども出沒自在なる魔物の巧妙なのであるかも知れないのだ。

別して夏向きになると、東照宮の裏手から動物園の横手へかけ、兩々相對する黑き影を、薄ぼんやりした瓦斯燈の光に認めることは出來る。その影は此處のみでなく、パノラマの横より美術協會のあたりにも認められる。また新坂上の廣いところにも認められる。是等の多くは池の端の散歩からこの邊へまで踵を移すもある。又こゝ等を以て本陣とするもある。

若し疑ひを抱く人あらば、其邊を漫歩して見れば論より證據、意外の處にガサ〳〵と云ふ音を聞き、不思議な笑聲が意外なあたりより洩るゝ事がある。蚊に喰れながら、風通しの悪いところで涼を容るゝ人もある筈はないこと、况して暗き木の蔭足下も覺束なき處、木の根に躓く恐れのあるをも忍びて…、曲者！曲者！

こゝ即ち秘密契約の成立所である、契約の成立したときは、匆々山を下り西し、東し、南し、北して旅人宿の行燈ある家に入るもある。また表の戸一枚は十二時すぎまで開き、奥にぼんやり燈火の點いてゐる家へ這入るかある。また手を携へて下宿屋の階子段を昇るもある、否らざれば木陰に談話すること數十分にして袂を分つもある。

この光景を見るときは、上野公園もまた淺草のそれ、日比谷のそれに劣らぬ。切めては此公園だけも神聖なものして置き度いものであるに、嗟吁々々。

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内葉書に限る▲締切は毎月十八日

▲人と魚の死骸の差　岐阜　木魚生

世上で何か御目出度い事があると尾頭付の魚を食膳へ上ぼせて目出度がつてるが、其目出度と云ふ品は魚の死骸だ、人で云ふと死人即ち尤も不目出度い骨頂の佛様なのだ、然し同じく動物とは云ひながら人類と魚類との差違は茲に反對にして且つ重實なる差違を生じた

▲出産を廣告せよ　本郷　殖民大臣

人が死亡すると新聞へ其旨を廣告するが、産れた時は大抵しない様だ、此世から除失しる事即ち人生の行旅の終結を示す位なら之から世に現出して大に國家社會の爲めに働かんとする其大にして有望なる世路の發程の第一歩、語を變へて云へば出産を廣告しないのは抑事の前後輕重を辨へざるの最も甚だしき者と云ふべしだ。

▲奇なる町名　ぽんと町　玉毛太郎

東京の町名の中には中々奇抜なのがある、僕の様な氣の早い奴は其町はどんな町でどんな家が有てどんな職業のどんな人間がどんな生活をしてるか探検に行かふかと思ふ程だ、神田區の蠟燭町、臺所町、京橋區の桶町、大鋸町、炭町、芝區の巧運町、老僧町、麻布區の狸穴町、猶一層珍なとば牛込區の破損町に小石川の掃除町などで此等は如何なる理由で此の如き名を附したか流石わかりのよい我輩と雖も迚も分かり兼る

▲人類の相場　下谷　變人

人類が宇宙間で何よりも一番えらい者だと自稱して一人で威張て得意がつてるが、其人類の内で、男の一番よいのは英雄とか聖人とかで、女では賢妻か賢母と相場が定まつていくら其以上に成らふとしても結局其以上に古來何千年間何程と數の知れない位の人が成れない所か見ると案外つまらない動物ぢやないか

▲夫婦和合髪　神田　研究家

庇髪は攻撃されて段々減少する様だが、之は我家庭の爲めに大に發達させたい者だ、未婚の女學生が結ふからいけないので、之を嫉妬深い妻君が結ふとよい髪だ、夫は僕は未だ見た事はないが女が悋氣する時は富士額たると御出額たるを問はず必ず額際に二本の角を出すそふだ、が之に結ふと二本の奴が匿くれて見えない即ち心理的表情が顔面に現はれないから玉の御顔に何等の變化なく不相變美しいから其人も内にこんな美し

い要君があるのに外て遊ぶのは馬鹿〳〵しくなり自然浮氣をやめ夫婦和合家内安全となるのだ、嗚呼大なるかな庇髪の効やアーメン

▲細君携帯　京橋　カバン屋小僧

細君と一緒にと云ふ事を細君携帯てと云ふ人がある、まるでカバンか信玄袋でも持て歩るてる様に聞こえる、此言葉を深く觀察して静に勘考すると、其人の心では細君を無機物のカバンや信玄袋と同等の資格にして我所有品なりと云ふ極めて非文明的の思想を懐いて居るに違ない

▲豚の遠吠　牛込　明快生

凡そ物品を觸れ賣りして歩るくには其呼聲は其の賣品の何なるかを尤も明瞭に市中の人に聞ゆるを要す、然るに我東京の豆腐賣の呼聲は如何、習慣上其の物たるを知るを得れども初めて之を聞くの人に至りては大に惑はざるを得ず、恰も豚の遠吠の如き奇聲を發して満都を縦横に日に何回となく行商す、然るに此奇聲を發する商人に依て賣られたる豆腐を奴とし八杯とし田樂として賞美する我東京市民は即ち豆腐を食ふと共に豚の遠吠を合せて賞美するの人たるなからんやだ

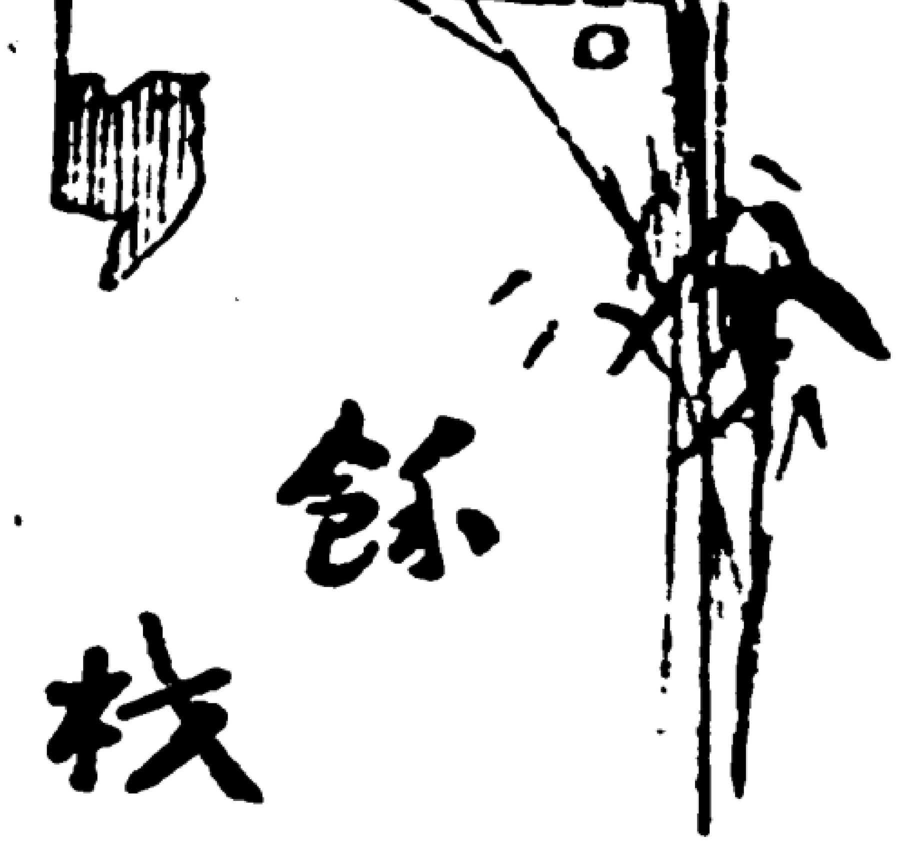
▲進化論に反對　名古屋　佳平

人間は猿より進化せしものなりといふは進化論者の説なれども、有史以來五千年いまだ猿が半人半猿の動物を生めりと云ふを知らず又頭だけ人間で胴体が猿なりといふ進化の中途にある動物もあつたと聞かず、敢て世の進化論者に質す

▲新案賞狀　宇都宮　三北生

賞　狀　畑野田五作

右者道路修繕費中へ金百圓寄附爲致候段氣ノ毒ニ候事　土木縣



都々逸道徳學

序　飛燕容

神ぞうれしきおや長松さん、曰く戀ぢや、曰く愛ぢや、ナホンちとかぶれさうなり、庶癸聞き玉へ、これは神の默示によりて、作られたわけでもなく、地藏様が夢枕にたつて、善哉々々と云はれたわけでもなし、世の星の詩人菫の式部、ひつくるめて當世の善男善女の、ラブの講義の參考にもなれかしと云爾、めでたくかしこ

第一課

總論

我は人の子なり、神の子に非ず、我はエブの商なり、サタンの子に非ず故に我は神たらんことを冀ふが如き、無謀の野見を有することなし、さりとて悪魔とならんを欲するが如き、心得違ひの考をも有せざるなり、

我は人の子と生れたり、終に人たらんなり、これ我が願なり、希望なり、主義たるなり、

人とは何ぞや、人たらんとは如何なる事ぞや、先づ吾人をして徐ろに、人類の理性に就て知る處あらしめよ、

人唯か苦を欲せんや、人誰か喜びを嫌まんや、悲みを誰か願はんや、快樂を誰かこばまんや、これ自然なり、天理なり、嗚呼終に人類の理性ならずとせんや、然り快樂は人類の生命也、人類の理性也、人類の根本なり、人類の終結なり、

人類が生活し、運動する所以のものは何が爲めぞ、曰く富貴か、曰く名利か、境遇により、氣候により、人種により教育により、無論一様ならざるは言を俟たずと雖とも、畢竟するに詮じ來れば、快樂の二字に外ならざるなり、然く人類は快樂主義なり、快樂は實に人類の根本なり終末なり、

試みに思へ、凡そ人類が、或る大災の渦中に卷き込まれ、或は酷貧の網に縛せられて、其手より食を奪はれ、其身より自由を奪はれ、其靈魂より快樂を奪はるゝや、彼等は其手を振り、其足を鳴らし、喉をからして救ひを天に叫ぶにあらずや、これ人の情なり、自然の性なり、宗教家はこれを以て、人類は先天的に宗教心を有すとなす、吾人は同じく之を見て、人類は先天的に、快樂主義なるを證して餘りありと信ずるもの也、彼等が天に叫ぶは、苦より我を脱せよと云ふにあり、憂きより我を救へよと云ふにあり、貧より我を免れしめよと云ふにあり、豈に夫れ快樂を我に與へよと云ふに非らざるなきなからんや

人類は快樂主義なり、吾人は快樂主義なり、快樂とは何ぞや、乞ふ吾人をして少しく之れを研究せしめよ、

快樂とろ何ぞや、吾人は今此處にこの問題を揭げて、あまれく人類の答を集め、徐ろに研究する處あらんとす、答に曰く、快樂は名譽なり、又曰く快樂は富貴なり、又曰く勳爵なり、又曰く贅澤なり、曰く食ふことなり、曰く飲むことなり、曰く見ることなり曰く着る事なり、曰く何なり曰く何なり、

一般の人類より得たる答は概れ右の如かりき、然れども吾人は、之れ等に首肯すること能はざるものなり、何が爲めぞ、曰く他なし、快樂に對する理想が、あまりに幼稚に、あまりに下賤なるを以てなり、唯或人の曰く戀なりといふ答を得るに至りては、吾人は然りと應せざるを得ざるなり、然り吾人が快樂の理想は即ち之れなり、快樂は戀なり愛なり、豈他あらんや、如何となれば戀愛は快樂の最上なるものなればなり

何を以てか戀愛を以て、快樂の最なりとなすか、乞ふ暫く我が言ふ處を聞け、

明言す、我は名譽を冀はざるに非らず、富貴を喜ばざるに非らず、勳爵を寄しがらざるに非らず、贅澤をしたくなきに非らず、以上のもの亦必ず快樂の分子なり、されども思へ、雲鬢蛾眉鈴張りの眼體にして、水のしたゝるかを疑ひ、薔薇色の頰、眞紅の唇、莞爾として珊瑚の齦に、水晶の細かき齒を少しく顯すや、婉として我を忘るゝが如き美人の前には或は生死を誓ひし戀人の前には、名譽も財寶も何等の力をも有せざるに非らずや、否其戀人と、離否の間に當つては、名譽も財寶も悉く、放擲して顧みざるに非らずや、勳爵然り、贅澤亦然り、戀人止め玉へと云はゞ、好める酒も絕ちなん、戀人食ひ玉ひぞと云はゞ、餓し死するも亦食はざるべし、夫れ然り、地上天下の物、何物も戀愛の力に敵する能はざる也、戀愛の樂みに勝ること能はざる也、嗚呼戀愛は快樂の最上たるもの也、吾人の理想たるもの也、

然れども此に宗教屋なるものあり、道德屋なるものあり、一意專心奇異

の規則を作り立てゝ、以て人類の自然性をを挽めんと力めつゝあり、遂に人類を擒にし、人類を釘づけの箱に入れ、人類の眼に色眼鏡をかけしめ、人類の耳に封蠟をつけ、人類の口に猿轡をはめしむ、然り而して甚だしい哉、之れに寛酒を强飮せしめて、以て絕えず泥醉せしめんとす、これに於てかアナクシレチレあり、バイロンあり、變にニツケたるニイチエある所以なり（どうだか能くは知らんが）

我は宗教に反對するものに非らず、道德を嫌厭するものにあらず、寧ろ大に喜び大に欲するものなり、エホバの則に從て人たらんとも欲するものなり、されども苟も人類の理性に逆く所のものは、吾人の大に取らざる處、大に惡み大に嫌ふ所たり、如何となれば、人類は飽くまでも人類として立つべく、最も天意にかなふものたればなり

かるがゆゑに、吾人は大乘小乘の大卷に敎を取らんと欲せず、新舊兩約聖書によりて敎を得んと欲せず、徹頭徹尾快樂主義によりて立たんと欲するものなり、果して然らば、人類の理性なりと云ふ處のもの、即ち快樂主義なるものには、千部萬部の經文に換ふべき法典はなきか、經書はなきか、曰く有り、大に有り、有りがたき大法典あり、都々逸即ち之れなり。

第二課

何が爲めにか都々逸を云ふ、見よや都々逸の敎ゆる所は、戀なり、愛なり、快樂なるに非らずや、乞ふ少しく都々逸を以て、快樂主義の道德を學ぶ處あらしめよ

都々逸の神は、先づ人類の心を解剖して曰く、

> 敎へず習はず覺ゆるものは
> 　慾と食ふのと色のみち

穿ち得て妙と云はざるべけんや、これ人類の自然性なり、人類の先天的理性なり、而して慾も食も終に色のみちの快樂なるには若かず、これ色のみちを最後に云ひし所以なり、

又人類の、自由を學び、束縛を嫌ふの情を歌つて曰く

> 飾る花壇の窮屈よりも
> 　姿しや野菊の亂れ咲き

宗敎屋あり、道德屋あり、人類を花壇の飾り物たらしめんと力む、飾り物となし得て、以て何よりエライ事を仕出來したりとなす、愚も亦甚だしいかな、人類の性情は決して花壇に飾られてシヤッチョコばり、麻裃に四角ばるを喜ぶものにあらず、これ自然性に逆へばなり、然れども快樂とは放縱の意にあらず、これを混ずるは儉と吝とを混じ、活潑と亂暴とを混ずるものと別あらんや、故に又敎て曰く

> 中がよいとて禮儀をかくな
> 　圓と云ふ字もかどがある

これ其放縱たらんを戒めしものなり

放縱と快樂との間、歷然たる堺境なきは、恰も儉と吝とに堺境を見るなきが如く然り、或程度までは快樂なり、されど或程度よりは放縱たるなり、今吾人は法語を用ひて、いさゝかこれに區劃の線を引くを得んか

> 惚た同志て氣樂な暮
> 　花の咲く日を朝寐坊

これを放縱なりと云はんか、抑も否なり、而かも猶云ふ處を聞け

> どうせやけだよ斯うなるからは
> 　金も女房もいるものか

これをしも快樂なりと云はんか、抑も否なり、快樂は決してやけに非らざることを記憶せよ

第三課

紗帽緑服の佳人は、之れをヴィーナスの化身と云はんか、其涼しき眼はげにクューピットの矢なりけるよ、近づくもの誰か戀せざらんや、其矢に當らざるものあらんや、富貴も高名も擲つて、之れに近づかんことを冀ふものなり、東洋の詩人劉廷之は歌つて曰く

古來容光人羨む所、况んや復今日遙に相見るをや、願くは輕羅と作(な)つて細腰に着かん、願くは明鏡となつて嬌面を分たん、君と相向ひ轉た相親み君と双び棲んで一身を共にせん、願くは貞松を作つて千歳に老いん云々と

これ將に然るべきの情なり、アナクレオンも亦これと同一の情を歌ひ、遂に叫んで曰く、

願くは草履となりて、君の足に踏まるゝを得ば幸なりと

これを都々逸の神に聞け曰く

猫になりたや手飼の猫に
　好いたお方の膝まくら

又曰く

竹になりたやしちくの竹に
　好いたそもじの筆のぢく

何ぞ其言の可憐なるや

一日道德屋あり來つて曰く、女は寛王の末なり、何事も之れによりて亡びん、天國の門も終に鎖さるべし、地獄の道は開かるべし、近づくべからざるものなりと、道德屋の言概ね此の如し

かくて女性と相接近せざらんことをのみ之れ力む、借問す、地獄の錠は女の手にありや、將た又卿等の心にありや、吁何すれぞ夫れ迷へるの甚しき、彼等は强て自己の自然性を殺し、力めて不自然性たらんとし、引いて幾百の人類をも不自然性の不具者たらしめんとつとめつゝあり、愚と云ふもなか／＼おろかなるべし、吾人は彼等を以て人類の罪人、自然性の反逆者なりと信ぜんと欲せんとするもの也

第四課

戀愛の徑路は恰も河水の如し、其始めや岩根を傳ふ滴々の水、朽ちたる木葉の上に集り、散りたる小枝にさへぎられ、地中に入り、凹處に顯れ絕えんとして纔々、漸く一條の水となるや、時に石に隔れ、岩に激し、終に船を浮ぶるに至る大海に注ぐに終る、戀愛の行路豈これに似たらずや、頰邊紅を潮するに始まりて、漸く相戀ふに至るや、或は相樂み或は相喜び、或は相憂ひ或は相泣く、時に或は相悲み或は相恨む、此垣一重が黒鐵のと、かこつも此處なり、いとせめて夜の衣をうら返へすも此處なり、逢坂の關のこなたに袖ぬらすなげきも此處なるべし、那邊の變化恰も氷の石に隔れ、岩に激するに似たるかな、水の洋々たるは平和の容なり、戀愛の平和は夫婦なり、夫婦は戀愛の終りなり、戀愛の目的は即ちまゝになる事なり

都々逸の神は巧にこの徑路を歌つて曰く

岩にやせかれる早瀨にやもまれ
　苦勞盡して登る鮎

又曰く

鬼灯は初手にもまれて中たび切れて
　末はフーフとなるわいな

何ぞ夫れ輕妙なるや

又戀愛の可憐の樣を歌つて曰く

　　思ふ半分口には云へず
　　　云へる半分かけぬ文

とつおいつ、思ひ亂るゝ乙女子の小さき胸、誰しかくあらんかな、又新婚の樣を歌つて曰く

　　羞かしさこわさ二ッを一ッの夜具へ
　　　袖を比翼の新まくら

そゞろ當時を思はしむるものあり

又曰く

　　心嬉しきこの新世帶
　　　重い手桶もかろくもつ

さこそあんめれ、さもありなんなり

又婦女の可憐なる心を歌つて曰く

　　起すも惡いしねかすもをしく
　　　思案中に鳥の聲

此間に處する婦女の心、之れを何に例へんか、樂しきかうれしきか、思ふに如何なる詩人の筆もその心を歌ふべく、あまりに拙かるべし、唯美妙の二字を以てするの外、吾人は適當の言詞を有せざるなり

新刊批評

▲西洋倫理學史講義

文學士 吉田靜致著
冨山房發行

文科大學で最も人數の多いのは哲學科である、哲學科で最も專攻者の多いのは倫理學である。倫理學を專攻した文學士は決して尠からずである。が西洋倫理學史に就て見るべき著作を出した人は幾人あるか、實に一人もなかつたのである、早稻田の綱島梁川氏の書いた「西洋倫理學史」は斯學に關する唯一の好著述であつた。梁川氏が含蓄ある筆を以て、よく消化した事項を書かれたのであるから、讀んで面白く、味ひて趣味あること他の粗率なる倫理學の著述と撰を異にして居つた。然し紙數が不足な爲に簡潔に敍せられた事が多く、且つ最近の部を略せられた爲に斯學研究者の總ての要求を充たすことが出來なかつた。然るに今回發行せられた吉田文學士の「西洋倫理學史講義」は實に千頁近くの大著で敍述も餘程詳しく、殊に「シッヂュヰック」、「グリーン」、「コント以後の佛蘭西の倫理」等の章に於て最近の部をも稍々詳しく書いてあるから、斯學に關しては空前の大著、空前の好著といふても溢美であるまいと思ふ又文體は平易な言文一致を採られたので、梁川氏の文程に面白味はないが、六つかしい理屈を了解せしむるは最も當を得たるものであることを喜ぶ。只「ある」「である」等の結びが煩はしい程に續くのは一面言文一致に伴ふ止むを得ざる缺點であるが、今少し尠くして讀み苦しくなくする餘地はあるだらうと思ふ。又「說明して居らない」「有して居らない」などゝ「居らない」といふ言葉が澤山にあるが、これは「居ぬ」とか「居らぬ」とか「居ない」とかに改めて然るべきものであるまいかと思ふ。是等は白璧の微瑕であるが、微瑕であつても取つた方が白璧の價値を增さしむるものであらうと思ふ。「ソクラテース以前の哲學」は專らシユウエーグレルの哲學史に依つたやうに思はるゝ。又各學者の名が出る每に頭註として其名の綴と生年月を入れ、且つ其章の次に著作の書名を擧げたのは用意周密なりといふべしである。今其文體の如何なるものなるかを示さんがために詭辯學派の起つた由來を說いた一節を抄出して見やう。

　ソクラテース前に於ける哲學は主として問題を宇宙の說明と云ふ方面に向けたのであつて。倫理上の解釋は主たる問題となつて居らな

い。しかも滿足なる組織を有して居る倫理說は殆んど無いと云ふて差支ない。組織的倫理說はソークラテース以後に於て始めて認むることが出來るのである。從來の傳說或は習慣に對して疑を懷き何の意義もなく之に服從することを避け、進んで人間行爲の標準を合理的に打立てなければならぬことを認め、一般の常識的德義中には多くの矛盾を含む事を見出し、從づてかゝる常識的道義以外に一定の標準を求めんとするやうに心を用ひたるに至つて、始めて組織ある倫理主義が産れ來るものである。故に組織倫理說の生ずる前には、歷史的順序として懷疑、批評、破壞の時代がなければならぬ。而して懷疑的に且つ破壞的に從來の傳說的思想を批評して、組織的新思潮の爲めに道を拓きしものは實に詭辯學者である。(三二三頁)

實に理路井然として至極了解し易くある。吾人は此書を以て斯學に關する好著述として我學界に推奬するものである。(定價二圓二十錢)

▲しら玉姫

薄田泣菫作
金尾文淵堂發行

泣菫氏の新體詩七篇及び散文數十篇を集たものである。新體詩は少し前に出た「二十五絃」の增補とも見るべきものであつて。特に取り立てゝいふべき程の作がないやうである。一體泣菫氏の新體詩を見るに、氏は漸々想の詩人より詞の詩人に變化して來たやうに思ふ。「暮笛集」は最も情熱に富んで、最も詩歌的感情に充ち滿ちて居る。よしや文句に多少の缺點があるにしても寧ろ詩歌の本領に協うたものと思ふ。「行く春」に至つては言葉は稍奇麗になつたが感情が少しく沈靜になつて、讀んで少しく面白味が薄らいて來たやうに思はれた。「廿五絃」に至つては文字の洗錬、句法の推敲殆んど遺憾なき程苦心せられて居るやぅであるが詩歌的興味は極めて索然たる如く思ふ。これは取材の範圍が漸く神話的、傳說的方面に多くなつて、直ちに人の肺肝に訴ふべき抒情的のものを選ばれなかつた爲めかも知れぬが、氏の言葉の苦心が却て詩情の自然の發動を妨げたのではあるまいかと思ふ。例へば「公孫樹下にたちて」「暮秋野徑の石にもたれて」などは雜誌に出た當時僕等の大變愛誦したもので、手帖にまで寫して置いたものだが、今度出版になつて見ると、文字は勿論調子まで變化せられて、却て感情を動かさぬやうになつた。如何なる點まで文字や、調子に拘泥すべきものかは詩人の大に考察すべきものと思ふ、僕等は泣菫氏が餘りに文字調子を過重視するの病に陷つたものなることを斷言するに躊躇せぬのである。藤村詩壇を退き、晚翠又漸く聲なからんとするの際、深く泣菫氏の自重を望むのである。散文は泣菫一家の躰をなして一種頓才的詩情を見るべきである。自然の描寫は餘りに想化し過ぎて寫實的興味の乏しいのを憾とするが中には泣菫獨得の詩境がなきにしもあらずである。例へば「閑居」の一節

> 稍倦みて樋の繡眼兒に新らしき水を掬み、倉をひらき小麥をすくひて背戶の鷄に與ふ。日永ければ鼬いてゝ時に卵狙ふ例なるに、今日は雄鷄の物いましむる鳴聲だにきこえず。小さき獸すら、物盜みするには勿躰なき日和なりとしも觀ずるにや。

の如き、よく泣菫の散文の特長をあらはして居る。文かく人の參考とすべき書である。(定價八拾錢)

▲催眠心理學概論

文學士 福來友吉著
成美堂發行

福來文學士は催眠心理學に就て最も深き研究を積まれた人である。氏が大學院に呈出してある催眠心理學の論文は書物にしたら殆んど七百頁位のものであらうといふから今度發行せられた「催眠心理學概論」の二倍大のものである。此書の內容は著者の序文にもある通り「催眠術を研

究せんとする者に向つて、斯術に關する科學的智識の一班を最も簡單に供給せんとするの目的を以て」著されたものであつて「斯術に關する歷史的變遷、諸家の異說、之に對する評論、其他詳細に亘るの點は一切之を略して、唯自ら研究し得たる結論丈を說述するに止め」たものである。而して此書に略せられた詳細の點は近き將來に出でんとする「催眠心理學」に書かゝるゝさうである。章を分つこと十五、第一章聯合作用より第十五章催眠術の實用的効果に至るまで、秩序井然として、論理貫徹。紛糾錯雜したる催眠心理を說明して遺憾なきに庶幾いのである。「所論往々にして獨斷に流れ、嚴密なる科學的研究を愛する讀者に向つては、或は不滿足の點多からんと信ず」とあるのは著者の謙遜であつて、吾人は此書を以て斯學に關する空前の好著と信じ、始めに紹介した吉田文學士の西洋倫理學史と共に我學界に推奬するものである。殊に著者の文才は頗る見るべきものあり、第五章「暗示術」中「誘念法」「利用法」等の節に或は曾呂利の滑稽談を引き、或は韓非の說難、由井、丸橋の談話等を記して稍々もすれば沒趣味に流れんとする科學的說明を潤色したるは大に策の宜しきを得たものと思ふ、此等の話を見ると催眠心理學の原理は獨り心理學を研究せんとする人に必要なのみならず、又世の實務に處して人物を駕御する術を知らんと欲する人にも極めて有益なることが知らるゝのである。兎に角吾人は科學的著述の中で最も興味ある書であると思ふ。(定價壹圓參拾錢)

▲塔影

河井醉茗著
金尾文淵堂發行

瀟洒たる美本、溫厚なる詩風、蓋し文學好きの青年の座右に備ふべきものである。醉茗は實に最も古き新躰詩人である丈け、稚氣、衒氣等を脫して居るが、さしたる進境の見えざるのは著者の爲に惜むべしてある詩風も又溫厚一方で稍單調平凡の譏を免れぬ。が强て奇を衒ひ、怪を爭ふ詩人の多い今の世に一人の著者の如き人のあるのは却て珍とすべきである。吾人は詩の眞價の上よりは多大の讚辭を呈することが出來ぬが、十年一日の如き著者の眞摯と、溫厚篤實なる著者の詩風とは必ず青年讀者の好評を引くに充分なるべきを信ずる者である。(定價四十五錢)

▲女子の新職業

內外出版協會發行

女子は家庭の人である。彼等を驅つて屋外の勞働に服せしめ、又は自ら生活の重荷を負擔せしむるのは道德上社會上の一大缺陷である、速に此風を矯正せなければならぬと論ずる人は決して尠くない。吾人も女子の勞働、女子の生活費負擔に贊成のものでない、けれども生存競爭の激甚生活の困難は世の進むに從つて免れ難いのは現下の事實である、であるから若し宜しくないとしても、せなければならぬ事實があれば仕方がない、事、實に止むを得ざるなりである。食うに食はれなくなれば、身を賣て娼妓となるものさへもあるではないか、吾人は夫れよりも堅氣な勞働に向て自活の道を求むることを望むものであるし、社會も亦漸々其傾向になつて來て居るのである。此書の如きは卽ち女子が如何なる方面に向て自活の道を求むべきかを講じたものであつて、時節柄最も需用の多い書である。女子の職業を獨立思想及び德操等の方面より論じ、又各方面の事實を委しく記述して、職業を求むる女子に恐なからしめたのは實に我社會に尠からぬ益があると思ふ。職業を求めんとする女子は、惡桂庵に瞞さるゝ樣なことをせず、かゝる書を讀んで篤と身の行末を考ふべきだと思ふ。(定價三十錢)

▲凌霄花

金子薰園選
新潮社發行

萬朝報、新潮、中學世界、新小説、青年議會等にて叢園氏の選したる佳作と、白菊會同人の稿とを集めたものである。叢園氏は和歌の方面に於て吾人の最も感服して居る人である、此人の選ばれた此作には詩情溫籍、字句穩當て頗る吾人の意を得たるものが多い。つりしのぶや吊風鈴の鳴る椽先て之を開けば三伏の暑さを忘るゝに足る。(定價三十錢)

▲妙な男

菊地幽芳著
金尾文淵堂發行

幽芳氏の筆は動もすれば冗長、無趣味に流れて、純文學の製作として吾人の慊らずとする所が尠からぬに拘らず、よく讀者の好奇心を釣りて結末まで捨つるに忍びざる心を起さしむるので新聞小説としては稍々成功したものと思ふ、此書も新聞小説てあるが、まだ前篇丈てあるから完結の上詳しく評しやうと思ふ。(定價六十錢)

▲社會主義と婦人

山口孤劍著
平民社發行

堺枯川氏の序に曰く「孤劍君の文は赤熱の鐵を打つに似たり、兩腕の全力を篭め來つて其の大槌を落下すれば、火光急箭の如く迸つて八方に散亂す」と。吾人は此書を讀んて、其文の些か稚氣を脱せざることを見、從て枯川氏の序の些か溢美に流れたるを見、又其所論の吾人の所見と些か異るあるを見れども、著者の熱誠はよくあらゆる缺點を控除するも尚讀者の腦中に磨滅すべからざる一物を殘すに足れり、吾人は其主義と正反對の人と雖も此書を讀みて大に益する所あるべきを信じて疑はざる也。(定價二十錢)

▲川柳類纂

花岡百樹編
内外出版協會發行

寶暦より天明に渉る江戸の川柳を代表すべきものを蒐めたるものにして、目次を「いろは」四十八部に分ちたり、而して「い」の部には醫者、家、軍を列し、「は」の部には袴着、初夢等の知き題目を設けたれば讀者には至極便利なる編纂の仕方なり。一體今の川柳を作る人を見るに多くは古の佳句の智識に乏しく、從て屢々御淺薄露骨の譏を免るゝ能はざるなり、著者は頗る古の川柳に通じたる人と覺しく、書中の選句概ね旨味あり。醫者の中

代脈は何をこいつの氣て見せる
小兒醫者坊や坊やとにじりより

の如き一例とするに足るべし。兎に角斯道に關する好者として川柳を愛好する人士に推奬す。(定價二十五錢)

▲國家論

文學士遠藤隆吉著
文明堂發行

著者は社會學者を以て知られたる人、此書も亦社會學の見地より國家を見たる者、其論旨の要點は「權力は自然に發生せる社會現象にして其中心は主權者なり。主權者は統御の機關を創む。臣民は國家の法令に遵卒する方面に於て國家の一員たり。彼れ等は其生活の一面に於て國家の意志に服從し居るに外ならず。國家の意志は國家の組織內せしものなりといふにあり、章を分つこと三、第一章權力論、第二章國家組織論、第三章法律論となす、四號活字にて七十五頁の小册なる割合にはよく書かれたりといふべし。(定價二十錢)

▲小品千題 知識と趣味

斯波貞吉編述
平民書房發行

科學、地理、統計、傳記、文學、教育、奇聞笑話等のこと千題を選みて世界最進の知識と趣味とを記せり。(定價三十五錢)

花岡百樹編

川柳類纂

《定價金貳拾五錢　郵税四錢》

小栗風葉氏の序文

現今川柳の勃興に連れ、古句を蒐集して出版するもの少なからず、然かも多くは其の選宜しきを得ず、玉石混淆、甚しきは編者の果して其句を解せるや否やを疑はしむ、是一は編者が江戸時代の知識に乏しきの致す所なるも、一は又沽らんが爲に匆卒編纂するの罪ならずと爲んや、花岡百樹氏は余が未見の畏友なり、德川文學に精通し、殊に川柳は日夕愛誦する所、稼穡の傍ら意に適せる句を拔萃して聚集する事歳あり、眞に道を樂むの餘に出づ、彼の孟浪杜撰なるものと自ら其選を異にして、博覽精攻、取捨嚴密、句々悉く是珠玉の聯繫茲に二千餘、此集出で丶始めて斯界の權威を得たりと謂つべきなり。

河井醉茗編

青海波

詩集

定價金五拾錢　郵税四錢

『直言』評　文庫派の詩人は文壇の一隅にありて常に研鑽を怠らず、其詩風の清新にして格調の高邁なるものなきにあらず夜雨の哀婉なる破琴の秋風に鳴るが如く、清白の蒼渾なる白日の怒濤に光れるが如し、露子の優麗、白浪の幽艶、野水の綺麗、秋曉の高古、冬比古の清婉、暮潮の枯淡、皆自家の特色を失はず、若し夫れ白月、白秋、碧血兒、の新進家の詩に至りては豪快、雄渾、痛烈、悲壯、猛火逆卷き烈燄揚る處千軍萬馬馳突するの概あり彼徒勉めて倦まずんば覇を文壇に稱する難きにあらず余はこの詩集を江湖に推薦することを喜ぶものなり

版元　東京本郷區駒込西片町拾番地　內外出版協會

早稻田學報

毎月一回一日發行◎一部郵税共金拾貳錢
六部郵税共金六拾五錢◎十二部郵税共金壹圓廿錢

第百拾九號

七月一日發行

講演に中井韓國京城居留民長の**韓國**に於ける**趣味**◎藏原米國哲學博士の**立身と道義**を收め海外時事に**日英同盟の前途**◎◎**獨逸と模洛哥**◎◎**瑞典諾威の確執**外數件あり海外時論に**露西亞人は女性的國民也**◎◎マキシム、ゴルキーと**露度亞の革命**◎◎佛國を亡ぼす者は**露佛同盟也**◎◎**印度支那の防備**◎◎極東に於ける**獨逸の企劃**◎◎歐洲に於ける**新社會主義**等を收め雜纂欄に青柳氏の**清國旅行紀要**◎◎在米ミネソタ大學清水氏の**米國**に於ける**公民權**獲得の性質を論じ**日本人の歸化權**に及ぶを收めたり

發行所　東京牛込早稻田大學内　早稻田學會

賣捌所——神田東京堂——神田有斐閣——京橋東海堂

日本美術

●夏季別刊（七月分）

日本園藝雜誌　夏の巻

東京下谷上根岸町六十三番地
番話下谷一九四五

日本園藝會

夏の巻　第十七年第八號　要目 —— 八月五日發行

一部二十錢　郵稅一錢五厘
但本號限一部二十五錢　郵稅二錢

大賣捌所　新橋堂　服部書店　東華房　勉強堂
田中屋　盛春堂　世界堂　盛文堂

投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること

▲締切は毎月十八日最終便まで

▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

●但海外（淸國は本邦郵便局所在地を除く）は郵税六錢を要す

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名并に社名を拂渡局所を東京駒込局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし

一郵劵代用の場合は必ず壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらざれは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らざれは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添へられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四　東海堂
本郷四丁目　文明堂

明治三十八年七月卅一日印刷
明治三十八年八月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　淸水金右衛門

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九一九）反省社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場



中央公論

No. 197

明治十九年創刊
明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
明治三十八年八月一日發行（毎月一回）

發行所　東京本郷區駒込四片町十番地　反省社　（電話下谷九一九）

印刷所　東京牛込區加賀町一丁目　秀英舍第一工場

大賣捌所
神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四丁目　東海堂
本郷四丁目　文明堂

（定價一部金十二錢）　郵稅一錢

前號概目